

---

# ONE PIECE 『D』越える者

sidou

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

IJのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ONE PIECE『D』越える者

### 【Zマーク】

Z42180

### 【作者名】

sido

### 【あらすじ】

死後、女神様に愛された少年は夢にまで見た『ONE PIECE』の世界に転生させてくれることに…！

生前、平和に過ごしたいと願っていた彼は今度こそ夢を叶えるため行動する。

しかし、『ONE PIECE』の世界に転生した彼を待ち受けていたのは想像とは異なることばかりだった。

「ちょいシリーズ？ + コメディ + 恋愛？ + 二次創作」

## 第一話 終わりの始まり（前書き）

人生初の小説です！！

至らぬ点も多々あると思いますが宜しくお願ひします！

読んで頂いた後に感想とか、こうしたらもっと良い表現に出来ると  
かアドバイスを頂けたら凄く嬉しいです^\_^

## 第一話 終わりの始まり

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

その電子音で田代が覚めた。

眠気を振り払い、音の発信源を止めるため手探りでその機械を掴み上げ、音を止める。

まだ田代が慣れず微かにぼやける視界でその針の位置を確認する。

頭も覚醒していない為、しばしその機械と睨めっこ状態になるが一気に田代が開かれた。

(9時20分！？)

HRが始まるのは9時30分。  
自分の家から自転車で急いで行つても10分はかかるので、いくら急いでもHRは間に合わない。

(とつあえず急がなきやーー！)

慌てて指定の学生服に着替えて無造作なボサボサの頭は気にせず眼鏡を掛けて急いで自宅を駆け出た。

自転車で駆けるものの自分の体力が中々続かないため途中途中緩めながら進む。

赤信号も気にせずそのまま突っ切る。

そして念願の校門が見えはじめると同時にH.Rの鐘が響き渡った。

最後の力を振り絞りやつと着いた駐輪場から走って下駄箱に向かう。

靴を履き替え教室に向かおうとした所で自分のクラスの教師と擦れ違ってしまった。何とかクラスに居た事にしたかったのだが、ごまかせるか？

そう願いつつ擦れ違った教師を恐る恐る振り返ってみれば僅かに口端を上げてる表情をしていた。

「海道は遅刻つと

のあああああー！

そう一言発して目の前で出席簿に遅刻と書き記す男性教員。

皆勤賞を狙っていた身としてはかなり痛い。

これと言つて得意なものが無い為、皆勤賞ぐらにはと氣合いを入れて望んでいた訳だが、それももう何の意味も成さない。死のう・・・

・

そんな考えが頭を遮つたが、まあ終わつたことは仕方ないので次の目標を考えることに。

人間立ち直りが重要なのだよ。だがしかし・・・

渋々教師の後ろ姿を確認してから、俺の一年と半年を返せバカヤロー。と自身の心の中で最後の呪詛を唱え教室に向かうこととした。

H.Rが終つて直ぐにガラツと教室に入つて来た俺に一同の視線が向けられる

そこらかしこで表情はバラバラで、ニヤニヤしている奴らや、うわあといった表情をしている者、外を眺めてる奴で別れていた。

視線も痛いのでそそくさと自身の席に座る。そこで先程まで外を見ていた人物に挨拶し、そいつの後ろの席に座る。

俺の席は窓側の前からと二番目とまあ中々の席だ。

そして前の人物は外を眺めながら口を開いた。  
「珍しく遅刻か・・・」

「いやー、最近ワンピースが面白くてさー！午前3時まで何度も読み直したかわかないよー！俺は悪くないよー面白しすぎたワンピースが悪いんだよー！」

「お前が悪い」

「だつ、だつてさー」カサ  
つと小声で話している時に何かが自分の頭に当たりそのモノを確認すると紙玉だった。

クシャクシャにされているが何か書いている事が分かつた為その中身を確認してみる。

『昼休みになつたら屋上に来るよつて……！来なかつたら縛り上げるから覚悟しておけ……。』

そんな内容を確認して当事者だと思われる人物に視線を向ければ先程から一矢二矢していた奴と田が合つた。

視線をそらし再び前の方に田を向け、ため息がこぼれた。

そう、俺は今イジメにあつてゐる。

細かく言えば入学三週間でイジメのターゲットにされてしまった。

それから今まで、現在1年と半年間、そのままじき使われている。

正直もつ嫌だと伝えようとした事もあつたが、自分と同じ、こき使われている奴が目の前でボコボコにされ、足がすくんでしまった。

それからは何かと呼び出される度に買い出しに行かされる。

しかも買つてきたら買つてきて料金は払わない。今は持ち合わせが無いから貸しといて。そんなやり取りが繰り返されている。

登校拒否しようかとも考えたがそんな事する位なら辞めた方がまだマシ。しかし辞めたら辞めた後で孤児院の院長が悲しむだろうとも思った。それに元々そんな考えに廢する程、金銭面に余裕は無いし、送り出してくれた院長等に申し訳がたたない。

そして考えた末に頑張つてイジメに耐えつつ学園生活を終える事を選んだ。

そんな学園生活でも悪いことだけじゃなかった。実際今さつき喋っていた友達、山口伸也は自分の観点で物事考えている為、周り評価に左右されずに自分と接してくれている良い奴だ。

そんな友人に出会えた事はとても幸せなことだと思つ。

「それで？」

「え？」

少し考へに老けつてゐると伸也からの呼びかけだと氣付く。

「それでどんな内容だつたんだ？」

素つ氣ないが結局は最後まで俺の話しさ聞いてくれる伸也。

やつぱり良い奴だ。

さつきまで落ち込んでいた表情が自然と笑みを浮かべる。

「うんーそれでさ

「

それから休み時間の間にワンピースの事について語りだした俺を伸也は疲れつつも最後まで付き合つてくれた。

そして呼び出しがされたた休みになつたので指定の屋上に向か

う。

まあこんな時はだいたい決まってる。  
食べ物を買って来いだの、お金を貸してくれだのそんな内容だろ  
う。

そんな予想をしつつ進む度に足どりが重くなるが、気付けば屋上  
の扉。

扉の向こうではぎやははーと盛大に笑つてる声が複数。

屋上の扉を開ければ五人で鉄柵の前で囮んでいる奴らに田が向く。

その内の一人に目を向ければ向こうも気づいたのか俺を呼び出した同じクラスの奴がコチラに近付いてきた。  
そして俺を扉から遠ざけるや扉を閉めた。

そのまま鉄柵の方で戯れたわむている連中の元まで追いやられる。

いつもと違う行動に少し戸惑いつつ他の面々を見るやいかにも不良と言つた感じの人達だった。

その内の一人が、おい、と声をかけてきて、こっちを睨んできた。確か三年の人だつたと記憶してる。三年は三年でもこの学校の頭を張つてる人だ。そんな人物に睨まれ自然と田を合わせない様にした。

すると・ツチ！と盛大に舌打ちをする音がしてチラッと見てみれば余計に眉間にシワが寄つた人物の顔がそこに在つた。しかも近い・・・

「俺はこんな奴に負けたってのかよ。」

「まあまあ仕方ないって彼女変わり者が好きだつて噂だし」

田の前で怒つている三年に宥める様に言つ茶髪の人。

「てめえ！俺が惚れた女の悪口を言つとはい一度胸じやねえか！！」

そのまま俺からの睨みが茶髪の人に行くが抑制の声をあげつゝ三年の人を宥める。

「あ、あの～……」

意を決死つて話せるだらうと思つた茶髪の人には声を掛けてみた。

「ん？」

「どういつ情況か教えてほしいんですけど……？」

恐る恐る聞いてみると、ああ、とタネを返して答えてくれた。

「Uの二年のトップが好きになつた娘が君を好きだつたって話しだよ

「…………」

一瞬何を言つてるのか分からなかつた。

この現實に生まれてから17年そんな事を言われた事はなかつたし知る筈もなかつた。

何せ自分は孤児院育ちで学校の友達と関わりが余り無かつた。学校が終つたら弟妹達の世話をしてたからだ。それから学校では付き合いが悪いからもう誘わないということになつたし、自分も兄弟の相手が出来るので願つたり叶つたりだったから何も言わなかつた。

そして高校に通い始めたら一人暮らしをして良いと言われた。院長達も今まで弟妹達の世話をしてくれる代わりに友達と遊ぶ時間をないがし蔑ろなまらにさせてしまつた事を謝つていた。

しかしこちらとしては育ててくれるだけで感謝してるので謝られる義理はない。

そして高校に入学して学校が終つてから特にやることも無くなつてしまつたのでアルバイトを始めた。

学校から1時間程行つた喫茶店で雇つてもらつてゐる。わざわざ遠い場所で雇つてもらつた理由はやはり自分のイメージの悪さだ。イジメにあつてるので学校の不良が来たら店に迷惑がかかつてしまつ事が心配だつた。実際そんな連中が溜まりにする様な店には自然と客足も絶えてしまつと考えた。

なので不良達の目に触れない様な遠い場所で働く事にした。

店の人気がまたいい人で事情を話したらこんな自分でも雇つてくれた。その時働く条件としてせめて顔が見えるくらい髪を整えてくれと言わされたので仕事の時は髪をワックスで簡単に整える様にしている。

なぜか知らないが初仕事の時に店長の人が目を輝かしていた事が今でも忘れられない。

“やつぱつ変だつたでしょ？」「ひこりのま、不慣れで

“そ、そんなことないわよ！ とっても似合つてると思つわよ？”

“…・・・そうですか。”

ありがとうございます（微笑み）

“ぶはつ！”

“つだ！ 大丈夫ですか！？”

“だ、大丈夫大丈夫。少ししたら落ち着くと思つから

あの時、似合つてない髪型を気遣つてくれてるんだつて思つた。  
改めて思うとホントにいい人だなあ。でも鼻血がいきなり出るのは  
病気ではないのかと思つ。それが鉄分の取りすぎか？今度何か栄養  
バランスの取れた食事でも提供しよう。

そんな事に老けつていると田の前の不良の二年生が胸倉を掴みあ  
げてきた

「なにボーッとしてんだてめえ！ なめてんのか！？」

ああん！？と付け加えると更に腕に力が増し鉄柵に押し付けられる。

まあまあと再び三年を抑制する茶髪の人。

「それでさあ君。その人の事諦めてくれない？見ての通りこの人がいつキレて襲い掛かつて来るかも分からぬし。  
それと最近、山口と一緒に居る所をよく見るけど、あんまり調子に乗らないでくれるかな？」

「諦めるも何も自分はその人の事を全く知らないので関係のしようがない。」

それに伸也のことに関しては訳が分からぬ。調子に乗るも何も俺は伸也と喋りたいから喋るのであって別に調子に乗った覚えは無いといふことだ

「あの……その人の事は知りませんが、俺の友達付き合いではどうじつ言われる筋合いは無いと思います……」

「そう告げると不良達も意外だったのか驚いた顔をしている。しがしその驚きの表情が段々と怒りの形相に変わっていく。

「分かった。ならじつじよう。君はこれから山口の奴と口をきかない。それでこの場は勘弁してあげるよ」

全く手の掛かる子だなあ、と言つ茶髪の不良。…………だけど

「もう一度言います。俺の友達付き合いではどうじつ言われる筋合いはありません！」

一度も反抗した自分を見据え呆れたように茶髪の不良が俺のよく知るクラスの不良に命令した。

「ああ、もういいや。めんべくさい。おい、こいつシバいといて。それからまたお願ひするから」

やれやれと言った感じに茶髪の不良が頭を抱える

そして同じクラスの不良が俺の胸倉を掴み殴りうつし、思い切り腕を振りかぶった時だ。

バン！ と勢いよく開いた扉から現れた人物によつてその攻撃は遮られた。

不良達はそのまま扉の方を向いたので俺も視線を向ける。

するとそこにはこの学園の数少ない友人である山口伸也がいた。

伸也は下を俯きながらコチラにすたすたと歩んで来て2メートル位前で立ち止まる。

無言で立ちはかかる伸也に気圧され不良達も僅かに後ずさる。

## 第一話 終りの始まり2

「・・・すいません。そいつ返して貰えませんか？俺の大切なダチなんで」

その言葉と行動にその場に居た全員が驚愕した。

あの山口伸也が頭を下げ、更にはお願いをしに来たのだ。

入学当初から問題視されてた暴君に。

\*\*\*

この噂は学園では割と有名な話だが彼、山口伸也は誰も寄せ付けようとしている部類の人間で近付いてきた奴には容赦しないとか、睨みつけただけで人を殺せるだとか言われていた。

そんな彼を周りの人達は『暴君』、『人間ブリザード』等と読んでいた。

入学当初、先輩に呼び出され十人程の集まりを返り討ちにした山口伸也は、それからというもの襲い掛かって来る者が後を絶たなかつた。

一月もその喧嘩が続けば流石にそこらかしこに怪我を生おつてしまい、横たわっている伸也の前に、偶然通りかかった彼。

、大丈夫ですか！？

学園に入つてあまり良いことが無かつた伸也は当時ふて腐れていた。入学当初に喧嘩を売られ買ってやつたら後を絶たない連中にため息

がこぼれた。

「 大変！ こんなに血が出てる！」

朦朧もうろうとするなか、意識を手放してしまった俺は目が覚めたら見知らぬ部屋におり、辺りを見渡せば一つの影が在った

「 よかつた。目が覚めたんですね

それからソイツと少し話した。始めこそは落ち着かなかつたが時間が経つに連れて引き締めていた気が緩まるのが分かつた。

そうして話している内に、ふと思つたことが口から出た。

「 お前俺が恐くないのか？」

ポカン・・・。と間がひらいた後にソイツは

「 なにが？」

どうして俺の事が恐いのか聞いてきたソイツの発言に俺は久しぶりに盛大に笑つた。

自信過剰な訳ではないが自分は現在、学園では悪い意味で注目されている。そんな自分を知らない奴はこの学園にはいないだろうと思っていたが何処か自惚うぬっていた所があつたようだ。

「 悪いな。改めて自己紹介をする山口伸也だ

、俺の名前は海道。 海道 健太

それから俺は健太とつるむになった。

俺の・・・友達だ。

伸也の行動に驚いた不良達は少しボーッとしていた。

そして少しそしてから先程の茶髪の不良が話しを始めた。

「へ、へえ。お前でもそんなこと言つてあるんだ」

これは良いもんが見れた。と一人、額<sup>うなづ</sup>く茶髪の不良。

「まあ返してほしいなら、それなりの態度があるんじゃない?」

そもそも当然とソイツは言い放った。

そして伸也も理解しているのか、その膝と手を地面に付けると、再び頭を下げ始めた。

「ソイツを返して下さい。お願ひします

「ふつーくつくくくくく！だいたい、お前始めから生意氣過ぎなんだよ。入学した時にお前から受けた傷は今だに治りねえしよ。疼くんだよ。お前を見るたんびに

そう言い茶髪の不良は前髪をかき上げその傷痕を見せ付け伸也の後頭部を踏み付け始めた。しかし伸也は一向に表情を変えようとしない。

そんな伸也が気に食わないのか、更に足に力を入れる。

そして散々踏みつけた後に息切れ、その茶髪の不良はポケットを漁<sup>さが</sup>り、折り畳み式のナイフを取り出した。

興奮してゐるのか目がいきかけてる。

「・・・めろ・・・」

そんな光景を田の島当たりにして気付けば抑制の声が出ていた。

あ？と言しながらコチラを睨みつける茶髪の不良。その顔はせつきまでとは打つて変わっており、つり上がつた細い眉<sup>まゆ</sup>、残忍で興奮に歪んだ唇に瞳孔が開きがちになっていた。

そしてそれらの相貌<sup>さうめい</sup>を向けられ再び恐怖感に刈られた

「なんだお前？何か文句あるわけ？」

ナイフをコチラに向け段々と近づいてくる不良。

完璧に標的が伸也から俺に移り今にでも飛び掛かってきそうなその不良を見据え、足が震えながらも何とか言葉を続けた。

「もうやめて下さい！伸也との関係以外でしたら何でもしますから。・・もう、これ以上伸也を傷付けないでください・・・」

「・・・良いよ。ならお前、ここから飛び降りる

平然とした表情で冷淡と言い放つ茶髪の不良。

伸也の方に顔を向ければコチラを見詰めている伸也があり、その表情はやめとけと言っている様だった。それでも

「それで、やめてくれるなら・・・」

そして言われた様に鉄柵をよじ登り、柵の反対側に移動する。後ろを振り返つてみればニヤニヤと笑みを浮かべているその茶髪の不良以外の人達は三年のトップを始め、皆顔が青ざめかけていた。やり過ぎだろ。とかもう勘弁してあげればいいのに、ヒソヒソ話し合つ他の不良。

「な、なあいくなんでもやり過ぎじゃね？これで本当にコイツが飛び降りたりしたらシャレになんねえよ」

は？と茶髪の不良が三年のトップを見据えた。

「なに言つてんの？これから面白くなるつて時」

「で、でもよお・・・」

柵の反対側で言い争つてゐる不良達。

氣付くのが遅すぎた。三年のトップよりこの茶髪の不良の方が断然危険な奴だということに。

今も三年のトップを丸めこめ、再び俺に早く行けと言い始めた。

そして屋上に立ち止まつていたら自然とグランドにいた人達の視線が集まつておひ、今から何かが起きると感じ取つたのか、人も段々増えてきてる氣がする。改めて下を見れば、地上との距離は20メートル位だろうか、それに木と草の茂実があるので上手くやれば命くらいは助かるかもと判断した。

自然と恐怖は無くなつてゐた。ただ伸也が申し訳なさそうに「チラを見詰めていたが俺は笑つて答えてやつた。

いつもそうだ。危険な時は自然と笑顔がこぼれる。そしてその笑顔が諦めからなのか、希望からなのか今でもその笑顔が出て来る理由が分からぬ。

そして俺は、再び前を向き意を決して屋上の段から飛び下りた。

## 第三話 終りの始まり③

足から落ちる様に飛び出し、一瞬の浮遊感の後に一気に急降下する。落ちてる中、時間の進みも遅く感じた。

そして近付く地面を見据え僅かな希望の木にぶつかる。

足腰に衝撃が走りそのまま茂実に背中から落ちた。

予想通り木と茂実が俺の体を支えてくれたおかげで怪我はたいしたことなかった。しかし緊張の糸が解け俺はそのまま意識を失った。

\* \* \*

気付けば俺は病院のベッドで寝ていた。

あの後、意識を失った俺を病院に送り精密検査して特に問題がある所は無かつたので2、3日様子を見てから退院出来るそうだ。

俺が飛び降りた後、教師が屋上に駆け込んだそうだ。そして主犯の茶髪の不良が捕まり、様子がおかしかったことから身体検査をしたらドリッジをしていたり等、今までの悪事が芋づる式に取り出され、しばらくは鑑別所か少年院にでも送られるそつだ。

それから数日が経つた。

今では学校にも通いはじめた。

数日間勝手に休み迷惑をかけたバイト先に謝罪にも行つた。店長は

気にしていることだつたがやはり申し訳がたたない。

そしてバイトが終つてから帰宅中、すっかり日も落ちた時間帯。目の前を一人の子供が歩いていた。何処か落ち着かない感じでいろんな所を見回している子供。

(こんな時間に一人でいるなんて危ないな)

少し気にわなつたが、その子供を追い越し先に進む。

そして信号が青から赤に変わったので一時止まる。そして先程の子供が隣に来ていたことに気付き、自然とそちらを振り向いた。

するとそこには幼いが整つた顔立ちの少女がいた。今の状態からでも分かるようにその顔は将来かなりの美人になることが分かり、そしてその髪は金髪で腰くらいまで伸びており絹きぬのように艶やつやかだった。

「あの」

ふと、その少女が話しかけてきたので離れかけてた意識が戻り見惚れていた事に気付き、自身の顔に熱を感じた。

「こんな遅い時間まで一人でいると危険ですよ?」  
「・・・」

微笑みながら答えた少女。

俺は驚きで一瞬言葉を忘れてしまった。

何を言いたいのかというと、つまりそれは「チラの台詞」と言つことだ。こんなに可愛い子が夜に一人でいるなど、連れていくつてください。と言つている様なもんだ。

「貴方に危険が迫っています。すぐに家に帰つてください」

いきなり真剣な表情になつた少女を見据え、何を言つてるんだこの子は？と、訳も分からず、思えば口にしていた。

「君はいつたい」「

そこで車が自分達に近付いて来ている事に気付いた。

突然の事に驚き何かを考える前に俺は少女が弾かれない様に突き飛ばしていた。

驚いた少女は目を見開けていた。

少女が車の射程外に出た事に安心すると、ふと笑顔がこぼれた。

瞬間、猛然と歩道に突つ込んだ乗用車が俺の体を捕らえた。  
バンパーに両足をすくわれる様にボンネットに乗り上げフロントウインドウにぶつかり、更に高く跳ね上げられる。

そして地面にぶつかる衝撃が体全体に伝わり視界がブラックアウトした。

\* \* \*

声が聴こえた

『この人の魂を譲ってください』

『この方の魂は此処では馴染めません』

『私は貴方に来て一一度、この方に助けられました。死ない  
私を押し退け自身が身代わりになることも顧みず』

凛々しく響いた声は、何処か暖かかった

『感謝します』

\* \* \*

目が見える。

さつきまで視界が機能を果たさなかつたので困っていたがこれで安心だ。

辺りを見回してみれば、辺り一面、白一色の世界に俺は居た。そして「チラを微笑ましく眺めている少女の存在に気付く。

『目が覚めたのですね。先ずは感謝を』

いきなり近付いてきた少女は俺を抱きしめた。

突然の事で頭がパニックに陥るが少しずつ冷静になる。そこで事故から助けたはずの少女が何故こんな所にいるのか。そもそも此処はどうなのか。そんな思考で頭がいっぱいになつた。

『実は私、女神なの。

たまに別の世界を旅してみたくなる時があつて、それでたまたま君に助けられたって訳。』

信じられなかつた。しかし今、目の前の光景を見たら信じない訳にはいかなかつた。

『あ、それと貴方の前世。つまり海道健太の前世でも私、貴方に助けられたの』

まさか一度も女神様を庇つて死んだとわ・・・

『だから、君には感謝してるんだよ?』

上田遣いになりながら言つ少女。・・・子供つて分かつてはいるけど、やっぱり可愛いな。

『だから君に会えた時、嬉しかったなあ。全然変わらない君に出会えて私はとても嬉しかった』

どこか遠くを見つめ、しみじみと言い放つ女神。

『普通魂は時間が経つに連れて腐敗していくものなんだけど、君は何故か変わらなかつたみたいだね』

そして微笑みはどこか大人じみていた

『そんな貴方には！御礼と言つては何ですが、好きな世界に行く権利を与えたいと思います！』

えええええー？と驚いた後、高ぶる気持ちを落ち着かせ再び考える

健太

好きな世界って、どこでもいいのかな？

だったらワンピースとかもの世界も大丈夫なのかな？とか考えたら、

『ワンピースの世界ですね。大丈夫ですよ？では早速』

そこまでいき、先程まで抱えていた違和感に気付いた。

心読まれた？それとも無意識の内に口にしてたかな？

『ああ。すみません。言い忘れてましたが此処では意思の共有が出来るので相手の考へてる事が丸分かりなんです。ですので、先程健太さんが私の事を好いてくれたと分かった時は嬉しかったんですね？』

少し顔を赤らめながら言つ少女。

なんというか反則なまでに可愛いなこの子。あ、でも今考えた事も全部まる分かりなんだつた！自分は口リコンつて訳ではないが可愛いって思つたのは本當だし、でもこんな子の事を可愛いって思わないう方が失礼だし！

頭を抱える様な無限ループの思考を何とか落ち着かせ再び少女を見れば、くすっと笑つた少女が居た。

『向こうの世界に行つた時に私はあまり干渉する気はありませんが、貴方の運命は貴方で切り開いて行つてください。

言つておきますがワソンピースの世界は貴方が思つている以上に残酷で危険な世界です。

そこで

『

何処からか紙を取り出した少女。

『貴方の身を守るだけのチカラを与えましょ。希望があれば聞きますよ？』

少し悩んだ後

なら、健康な身体がほしいな。あとは海道健太だった時の記憶は残していく貰いたい。それくらいあとは得に無いかな。

再び少女を見れば睡然としていた。

『・・・それだけで良いんですか?どうせならワンピースの世界にある全部の悪魔の実の力を使えるとか、他の世界で使ってた能力を駆使したいとか、不老不死にしてほしいとか、何でも叶えることが出来るんですよ?』

それに前世での記憶が有ると、その・・・色々と困る事もあると思いますし・・・』

うん。実は俺、名前の割に身体が弱くて出来る事が限られてたんだ。だから今度の世界では自由に過ごせればそれで良いかなって。それに記憶に関してだけど、やっぱり寂しいんだ、忘れちゃう事がどうしようもなく。

だから俺は今までの事も全部受け入れて、新しい世界で生きて行きたいと思つたんだ・・・

『・・・貴方という人はいつたい何処まで・・・はい、わかりました。では後はこいつで適当に決めちやいますね』

渋い顔をした後に何か思い付いたのか再び笑顔に戻る少女。

『準備は整いました。貴方に幸があることを

言つてその少女はその小さな手で俺の手を握った。その時何かが体に入り込み全体に拡がった。

『今、貴方に贈ったモノは私からの些細なプレゼントです。では・・・』

・

その少女が俺の体を押すと同時にその場から遠ざかった。

そして墮ちる様な浮遊感に襲われた後、俺は暗闇の沼に落ちた。

沼に落ちてからどのくらいたつだろう。五感の何もかもが機能を果たさない中、始めは不安に刈られそうになるが、この場所自体はとても落ち着ける所と気付いたので何なら何時までも此処に居ても良いかなって思った。が、次の瞬間には光が目を襲う。

突然の事に驚いたが状況を察するのに時間はかからなかつた。

そこには盛大に自身の口から発せられる泣き声とそれを微笑ましく見詰めている人達が居たことから今自分が生まれてきたんだと確信した。

そして一人の女性に抱えられると自然と泣き声も止んだ。

「あなたの名前はシオン。  
シオン・オルテンシア。私のかわいい息子」

そして母だと思われる人物にオーテコにキスされ少し戸惑つたが、本当に自分が生まれ変わった事などに色々と驚いた為、すぐに冷静に辺りを確認し、自分の置かれている現状を理解した。

(「この世界での俺の名前はシオンと言つのか。でもまあ・・・）

もう一度その女性を見詰め

(ありがとう。母さん。そして女神様)

お礼の言葉をつげ、本能に任せようといつて眠りについた  
そしてこれから少年シオンの冒険の日々が始まる

## 第四話 始まりの始まり（前書き）

小説つて書くの大変ですね（ ）今まで見ていく側だったので知りませんでしたが、自分の表現力の無さに落ち込みました。

## 第四話 始まりの始まり

この世界に生まれ落ちてから最初は焦った。

それは五感が正常に機能しなかったからだ。

視界はボンヤリと見えるだけで焦点が合わず、聴覚もノイズが走つてゐるかのように途切れ途切れしか聴こえなかつたのだ。

今現在自分を抱えている女性に助けを求める視線を向ければ微笑まれてしまつ始末

「本当に可愛い子。今ね、私に話し掛けてくれた気がしたわ」

(おおー)

意思が通じたのか、喋ることもままならないシオノにしてみればこの反応はかなり嬉しかつた。

だが次の瞬間には羞恥の奈落に突き落とされる事になる。

「きつとお腹が空いたのね。ちょっと待つてね」

そう言い女性は自身の胸元をさらけ出やうとしている

(ちつがあああああうーー)

表わになつた胸をシオノの口元に当てる女性

(飲んでなるものか！飲んでなるものかああーー！ー！)

必死に抵抗する彼であつたが本能のせいか、意思とは関係なく大人しく母乳を飲み込む羽目になってしまった。

「きゅーきゅー」とリズムよく飲み込まれる吸引は止まらない

満腹感が解消されると今度は睡眠欲が浮上してきた。

今は抗うことが出来ないので大人しく瞼を閉じる

意識が遠退く中、彼はふと思つた。

(女神様が言つてた不便な事つてこの事か・・・)

\* \* \*

赤ん坊ライフを過ごし始め一月が経つた。

初めこそは悲觀することばかりで早くも絶望の淵に追いやられたシンオンはトラウマを抱えそうになる程へこんでいた。

なにせ何をするにも人の手を借りるのだ

数々の羞恥プレイを受け、今まで築き上げたきた理性が一気に碎け散つたのは言つまでもなかつた。

そんな中でも嬉しいことがあった。

それは視覚、聴覚共に正常に機能し、更には顔が少しだけ動かせる位まで成長したのだ。

少しずつだが自分の体の成長に嬉しくなってく。

「あ、シオンちゃん起きてたのね」

不意に話し掛けってきた人物を見れば母親だった。始めこそは分からなかつたが、この母がまた偉い美人さんで白い肌に黒髪と、まるで大和撫子さながらだつたのだ。

さらりと透き通る様な瞳は人を吸い寄せる様な深さがある青で、いつまで見ていても飽きない位綺麗だつた。

そんな母をもてば近付いてくる悪い虫も多いことこの上ない。だがしかし、そこは天然といつか神の様なスルースキルで回避している。

現に今・・

「君に似ていてとても可愛い子だね」

「本当? ありがとう。お世辞だとしても嬉しいわ

「お世辞なんてとんでもない。特にこの瞳。君にそつくりじゃないか

その発言に少し頬を赤めた母を見据え、男は尚も言葉を続けた。

「いや、その、なんて言つか……  
もし迷惑じゃ無ければ、これから僕が君達を支えて行きたいなって」

「ええ、これからも是非支えてちょうだいね」

クスリと笑いながら答えた母に男の曇り顔が一気に晴れ、喜びに浸つていた。

「僕が君を好きって事がやつと伝わったみたいだね」「  
やれやれと言しながら肩を竦める男性。しかし……

私も貴方の事は好きよ?だつて友達じゃない」

「・・・・?

平然と言い放つ母。

この様に数多の男性が撃沈されてしまつ始末。

何処からか

「やまあ～」

「抜け駆けするからだ・・・」

「自重しろ」

と、彼を嘲笑する声が聴こえたので窓の方を見てみれば男共が群がつているという奇抜な光景を目にしてしまった。

正直、彼らには同情したが、そんな母をもつ父親は何してるんだと最初は思った。

しかしどうも俺が生まれてくる数ヶ月前に他界してしまったらしい。

「シオンちゃんのお父さんはね。無愛想だったけど、とても優しくて、とても強かったんだよ」

俺をだき抱え、涙しながら話してくれた母。  
まだ言葉を話せない為どうしようもなかつたが、そんな母を慰めてやれなかつたのが悲しかつた。

そして、今日も今日とて食つちゃ寝の日々を過ぐす。

ハケ月が経つた。

今では母乳から離れられ、念願の離乳食を食べれる事がこんなに有り難いとは、と涙ながら食べていた。

そななある日、母に抱えられながら、ひなたぼっこしている最中であつたが・・・

「セラ。ここにちわ

不意に話し掛けてきた人は近所でも評判の良いおばさんだった。

セラとは俺の母の名前で、セラ・オルテンシアといつ。

「あー、貴女の子供はもつ離乳食を食べてるの？ 確かハヶ月くらいよね？」

「・・・？。はい。もつすっかり離乳食しか食べないんです。母乳をあげよつとしても嫌がられてしまふんで・・・」

少し寂しそうな顔をした母とは対極に驚いた顔をしたおばさん。

「それは凄いわね。普通、離乳出来るのは一歳ぐらいからよ？遅くても一年くらいまで母乳を欲しがる子供だつているのに・・・」

その発言に一瞬ドキリとするものの哺乳瓶をくわえながら母の表情をチラリと確認すれば更に悲しい表情になつていた。  
なんでも母からしたらもつと甘えられたいらしい。が、もう一度とあんなに羞恥は受けたくなかったので申し訳ないが今回は丁重に断つておく。

\* \* \*

この世界に生まれ落ちてから一年の歳月が経ち久々に嬉しい事が起きた。

そう、立つことが出来たのだ。

初めて歩けた時はかなり興奮し、慣れないながらに頑張って歩いた。と不意に自分の姿が気になつたのだ。

この世界に生まれてからまだ一度も確認していない自分の容姿。

前世では弱々しい容姿にコンプレックス気味になり自然と伸びた髪でなんとかごまかしていたので、どうせならゾロとかサンジみたいに男らしい容姿だったらしいなあ。と、希望を抱いた。

周りの人達は可愛らしいとか目が母に似ているとか言っていたが實際どんなものなのか。手鏡を持つて確認した。

瞬間、ピシリッ！と空気が凍つた。

自分が持つてる鏡には自分が望んでいた様な容姿ではなかつた。

母譲りだという瞳は確かに綺麗だつたが、その顔も幼いながらに母、といふか女の様な顔立ちだつた。

更にその頭髪が母の黒髪とは真逆の白髪だつたのだ。

女なら良い。だがしかし自分の性別は男で有りこんなに弱々しい容姿は望んでいなかつた。

これでは前世と同じである。

将来の自分がとてもなく心配になつた。

そんな俺を見つけた母がクスリと笑いながら近付いてきて、尚も鏡を持つて固まつている俺の頭を撫でながら父親譲りの髪の毛だと教えてくれた。

これはこの世界でも髪を伸ばすはめになりそつだ。

\* \* \*

あれから数ヶ月が経ち、今ではすっかり自分で動き回る事が出来る様になつた。

そんな俺は当然のように物覚えが良く、元高校生の意地を見せ付け、この世界の情報を集める為に読み書きをなんとかマスターした頃には一歳を迎える。

情報収集として毎日送られてくる新聞に目を通した。

その情報を見る限り、もう海賊王の処刑が実行されており、今から原作が始まるのは十年くらい後と予想した。

原作に関わるつもりもないので「ビービー過」して、ルフィ達の活躍を新聞を通して傍観していちな、等とほのぼの人生を考えていた。

そして今日も今日とて平和な日々が続き母と仲良く食事をしていた。

「母さん、今日の」飯も美味しいね・・・

「『メンねシオンちゃん・・・満足に美味しい食べ物が作れなくて・  
・・」

田の前には泣き崩れる母の姿。

どつもうちの母は料理が苦手らしく、よく魚やパンを焦がしてしまったのだ。

更には料理の味付けを感覚だけで行つたため料理がまともに出来る日は非常に稀まれなのだ。

そんな母に文句の一つでも言おうにも口ひりして泣かれる為何も言えない状況が続いている。  
厄介なことこの上ない・・・

\* \* \*

問題が起きた。

自分が現在いる島が何処かと思い調べてみれば、グランドラインのとある島だとわかった。

現在は大海賊時代。

その割には平和が続き、おかしいと思えば白ひげのマークが町の看板の前に描かれていた・・・

やばい・・・

非常にやばい。

俺が死んでから一年経ち、記憶も曖昧になりつつあるがワンピースの頂上戦争はやはり忘れない出来事だ。

頂上戦争で白ひげが敗れてから白ひげの所有する島は他の海賊が襲い大惨事になっていた。

このままだとこの町は火の海になってしまつ。

冗談じゃない。ここには母さんもいるんだ。

前の世界じゃ一度も見たことがない両親の顔。でも自分には家族といえる存在がいた。

孤児院の人達だ。

自分にとつては掛け替えのない存在。

一度無くした存在を女神様は再び与えてくれたんだ。

絶対に、守り通さないと・・・

幸か不幸か時間はまだある。

原作が始まるまで最低でも10～15年はあるはず。

それまでに出来るだけ強くならないと・・・

思つたらすぐ行動だ。

原作のルフィ達は小さい時からジャングルに放り込まれ、命からがら助かつた。

その自然の中で生きていくつてのは確かに効率的に強くなる方法の内の一つだ。

得られるモノは段違いだと思つ。

現在自分は2歳。

出来る事は限られている。

先ずは基本となる体作りから始めるとして、

格闘とか剣術の知識も覚えられる事は出来るだけ覚えておきたい。

とりあえずランニングや腕立て伏せ等して当面は体を鍛える。

\* \* \*

体を鍛え始めて一年の月日が経ち、自分は現在三歳。

初めはすぐ酸欠になる肉体に溜息が出るばかりだったが、日を重ねる事に成長していることも理解できた。

目標を決め、それを達成したら更に高めの目標へと繰り返している内に、最近では数キロ走つてもそうそう息が切れる事もなくなったし、腕立て伏せをするも余裕で三桁の壁を越える事が出来る位まで成長したのだ。

正直、自分の体の異常さに気付いた。

前の世界ではこうも簡単に肉体が成長することはなかつた。しかし、この世界では身体能力の成長スピードが著しく早い。

その割には外見の変化は見られないし・・・

世界のルールが違うのかどうかは俺なんかには解らないので、このことはとりあえず保留としよう。

さて、流石に一年間ずっとランニングや腕立てばかりでは飽きてしまったので最近図書館で得た剣の振り方や格闘の知識を取り入れて

じりへと戻る。

時間は刻一刻と近付いているのだから・・・

## 第四話 始まりの始まり（後書き）

これからも遅いながらに頑張って更新していきますー指摘出来る様な所とか見つけたら是非指導してくださいーよろしくお願いします（ＴＴ）

## 第五話 微々たる成長（前書き）

休みの内に何とか書き上げました！  
これからも連載頑張ります！！

## 第五話 微々たる成長

「チ、チ、と時を刻む音が響く中、時計の針が5時になると自然と目が覚めた。

横で寝ている母さんを起さない様に外に出て、日課のワシーングに出かけてくる。

走っている途中、朝一で商売をしている人達に挨拶すれば笑顔で返される。

そのまま道を通ればサキおばさんに声を掛けられた。

「あらシオンちゃん、おはよ！」

おばさん。といつても見た目こそはまだまだ若く、俺が生まれた時から母と友達だったため俺からしてみればもう一人の母親みたいな人だ。

「おはようございます。・・・大変そうですね。良かつたら手伝いましょうか？」

「大丈夫よ。子供にこんな重たい物持たせる訳にはいかないもの」

「どうも言つものなかなか持ち上がらない荷物。

「……」

その荷物に手を掛け、サキおばさんから取り上げた。

その光景に少し驚いたおばさんは、「私ももう歳かね」なんて咳

いていたので咄嗟に「まだまだ若いじゃないですか」とフォローして喜んでくれた。

そして荷物を所定の位置まで持つて行つたら、商品の野菜を少し貰つた。

売り物をただで頂くのも悪いので、念の為持ってきた財布からお金をおつとしたら。

「いいのいいの。わつきのお礼だから」

「…なら、いただきます」

愛想のつもりで微笑んでみれば少し頬を赤らめたおばさん。

「風邪でもひいてるんですか？」と聞きながらオデコを触る。

背の高さが足りないため自然と上を見る形になりながらも、熱を確かめてみれば顔全体が赤く染まつたおばさんに、こっちが戸惑つたくらいだ。

それでも、大丈夫大丈夫と言いつつもセカセカと仕事に取り組みはじめたおばさん。

途中野菜を落とす等して落ち着きがなかつたが、風邪をひいても仕事を優先するその職人魂に脱帽した。

そして「良かつたらこれも持つていって」と、何故かおまけまでくれた。

……凄くいい人だ。

たつたあれだけの作業（荷物を運んだだけ）でこんなに物が貰えるなんて……

しかし貰える事は有り難いのだが荷物が出来てしまつた。  
今はランニング中だったが一度荷物を置きに家まで戻る。

家に戻れば母はまだ寝ていたので少し早めの朝食を作る事にした。  
生前も一人暮らしをしていたので料理には自信があつた。  
まあ朝から豪華にしても仕方がないので今回は軽いものにする。  
そうして適度に焼けたパンを皿に並べ、サラダを盛り付け、玉子焼きにカリカリベーコンを添えて母親を起こしに足を進める。

「母さん。朝だよ…」

「…ん。う…ん?」

眠っていた母を揺さぶれば、まだ半覚醒状態の目を開け、  
「チラの顔をジッと見詰めていた。

「…母さん?」

心配になり声をかければ…

「んー…シオンちゃん、おはよー」

ありう事か、いきなり抱き着いてきたのだ。

「かつー・母さんー・寝ぼけてないで起きとよー。」

「えへへへ……シオンちゃん美味しそうな匂いがするうー

「…………」

「……なんでだね?。」  
「のままだと本当に俺が食べられてしまいそうな気がする……」

自分の真操が心配になり擦り寄つて来る母を振り落つた。

「いはん作ったから食べて」

そう言い、まだ名残惜しげにしていた母を後に見て食卓へと向かつた。

「すいごーー! シオンちゃんが全部作ったのー?」

褒められたことに少し照れながらも口クンと頭を縦に振つて答えた。

「サラダの野菜も新鮮だし、パンも焦げてない、それに田玉焼きとベーコンまで……」

そのまま一口ずつ食した母

「美味しいー特にこの田玉焼きとベーコン。田玉焼きは程よく半熟だし、ベーコンの焼き加減も申し分ないわ!」

そして食事を終え

「はふう～。美味しかった。ご馳走様シオンちゃん」

「お粗末様です」

満足な表情の母を見るとコチラまで嬉しくなり自分の頬が緩んでることに気がつく。

それから食器を片付け、少し休憩を挟んでから、昼にはまた戻ると母に一言伝えてから外に出かけた。

\* \* \*

町から離れた海岸沿いにある林の一角。  
そこが現在自分の稽古場である。

最初は人気がない場所を捜し求めて町を離れた事がきっかけだった。

そして見付けた。

静寂と波の音が辺りを支配するその場所は何処か神聖な雰囲気だつた

家からその場所まで5キロ程あつたが走つて向かう事に何の抵抗もなかつた。

そして軽く息切れのも田標の場所に付き、良い感じに温まつた筋肉を解すため準備体操をして早速愛用の木刀を手に取り素振りを始める事にする。

\* \* \*

静寂が支配していた空間には木刀を振るう風斬り音が響き渡り、空からは眩しいばかりの日差しが降り注ぐ。

風が木々を撫で回し、唐突にシオンを襲うが差して動じる事もなく素振りを続ける。

素振りの数が千を超えた時点では数えるのをやめた。  
自分はただ純粋に速さを求めた。

望むのは速く、もつと疾い剣。  
こんな剣筋けんすじでは家族は守れない。

そして握る木刀に再び力を込め、切る事をイメージしながら木刀を振るひ。

しかし自分でもたまに傷だと思う事がある。

物事に夢中になりすぎて限界まで止められなくなるのだ。

そして体の限界が訪れ、持っていた木刀がカラシッと地面に転がると同時に俺自身も前のめりに倒れ込んだ。

俯<sup>うつぶ</sup>せの状態から仰向けに寝転入り、酸欠の肺に酸素をたっぷり送り込む。

自然の清んでいる空気が体に浸透し、心地良さが体を満たす

この場所で素振り等を始め、既に半年が経過していた。

本来なら時間を最大限生かして自分の身体能力を少しでも上げる為に住み込みでトレーニングをしてみたい所だ。

しかし、そもそもいかない。なぜなら…

シオンちゃん、どこへ！？

心配性の母がいるからだ。

あまり人の目に触れたくないので人気のない場所に行き来してるので、尾行してきた母にこの場所がバレかかっているのだ。

まあ、ある意味当然といえば当然なのかもしれない。

自分は現在三歳で、もうじき四歳になる。そんな子供が一人で出掛ければ親は心配になるものだ。

母に呼ばれ、もう毎の時間になつていたかと思い、木刀を隠つこに置いて母がいる場所まで走つて向かつ。

稽古場の林から3キロ程走り、ようやく母と会流する。

「あー！ シオンちゃんいた！  
もおー！ 心配したんだからーー！」

「『めんね母さん。でもそんなに強く抱きしめないで……痛いから』

「あー！ 私つたらついー『めんなさいね。謝るから許して？』

シオンを思い切り抱きしめていた腕を微かに緩め謝罪する母。

もともと心配かけた自分が悪いので再び謝るが何故か、私の方が『めんなさいだもん！』と意地を張る母に小さく溜息が漏れた。

そして家に向かつ道中、自分の体のおかしさについて考えた。

既に体は限界を感じているが、『のべりなり家に帰り一時間程寝れば回復している。

最初こそは、これもきっと女神様に頼んどいた『健康な身体』のおかげだらう。と思ったが改めて考えてみるとやはり異常だ。

更には先程の母の呼び掛けだ。

普通あんな遠くにいたら声なんて聞こえない。馬鹿でかい声が出せるなら別かもしれないが、生憎と自分の母は普通の範疇に留まつてるのでそれも有り得ない事だ。

となるとやっぱりおかしいのは自分の体となる。

そうして想えている内に家に付き、既に料理を作っていた母がいた。

「今日」やはりシオンちゃんに負けない料理を作ったんだからー。」

「…味見は？」

「まだしてないわよ？」

「だってほら。楽しみは後に取つておきたいじゃない」

「……」

そう言い切る母を黙つて見詰め、出来上がつた料理の方を見てみればそれは美味しい事になつていていた。

しかも見た目に比例して味の質は変わる。

しかし騙されてはいけない。

今までの経験から言つて、この母が創る料理は見た目が良いものの味が酷い事になつていてのだ。

しきも見た目に比例して味の質は変わる。

今回の見た目はかなり良いと言つてもいい。

だがその分味も見た目に反して掛け離れるばかりなのだ。

そもそも何で味見しないんだ。と呆れるも、その料理に口をつけ  
る。

「あつ。悪くない」

意外な味に自然とそんなに言葉が出て来て  
母さんが、「何その反応！」と少し怒っていた。

「もおー、失礼ね！私だってたまには美味しい料理ぐらい作るわよ  
！」

そんな母の反応が面白くてつい笑ってしまった。

そのまま黙々と料理に箸を進めていくと口を開いた母さん。

「やつにえはシオンちやん。いつも出掛けている割には遊んでるとい  
見ないけど、お友達でも出来た？」

「・・・うん。海岸の方に住んでる子なんだけど、楽しく遊んでる  
よ」

その問いに一瞬戸惑つたものの何とか嘘でしまかしたシオン。

そもそも精神年齢が20歳のシオンと同年台の子達とではウマが  
合ははずがなかつたのだ。

そして何より、抱えているモノが違つた。

「そつか。シオンちゃんが元気にやれてるんだつたらいいや」  
安心した様な表情になる母を見て、内心申し訳なく思いつつもその場を後にし、睡眠をとつてから再び稽古場に向かうシオン。

毎日の様に稽古場に向かうシオンは行き帰りを繰り返し、日に20キロ以上のランニングを自然と行う様になつていた。

最近では息も切れないでの、試しに全力ダッシュで稽古場に向かえば十分程で着いた事に唖然とした。改めて自分の異常さに心配になるも、いつも通り素振りを始める。

そしてシオンは四歳を迎えた。

今ではすっかり伸びてしまった髪で表情が読み取りずらくなっている。

そんなある日の事だ。

日課の素振りを始め、その数が万を越えたぐらいだろうか、空気が変わった。

その異常さに辺りを振り返つてみれば一人の少女が「チラに向かつて歩いて来てるのがわかつた。

海岸の風を受け、靡く金色の髪の毛。

そして人を引き付けて止まないその美貌を見てシオンは硬直した。

「女神様！？」

クスクス笑いながらシオンに近付く少女はソッと口を開く。

『お久しぶりです。シオンさん』

女神との再開だった。

## 第六話 再会

クスクスと笑いながら近付いて来る少女。

他の子供とは纏っている雰囲気が違う少女は少年シオンに近づく。シオンは動けなかつた。

理由はその少女の美しさに見惚れていたのと、彼が良く知る人物だつたからだ。

「 女神様！」

尚も微笑みながらシオンに近づく少女。

『順調にやつてるみたいですね。どうですか？ 貴方の環境、気に入つてくれました？』

「はい。おかげさまで良い家族と楽しくやつてます。  
でも自分の環境、というか町が危険な気がするんですが？」

『そうちしら？ 私にはとても安全な場所だと思つけど…』

確かに白ひげ海賊団の後ろ盾は世界でも有数の安全な場所だと思う。でも

「でも女神様なら知つてるでしょ？ この島の未来を…」

『そんなの関係ないです。なによりスウツと指を口チラに向ける女神様。』

『貴方がいるじゃないですか』

言葉が出なかつた。

自分は精神年齢こそ二十一歳になつたものの体は四歳児なのだ。  
世界の猛者達がうごめくこの海ではひとりにされかねない。

「……でも、自分はまだまだ子供ですし、この先に起じる悲劇を止められるかどうか…」

心配になり、下を向くシオン。

しかし尚もクスクス笑う女神様。

『私は貴方の望みを叶え、チャンスを『えたばずです。あとはシオンさん次第ですかね』

そう言い切る女神の顔からは余裕の表情が漏れ出ていた。  
その表情を見ると口チラまでつい微笑んでしまう。

「…ええ、なんとかしてみますよ。

俺の家族を、大切な人達を、きっと救つてみせます

その答えを聞き、女神様は満足と言わんばかりの笑顔になる。

『ええ、やっぱり貴方は笑つてるのが良いわね。そんなに悲しい表

情ばかりじゃ、せつかくの可愛い顔が台なしよ?』

「めへ、女神様まで母さんみたいな事言わないで下さこよー。」

自分の顔が熱くなるのが分かり、咄嗟に下を向き伸びた前髪で隠す。

ふと、今まで疑問に思つた事を聞いてみたいくなり口を開く。

「あの、自分の体についていくつか聞きたい事があるんですが・・・」

「

『ええ、要望通りの健康な体よ』

『はい。そのおかげだと思うんですけど、体力回復の早さとか筋肉の成長なんですか?・・・』

『あら、思つてたよりも早くに気付きましたね。シオンさんの体は成長ホルモンが常人の数十倍はある特別性の体なんです。だから見た目は別として筋肉の質が蓄積されて成長してるんですよ』

「…この世界のルールではなくですか?」

『…当たり前じゃないですか。普通だったらこんな早く成長なんてしないですよ。』

ここまで動ける様になつたのは貴方の努力の結果つて所ですかね

少し呆れ氣味に告げる女神様。

あき

その答えに啞然とした。

予想はしていたけど、そこまで規格外な体になつて「よつとま..

何かに気付いたのか今度は女神様が口を開いた。

『あつ、そういうえば私から貴方に贈ったプレゼントには気付きまして?』

その問いに何の事かと聞けば、少し思考した女神様に小さく溜息をつかれてしまった。

『…まつたく。いつまで狸寝入りしてゐつもり?出で来なさい!「沁<sup>しん</sup>」!』

女神様が何かに気付き呼び掛ける。

すると先程まで和やかだった雰囲気が一変して殺伐とした空氣に一瞬息が出来なくなつてしまつた。

『貴方の主に殺氣を飛ばすとはいひ度胸じやないですか。「沁」』

『くつ!元主が何故ここに』

突如頭の中に直接響いた低い声に驚き、辺りを見回すが目に写るのは自分と女神様の姿しか確認出来なかつた。

しかし、俺と女神様の間に突如空氣の乱れが起きたと思ったら、そこには鞘に収まつた漆黒の刀が現れた。

一見変つてゐる所は鞘と柄に紐が縛られており、抜刀出来ない様に固定されていた。

『この刀の名は神刀 沁。<sup>しん</sup> 私が創つた刀で、いくつか能力を宿します』

刀を掴み女神様は更に説明を続ける。

『そしてこの刀は持ち主を選びます。

その人物に見合つ時、保有する力も貸してくれる』

女神様は話を続けつつ、紐を解き、鞘からその刀を抜き出した。しかし、俺はその蒼白い刀身を目にした瞬間、我を忘れてしまつた。

美しいその刀身は人を魅惑し、引き付ける事を止まない。したことはないが、たぶんこれが一旦惚れと言つものだらうと納得した。

『人が持つ二系統二属性を内包してゐる刀で、創る力と探る力。使う力と壊す力を宿した刀。』

それが「沁」です。

厄介な点と言えば気まぐれつて所ですかね。でも完全に「沁」を認めさせることが出来れば能力を使い分ける事も出来ます。

まあ、今説明してもあまり理解は出来ないと思いますから使っていく間に自然と解る様にはなるでしょう。

この世界じゃシオンさんしか繋がつてないから、事実シオンさんしか扱えない。

あとは、契約をすれば良いだけ、ですね。

それでも 『

『沁』と呼ばれた刀を一瞥する女神様。

『貴方は主の為に力の一いや一つも貸して上げないのですか？もしかして…悪かつたとか？』

『この童の魂は悪くない。それに、力なら貸した。しかし、この者はまだ「探る」事しか出来なかつた故ゆえ』

『あら。気まぐれな貴方が？ それで？ 何をしたんですか？』

意外ね。と言つた感じに言い放つ女神様。

『この場所に導いた。あとこの童わっぱを呼ぶ娘がおつたのでな、呼んでる事を教えてやつた』

話の根本はよく分からぬ。

しかし、これでいくつかの異常現象に説明がついた。

稽古場に始まり、母さんの呼び掛け。

それがこの『沁』による能力の一部だつたとか。

『…そう。意外と働いていたみたい何よりです』

『なに、この童が主なのには変わりないでな。『チラとして  
も強くなつて貰わねば困るだけだ』

確かにこの場所に導いてくれたことは有り難いと思つ。

知らず知らずの内に助けられていた事に内心感謝する。

『　なに。礼には及ばん。先程も言つたが、童が主なのには変わりなかろう?』

「つーーー?」

思考を読み取られた事に驚き、つい女神様を凝視してしまった。

『…貴方との「沁」は生まれる前に繋がつたから思考の共有も出来るの。だからこそ貴方しか契約出来ないんですけどね』

『めんなさい。と女神様から頭を下げられ困惑つも、そんなに気にじてないと伝え、頭を上げるように言つ。

『不便かもしけない。でも貴方の力にはなってくれるはずです』

ね?と、『沁』に目配せする女神様に、ふん、と返す『沁』。

だいぶ話が進んでいるみたいだけど、契約自体の内容が今だに理解出来てい無い事に気付く。

それに女神様も気付いたのか、説明してくれた。

『契約の条件として、シオンさんの魂に住まわせてあげるだけですね。

もし刀が壊れたとしもシオンさんには特に被害はないけどシオンさんが死ねば「沁」も死んでしまいます。

「沁」からしたらデメリットばかりだけどそれで良いみたいなの

簡単に説明してくれた女神様。

しかし条件が魂の移住か。

勧めてくれるのは有り難いが今は判断出来ない。

「ありがとうございます。契約についてはもう少し考えさせてください」

俺の発言に、やう。と返す女神様。

『でもこれで貴方が母君<sup>ははきみ</sup>に言つた嘘が本当になりましたね』

その言葉に驚いた。

まさか母さんに言つた嘘が聞かれていたとは…

渋い顔をしていた俺を見てクスリと微笑む女神様

『それじゃ、私はこれで行きますね。引き続き頑張つて』

グッと俺の手を握る女神様の手は、とても温かく感じた。

前に比べて身長が縮んだ為、女神様の顔が近い事に戸惑いながらもその美貌に見惚れていた。

が、気付けば女神様の姿が無くなつており今まで氣にならなかつた波の音が耳に入る。

まさか夢だつたか?と思つたが手にはまだ女神様に握られた感触が残つていた事から現実だつたと理解する。

『 行つたか。あやつめ、まさか空間を支配してまで御主に会いに来るとはな 』

そして極めつけは「」の声だ。

辺りを確認するが姿は見えない。

「『』に居るのか？」

『　人に見られるのは好かんのでな、姿を消してこる。しかし童が望めば姿を出さん事もない　』

「…………？」

辺りに人は俺しかいない。

最初は俺に見られたくないのかと思ったがどうやら違ひらしい。

そして気付けばもう昼食の時間になつていていたので母が来る前に帰宅することにする。

「いいや。『』せ帰るから後で楽しみにしとく

『　そらか。では改めて名乗らう。我が名は「沁」。<sup>しん</sup>しばらくの間、世話になる　』

「俺の名前はシオン。シオン・オルテンシア。いつうちこそ宜しくね。

『沁』」

「む」と返す『沁』に内心微笑み足を自宅へと向かわせる。

そして移動中に海を見渡せば一隻の船がこの島に近付いてる事に気付いた。

此処からでは豆粒ぐらこの大きさな為、どの様な船かは分からない。が

…なんだろ？。何か胸騒ぎがする。

そしてその場を後にし、再び家に向かひ為に足を進める。

\* \* \*

「何を見てるんだよい。ビスター」

「いや……海岸の林に子供が見えたんでな。何をしてるのかずっと見てた」

双眼鏡で島の方を確認するビスターが気になつたのか痺れを切らしたマルコが聞いてきた。

「それで？」

「なに。熱心に木刀の素振りをしていただけだつた」

「へえ。どんな奴だよい。俺にも見せてくれよ」

「もういなくなつちまつた

「なんでえ」

つまらん、と言つた感じに種を返すマル口。  
しかし何処か腑に落ちないビスタは再び双眼鏡でその場所を見続  
けた。

「隊長達！ もうじき島に付きましたんで準備して下さい！」

仲間の船員に呼び掛けられ二人の隊長は各自の準備に取り掛かつ  
た。

## 第七話　出会い

町に着けばいつもより賑やかになつてゐる光景が拡がつていた。

そして田の前に顔見知りのおばさんが通つたので訳を聞いてみた。

「サキおばさん。みんなどうしたの？」

「ああ、シオンちゃん。  
実はこの島に管理人が向かつて来ててね。それをみんなで派手にお迎えするんだけど……」

出迎えの準備が全然整つていなかつたらしく、慌てて準備しているとのこと。

「管理人つて……白ひげ海賊団？」

「おや？ 知つてたのかい？  
たしかシオンちゃんが産まれてからはまだ一度も来てなかつたと思つたんだけじねえ」

いつかこんな日が来るのではないかと予想はしていた。

原作に関われば俺なんかの命がいくつ有つても足りない出来事が起ころ。

しかしそれの対策としては原作の登場人物にはなるべく関わらないで過ごせば良いだろ?と考えていた。

そこまでは良い。だがここにある問題に気付いた。

「……そういえば、いつもどおり滞在してますか？」

「まあね。早く一ヶ月くらい。遅くて半年つとこりかね」

その言葉を聞いて絶句した。

予想では数日くらいたと思つていた為、精神的ダメージは尚でかい。  
「ホリヒとしては少しでも早くに強くなりたいのでその間<sup>ま</sup>まかし  
続けるのは辛いものがある。

だいたい白ひげ海賊団ともあう大海賊がどうしてこんな島に滯在するのか。

聞けば自分の休暇も兼ねて島を本当に守つてると周りに伝える  
為らしい。

そしてこういった島では白ひげ海賊団は英雄扱いになるそうだ。  
まあ普段から町を守つてるので当然と言えば当然か。

そんな英雄達は町の商店街にある酒場で飲み食いを盛大に行つら  
しい。

しかも無料で飲み食いしてる訳では無いらしく飲み食いした分は  
キッチリと料金を支払つそうだ。

町の人達は普段からお世話になつてゐる為か無料で良いと言つてる  
が、白ひげ海賊団は料金を払うというのだ。

しかしそんなに連日連夜、盛大な宴を繰り広げれば資金の方も減

る一方なので、稀に来る海賊船から決闘の名目で財産を頂戴したり、  
休暇を使ったお宝の発掘等で資金面は何とかなっているらしい。

仕方ないので当分は町の商店街を避けていく方向で行動していく  
しかない。

そんなところで再び家に向かう為、足を進める。

家に着けば予想通り料理を作っていた母がいた。

そして簡単に食事を済ませ、白ひげ海賊団が来ることを話したら  
何やら深刻そうな顔になってしまった。

。 その反応から俺が产まれるよりも昔に、白ひげ海賊団と何か嫌な  
事があったと理解した。

母の近くに寄り、大丈夫。と慰めれば優しく抱き着かれた。

今は赤子の時とは違い母さんを慰める事が出来る。

例えこの島の英雄だとしても、俺の家族に手を出す奴を許しまし  
ない。

しかし……

生の白ひげ海賊団をこの田で見てみたいのも事実。

そして船が来たのか町の港から盛大な歓声が聞こえてきた。

町の外れにあるこの家から港までなら走って5分くらいで着く。結局好奇心に勝てず、白ひげ海賊団を一旦見るため母に一言いつてから家を出る。

\* \* \*

再び港に着けば家から聞こえていた声とは比べものにならないくらいの歓声が耳を襲う。

そして辺りは紙吹雪が舞い散り、白ひげ海賊団が乗るモビーティック号を盛大に迎える。

言わせて貰えば、あれだけの時間で良く此処まで準備出来たものだ。

船が港で完全に止まり、掛け橋を繋いでぞろぞろと降りてくる船員達。

そして再び歓声のボリュームが上がった。

「一番隊隊長のマハ」セんだー。」

「おこーあたはるの3番隊隊長のジヨズさんだぞー。」

「5番隊隊長のビスター様よー。こつ見ても氣品に満ちていひつしゃるわー。」

各々の隊長達が降りてきて場がかなり盛り上がった。

そして最後に白ひげが降りてきた。

その姿を確認した住民達は一瞬にして声を止めた。

そしてこの町の町長が出迎え、頭を下げた。

「良くいらして下さいました。及ばずながら町を総出で出迎えさせて頂きました」

深々と頭を下げる町長。

それを見た白ひげは、

「グラララ。じばりくの間世話になる。」

野郎共ー今田は盛大に宴だー！」

どおーーと歓声によつ島が揺れた。

そして白ひげから伝わってくるプレッシャーは本物の海賊だと物語つておつ、世界最強の男であることを体で感じさせた。

ふと5番隊隊長、花剣のビスターが口チラを見据えていた。

「の大衆の中で俺を見ることは無いと思つが何か気になる」とでもあつたのだろうか。

そうして白ひげ海賊団を迎えてからは夜遅くまで町を総出の宴会が行われていたので町の外れにあるこの家まで声が聞こえて迷惑だつた。

俺は、といえば毎の訓練をしてから夕食を食べた後、母に出掛けることを言ってから、完全に人気が無い稽古場に再び向かう事にした。

白ひげ海賊団は一目見れたので今は『沁』を実際に手にしてみたいという考えに浸り、足を進めた。

\* \* \*

稽古場に着けば見知らぬ影が一つあった。

「よう坊主。今夜の月はまた一段と綺麗に見えないか?」

初めこそは暗くてよく見えなかつたが日を凝らせばそこにはいる人物がハツキリと見えた。

本来なら決して此処に居るはずのない

「……花剣の、ビスターさん」

「ほう。俺を知つてんのか」

「……知らない方がおかしいでしょ？貴方達はこの島の英雄なんですから」

「そういう意味で言つたんじゃない。坊主、お前何才だ？」

「……今年で4歳になりました」

そもそも何故此處に居るのかも分からぬ人物に対して警戒は怠<sup>おいた</sup>らない。

一応漫画では見てたがその人物自体の性格とか詳細はハッキリしてないのだ。

これで子供の惨殺が趣味とかだつたら笑い話にもならない。

「まあそんなに警戒するなつて。しかし四才の子供がよく俺の事を知つてるな」

「それは貴方達がこの島で英雄だからですよ。よく母が話を聞かせてくれるんで……」

「嘘だ。これまで一度だって母さんの口から白ひげ海賊団の話を聞いたことはない。

そう。聞いたことが無いのだ。

本来そんな英雄が居れば話の一つや二つぐらいの口から聞けても良いはずなのに。

それに俺が白ひげ海賊団の話をした時の表情は……思い出すのも不快だ。

「……姿も見た」と無いのに俺を知っていた。この島には久しく来ていなかつたからな。疑問に思つただけだ」

「それは……港で貴方達を見たからです……」

本当は俺の生前の世界で漫画になつてゐるから、とは流石に言えない。

「……そうかい。所で坊主。お前にいつも此処で訓練してんのか?」

「……なんのことですか?僕はただ景色を見に来ただけです」

「こんな子供がこんな場所で特訓してることまで知られたくないかった。」

本来なら正直に答えるが、今はそんな事も言つてられないので嘘をついて誤魔化す。

「嘘は良くない。」この島に着く前に俺はお前を見た。

それにこの町のお偉いさん達にお前の事を聞いたたら快く教えてくれたよ。

何でも『神童』なんて呼ばれてるみたいじゃないか。町の人達がお前の将来が楽しみだと話していたぞ

「」に来て不用意に町の人達と関わったことが裏目に出てしまつた。

しかし巷ちまたで俺はそんな大それた名で呼ばれていたのか。  
どちらにしろ向こうには全てバレてるみたいだ。

、人に見られるのは好かんのでな。姿を消している、

ふと、昼間に聞いた『沁』の言葉が頭をかすめた。  
そして気付く。

あの時、『沁』が言っていた視線とはこの人物からのものであつたと。

自分の迂闊さに小さくため息が零れる。

原作の登場人物と出来るだけ一緒に居たくないでの、なるべく早くに会話を終らせる為話を切り出す。

「それで?白ひげ海賊団5番隊隊長殿は何故俺の前に現れたんですか?」

「…なに。こんな所でただひとり、何をしてるのか興味が湧いただけさ。そんなことより」

近くにあつた木刀を手に取るビスター。

「坊主。お前剣をやるんだう?」

今まで大事に使ってきた愛刀を取られたことに内心腹立ち無愛想

「はい。と答えれば、

「見せてみる。相手になつてやる」

「ヤニと口端を呪り上げながら叫び声でヒュースタ。

その言葉に今まで実戦経験が無い事に気付き、自分の力が何処まで通じるのか気になつた。

しかし、相手はある花剣のビスターだ。

原作でも七武海のミホークと互角に渡り合えるくらいの実力を持つてゐる剣士。

例え遊びだとしてもコチラがその攻撃を受けければタダではすまない。

「なに。死にはしないさ。ただそつちが攻め、こつちはそれを防ぐだけだ」

そして持つていた木刀をコチラに向かつて投げ渡す。

思わぬ好条件に素直に受け入れてしまいそうになるも、疑問があつた。

「何で……何でこきなつこんな事しなくちゃいけないんですか……？」

ビスターの目を見ながら真剣に聞けば。

「始めに。この島に来る前、お前を見たと言つたる。その時、熱心に素振りをしているのを見たんでな。それに」

俺が持っていた木刀を指差すビスター。

「 その木刀、よく使い込まれている良い木刀だ。  
お前が何処まで出来るのか知りたくてな」

思わず答えに驚くも、表情には出さない。

俺の実力。

それを向こうも知りたいだけか。

お互いの条件が一致し、迷いは無くなつた。

「わかりました」

初めての試合に内心嬉しくなる。

その気持ちを落ち着かせる様に深呼吸を何度も繰り返してから体勢を低くし、いつでも始められる事を伝えると、いつでも来い。と向こうも臨戦体勢をとる。

「それじゃあ・・・行きます！」

その声を引き金に地を蹴つた。

声と共に全力の一降りを繰り出すも難無く避けるビスター。

しかし避ける事も予想していたシオンは続けて二の刀を横薙ぎに

放つた。

予想外だったのか目を見開くビスターは咄嗟に右腕でその斬撃を受け止めた。

当たった瞬間、ニシッと音がしたがその表情は平然としていた。

「ほお…… 4才でここまでやれれば上出来だ」

そして警戒体勢を解いたビスターはその体を翻した。

「明日の夜も此処に来な。しばらくの間だが、鍛えてやる。」

背中を向けながら言い放つビスター。

「うして、ひょんなことから花剣のビスターに御指導されることになってしまったシオンであった。」

\* \* \*

ビスターは久々に面白いものを見付け、内心嬉々としながら足を進めていた。

先程の出来事を思い出すだけで口の一ヤケが止まらなかつた。

始めこそは冗談のつもりで行った遊びだったが、もし先程のアレが真剣勝負だったとしたら

「おもしろい」

先程受けた右腕を触り、自身の身体が一瞬身震いするのが伝わった。

骨はいっていい。しかし、

「ひびが入ったか?」

痣になってる腕を隠し、皆がいる酒場に戻ったビスターはその日、気持ち良くなれて酒を飲んで過ごしていた。

## 第八話 決意

ビスターとの試合が終わった後、俺は独り落ち込んでいた。

まだまだ子供だとしても自分の実力は到底この海では通用しない。

その真実を田の当たりにした。

全力で挑んだ。

自分が今持っている中で最高の一撃をおみまいしたつもりだ。

もしかしたらと期待してはいたが、その思いは見事に打ち砕かれてしまった。

「はあ……」

『案外、悪くなかったと思つ』

唐突に、声が頭の中に声が響き『沁』が話掛けってきたことに気付く。

「まだまだ、弱いね。俺」

『なに、先程の者が言つ通り、四歳にしてみれば対したモノなのだから』

「……それじゃ駄目なんだ」

そう。

4歳にしてみれば上出来かもしけない。  
しかしそんなぐらいじや救えない。  
満足するには至らない。

「これまで以上に努力しないと……」

守れない。

その事実しか残らないのでは今までやつて来た事が全て水の泡になってしまいます。

自分が何の為に強くなり、何を守りたいか再び整理してから覚悟を決めた。しかし……

「今まで以上にいい特訓方法が思い付かない……」

人間無茶をして成長するものだ。

だけどその無茶も死んでしまう様な危険性なら話にならない。

今の特訓を続けるのも悪くはないと思うけど、それだけでは更なる高見には行けない気がする。

少しの間思考錯誤したが、一向に思い付かない。

『　ならば、先程の者が言つていた様に明日の夜から此処に来  
ればいい　』

「……ビスターに教わるつてこと?..」

『沁』の提案に顔をしかめるも、確かに今一番いい方法は剣士であるビスターに教えをこう以外には思い付かない。

でも原作の登場人物であるという事に抵抗があるのだ。  
変に運命を変えてしまった危険性も抱えてるかもしれないし、危険な出来事に関わってしまつかもしれない。

『お主が思う危険性。確かに有ると思う。  
しかしそのような運命など関係ないくらい

お主が強くなれば良かるつ?』

その答えに一瞬頭の中が真っ白になる。

そして唐突に笑いが込み上げてきた。

「そうだね。確かにその通りだ」

そう。答えはこんなにも簡単な事だったのだ。  
俺が強くなれば良いだけ。

たつたそれだけの事じゃないか。

『沁』の言葉に背中を押され、ビスターに指導を受ける決心をした  
俺は、慰めてくれた『沁』にお礼言葉を言えば、うむ。と返された。

『しかし、まだまだ我を操る事は難しいな。当分の間は姿も見せん』

「……え？」

本当だつたら『沁』を手に取つてみたい気持ちでいっぱいだったが、まさかのお預けを受けてしまつた。

『我也此處に居るでな。話相手くらうにならなつてやる』

「……そんな……」

その日は説得も虚しく渋々諦め、大人しく家に帰つた。

帰つたら帰つたで母が抱き着いてきて、シオンちゃんが不良になつたー！。と泣き着かれてしまつた。

気付けば、普段ならとっくに寝ている時間だつた事に気付き、抱き着く母を慰め、だいぶ落ち着いた事を確認してからこれから当分は夜遅くまで帰つてこない事を伝えれば再び泣き着かれてしまう始末。

何が気に入らないのか聞けば、

「だつて寝るときにシオンちゃんがいないと寂しいじゃない！」

「……」

そんな理由を聞いて引っ付く母を剥がしてから自身が眠る為にベットに入る。

明日も朝は早いのだ。

いつまでも夜更かしはしてられない。

\* \* \*

今宵の一撃。

あれは子供に放てるものでは決して無い。

童は気付いておらんかも知れんが、一瞬剣がブレた。

縦一線から横一線へ移る時の予備動作がほぼ無く、同時に放たれる様な斬撃。

本来ならば初見ではまずかわせない。

その一撃を防いだあの剣士も中々だが……

その現象名は『多重次元屈折現象』

まだ完璧ではなかつたが、それも時間の問題であろう。

我も生を受けてから今まで色々な者を見てきた。

しかし、

誰ひとりとて今の童の歳での域には達した者はいない。

だが、過去に一人。

あの童も相当だったが、あやつ以上の剣の使い手もなかなかにおらん。

その者は、全ての刀に愛される男だ。

我とて例外ではない。

自身を使ってほしいモノ達は、その力を最大限生かせる者を望む。

しかし、大概のモノがその使い手に出会えないで果てる。

あるモノは耐えきれず折れ、

あるモノは錆ゆき朽ち果て、

あるモノは自然に飲み込まれ存在すら忘れられる。

漸く自身が望む想い手に出会つ事が出来、当時は嬉々としたものだ。

さあ、早く我を手に取れ。

されば、主が為に最大の力を貸す。

しかし、その者が我を手に取る事は一度もなかつた。

まさかの死別。

それからとうもの、見る者全てが物足りなさで満ちてしまつた。

今まで出会つて来た者などあやつに比べれば足元にも及ばぬ。

あやつ以上の者に会つ事はない。

そしてこれからもこの気持ちが満たされる事ないと諦めていた。

しかし、出会つた。

その者はまだ小さかつたが、将来を考えれば期待せざるをえなかつた。

本来ならば一刻も早く我を手にして欲しかつた。  
だがその気持ちを何とか抑え、拒否した。

あえて拒否したのは童の肉体ではまだ耐えられないと考えたからだ。

自身で言つのもなんだが、我的能力は体に掛かる負担もでかい故、  
持ち主を壊しかねない。

焦らず、慌てず。

ゆづくつで良いのだ。

ゆづくつと童の成長を見届け、来るべき時が来たら主と認め、この身を奪いつ。

その時まで、せめて見守りたいもう一つ。

\* \* \*

まだ日が上る少し前の時間。

今ではすっかり習慣になつていてるので自然と日が覚める。

昨日はいつもより遅くに眠ったせいかまだ眠い。

眠氣をなんとか振り払い日課であるランニングおじなを行う為ベットから出よひ出す。

しかし、ここでパジャマの袖に妙な引っ掛けたりに気がつく。

見れば隣で寝ていた母が俺の袖を離すまいと握っていた。

「……」

気付かれない様にパジャマを脱いだり、捕まれていない方の手でボタンを上から一個ずつ外していく。

しかしその手が三つ目に差し掛かった時だ。

唐突に母が寝返った為に自然と俺の腕も引っ張られ、母に倒れ込む。

一瞬、起こしてしまったか？と思つたがそのまま眠り続ける母。

そこで再び元の姿勢に寝返ると同時に抱き着かれてしまった。

母の豊満な胸が俺の胸を締め付け、体は母の腕でガツチリと押さえ込まれている。

早く言えば抜け出せない。身動き一つ出来ない状態なのだ。

至近距離にある母の顔を見て、寝息が顔に吹き掛かかる程の近さに自身の顔が少し熱くなるのが分かつた。

つい、いつもの癖で視線をそらす様に下に向いてしまえば母の開けたパジャマの隙間から胸の谷間が見えてしまった。はだ

正直起きてるのでは？と勘違いしてしまってそうになる。

四面楚歌的な状況に内心慌て、どう対象したものかと悩んでいたが、

「……シオンちゃん……」

ポツリと喋つた母に一瞬ドキリとしたがそのまま寝息を起していた為寝言だと理解した。

ホッとしたのもつかの間。

いきなり母の目から涙が出てきたのだ。

俺を抱きしめる手に力が入るのが伝わった。

「……いかないでえ……」

「つー？」

尚も涙を流しながら眠る母を見て悔しそうに刈られた。

母さんはこんな顔をさせてしました。

他の誰でもない俺自身が。

やはり少しでも母と一緒に居てあげれたらこんな事にはならないのだろうか……

しかし、今は我慢してもらひしかない。

これも全て、家族を守る為なのだから。

今努力しないと悲劇は止められない。

非力な自分がただ見ていてことしか出来ない状況など耐えられないと。

未来に起きた惨劇から、絶対

「…………絶対、守つてみせるから……」

決意の言葉を母に告げ、この口だけはせめて付き合つてあげるか、とまだ微かに残る眠気にこの身を委ね、再び瞼を下ろす。

太陽の日はすっかり昇り、鳥の囀りが耳に入る。

その囀りに起された、目を開ければ自身を抱きしめていた箸の母が既に居ない事に気付いた。

まだ働かない頭を強制的に起し、食卓に向かえば母がいた。

「あ、シオンちゃん起きたのね」

「……おはよ」

返事をすればそのまま笑顔で、はいおはよ。と返す母。

「（）飯出来たと（）だつたから今起（）行（）としたの（）…」

基本いつも母より早く起きてる俺を起す喜びを味わいたかったらしく。

そんな母に連れられそのまま席に座り、出来上がった料理を口へ運ぶ。

「…だいぶ料理の腕上げたね」

「せつやれ。いつまでもシオンちゃんに負けてられないもの」

そのまま黙々と料理を食べていれば真剣な顔になつた母が口を開く。

「……シオンちゃん。何か悩みがあつたらお母さんと話してね…」

その発言の意味が理解できず黙つて聞いてれば、続けて話しあじめる母。

「なんかね、シオンちゃん抱え込みすぎなんだと思う。だからね。困つた事があつたら、もつとお母さんを頼つても良いんだよ?」

「」に来て変な心配を掛けてしまつた事に漸く気が付いた。

口に含んでいた食べ物を飲み込み、答える。

「大丈夫だよ。母さんは心配しないで」

「で、でも…」

微笑みながら大丈夫だと伝え、これからどんなことが起きても心配しないで欲しい事を伝える。

「あつ。それとこれからは『飯』と『タ』飯いらぬかい

「……ふえ?」

これからは本気で強くなる為にいちいち家に帰つてくる時間が勿体ないので朝食を食べてからそのまま夜まで稽古を行つ予定を起きた。

しかし、それだけはイヤ!と止めようとする母。

せつかく俺に褒められるくらい料理の腕を上げたから、これからは毎日腕を振るう予定だったらしい。

だが「チラリとしても譲るわけにはいかない。<sup>ゆす</sup>

そんな母をなんとか説得して、せめて母が作る弁当を持って行く事で手を打つた。

これからもっと高見に行からはきなければならないのだ。

そしていつも通り稽古場に向かい素振りを始める。

ビスターが来る夜に向けて少しでも良くなる様にと願いを込めて。

第九話 課題

夜

日が沈み、月が昇つた頃

この場所に一つの影が近付いていた。

俺は現在『沁』に人が近付いて来る事を教えられ木の上に隠れていた。

闇に紛れて来るからしてビスターが来たことを予想した。

そしてその人物が俺の隠れている木の下を来たと同時に切り掛け る。

しかしその奇襲をものともせず避ける影。

「つづおー？　いきなり何だよい！」

その声を聞いた瞬間に影がビスターでない事が分かった。

そして別の影がもう一つ。含み笑いながら現れた。  
その聞き覚えのある声の方を睨めば、

「……くくく。良い田だ。タベより一際覺悟<sup>ひときわ</sup>が座つてゐる様に見え  
る」

少し離れた木の影からビスターが現れた。

\* \* \*

「おいビスター！

お前のその腕の理由が此処にあるつて聞いたから来たのに、來た  
らこんな餓鬼しか居ねえじゃねえかよい！！」

「ああ。だからそいつだ」

「チラに向かつて指を向けるビスター。

「ソイツが俺の腕を叩いた張本人だ」

「……冗談だろ？」

会話する二人組をよそに「チラはチラで話していた。

(『沁』。どうこうと？ 一人居るんだけど？)

『　　ああ。 我は一人しか来ないとは一言も言つておらん　』

その声を聴いて自分が試された事に気付いた。

そしてあまり『沁』に頼り過ぎるのも良くないのでこれからはなるべく自分で気配察知を行える様にしようと考え方を纏めて目の前の二人組に気を引き締める。

会話が終わったのか再び「コチラを見据える」一人組。

「それで？ お前は誰だよい？」

「……ビスターさん。 どういう事ですか？」

「ああ。 タベお前にやられた腕が「コイツ」にバレてな、理由を話した  
ら着いて来ちましたのさ」

「無視すんなよい！」

無視された事にイラつき怒鳴り散らすマル』。

「そう言えば俺も坊主の名を聞いてなかつたな。 お前がコチラの名  
を知ってるのに、コチラがお前の名を知らないのは少し不平等じゃ  
ないか？」

ビスターの言葉に内心確かに、と思うが事前に俺の情報は聞いてる  
と言っていた。

たぶんマル口に氣を使つてゐるのかと思つたので

「……シオン……」

と、小さく自分の名を呼ぶ。

そしてビースタの右腕を見れば木の枝が固定されていた。

「……その腕……」

「ああ。昨日お前から受けた一撃の打ち所が悪くてな、じばりく使えない状態だ」

右腕を上げ、使えない事を告げるビースタ。

「それでだ坊主。代わりと言つては何だが、このマル口も今日から俺に付き合つそつだから宜しく頼んだ」

「こや俺付き合つとか一言も言つてねえよ。」

ビースタに講義するマル口。しかし難解く丸め込まれてしまつたマル口。

「まあ、お互ひに詰乘つあつた所で……始めるといひつ

「ヤリと口端を上げるビースタは告げた。

\* \* \*

現在、俺はビスターと打ち込みをしている。

ビスターに傷を負わせた力がどれ程のものか見せてほしいとマルコに言わされたからだ。

『打ち込み』と言つても俺が一方的に攻め、ビスターはそれを木刀で防ぐだけ。

流石に得物を使ったビスターの強さは段違いだった。片手というハンデを貰つてはいるが攻撃が一向に当たる気がしない。

いくら打ち込めどその攻撃はいなされ、防がれ、一本取るのがとても困難に思えた。

一回距離を置き息を整えていればマルコが、もうこい。と言い終わらせる。

結局一本もビスターから取る事が出来なかつた。分かつてはいたけど、やつぱりビスターは強い。

息を整えながらじりじりしてビスターから一本取つたものかと思考を巡らせる。

\* \* \*

「……なあビスター？」

「なんだ？」

「……コイツ何オつて言つてた？」

「4才」

「……冗談だろ？」

マルコは信じられないと言つた様に口を開けていた。

「そもそも何だよあの剣速！ 4才でそこまでやれるなんてそこの辺の雑魚なんか相手になんねえぞ！」

しかもお前とまともに打ち合つてるしー！」

「だから言つただろ。この傷は仕方なかつたんだ

「そうは言つたがお前の話と全然違つじやねえかよー！」

それからじばじばへ言つて会うビスターとマルコ。

「はあ。もついい、大体の実力は分かった。」

シオンに近付き小さくため息をしたマルコ

「取り合えず、当面の目標はビスターから一本取ることだ。」

「……はい」

そして再び打ち込みが再開された。

\*\*\*

素直に言われたことを行つシオンはマルコは自身の顔が笑みを浮かべている事に気付いた。

「気に入ったみたいだな」

不意にマルコに話しかけてきたビスター。  
気付けば訓練を一時中断し、休憩を挟んだらしくビスターが近付いていた。

「……これ程の才能…育ててみたいと思わずにはいられんだろう?」

「ああ…確かにな」

頷くマルコにビスターも口端を上げていた。

「悪いがアレを先に見付けたのは俺だからな。好きにさせてもいいつぞ」

「おじおじ、ちょっと待てよ。いくらなんでそれは無いだろ。あ

んなもん見せられて大人しく見てる方が無理つてもんだ」

「坊主のスタイルを見ただる。明らかに剣士だ」

「いや、シオン坊はまだ若いから素手のやり方も教えれば今からでも遅くないだろ」

お互に武器と素手の良いところをスラスラと言ふ一人。どちらも一歩たりとも譲る気は無いよつて段々と険悪な雰囲気になつてきた。

「ビスター。お前喧嘩売つてんのか？」

「ならどうやらが言いか坊主に聞いてみよひじやないか」

「望むどいのだよー。」

\* \* \*

「…やっぱ自分は武器が良いでや」

その発言を聞き泣き崩れるマル」と勝ち誇つてゐるビスター。

「なんでだよー！ 何で素手の戦いが拒絶されるんだ！ 何が不満なんだよー。」

「いや、別に素手の戦いを否定してる訳じゃないんですけど、自分はまだ子供ですし大人に対向するなら武器を手にとった方が早いじゃないですか」

「お前アレだぞ！？ 素手なら霸氣とかも結構幅広く扱えるんだぞ！ それに男と言つたらやつぱり素手だろ！…」

「霸氣…」

その言葉に、確かに霸氣も扱いたいなあ。と思つが今は武器の方が良い。

「それでも…武器…」

ちくしょおおおおーーと地面に両手を着いて泣き崩れるマルコ。対してビースタはその笑みを崩さず頷いていた。

「流石俺が見込んだ奴なだけはあるな。武器の良いところを良く分かっている」

マルコを宥めている俺に話しあげてきたビースタ。

「そもそもお前の戦い方は能力を使っての戦い方だろ。無能力者の坊主なら武器を使った方が強くなるに決まってる」

「ビースタさん…でもやつぱり素手は素手で教わりたいです。マルコさんの言う通り素手の戦いも利便性が広いですし、何より覚えておいて損は無いと思いますから」

「つー？ 本当かよい！？」

泣きの体勢からガバッと勢いよく起き上がり詰め寄つて来るマルコ。

「は、はい。今は刀を用いた戦いを覚えたいんですけど、いずれは素手の戦い方も取り入れたいと思います」

その言葉を聞いて何処かほつとしたのが、にやけながらビスターに詰め寄るマルコ。

「どうだビスター！ シオン坊は素手も悪くないとさー！」

「まあみろー！ ビスターに言い放つマルコに対して「ああそうだな」と受け流すビスター。

大人だ。

そして当面はビスターからどうやって一本取ろうものかと考えていたが、此處で原作の登場人物と再び係わってしまった事に気付いた。

マルコと言う人物が係わってきた事には少し焦つたが、まあこれ以上増えなければ問題は無いかと思いこの日は幕を閉じた。

＊＊＊

増えた。

次の日の夜の事だ。

朝から稽古場に行きいつも通り木刀の素振りをして夜になればビスタ達が向かつて来てる事を『沁』から聞き、そのまま真剣に素振りをしていれば、4番隊隊長のサッチまで連れてきた。

なんでもあの後、マルコとビスター一人で飲んでる時に俺の話になり、言い争い出した二人の会話を聞いて興味を持ったサッチが俺にも会わせろと言つて来たとか。

取り合えず自己紹介してきたサッチ。

「よつ。俺は白ひげ海賊団4番隊隊長をやらせてもうつてるサッチだ。宜しくな」

微笑みながら言つサッチ。

「…宜しくお願いします」

取り合えず挨拶をしておき相手を一瞥する。

原作ではティーチに殺されてしまう人だったがまさか会つ羽田になろうとは……

「おいおい。何だよこのガキンチヨ。普通この島の住人なら俺達を目にした瞬間飛びついて来るつてのに妙に落ち着きすぎじゃねえか

? それに髪が伸びて顔が見えない分不気味だし」

「まあ坊主にも色々あるんだろ。変な詮索はしないでやれ」

サツチとビスターの一人がヒソヒソと喋る中マルコはシオンに近付き昨日の素手の良いところを話していた。が、その会話を聞き割つて入つてくるビスター。

ビスタイルく、武器を自身の手足の様に使ってこそ一人前だそうで、対するマルコは、なら始めから自分の手足を使え、と言い張り抜け出せない口論になってしまい最終的には実力行使にまで発展する。

素手の良いところは身体の一部なので何処まで扱えるか分かりやすく、最終的には鈍器の様な拳になるまで鍛え上げ、素手でも武器要らざになれば大きな力になる。

一方武器の良いところは攻撃範囲やら威力等が上がり誰でも使える事。

最終的には身体の一部になるまで使い熟し、自在に操れればそれはそれで大きな力になる。

素手の理想は武器で、

武器の理想は素手とまるで馴じ<sup>いたぢ</sup>この様な関係だなど一人納得するシオン。

そんな考えに老けつていると、サツチが話し掛けてきた。

「ま、二人が話してたシオンって奴が一目見れて俺は満足だ。それでもまさか本当に子供だったとはな」

「何が…です？」

「ああ、あのビスターに「太刀入れた奴が子供って聞いたからな。これは一目見ておきたいもんだったて思い見に来たつて訳さ」

「それは……ビスターさんは素手でしたし、それに夜だったんで視界も悪かつたんです。あの状況だったら仕方ないかと……」

俯きながら状況を告げるシオンに口を開くサッチ

「あのなあ、シオン。いくらビスターの奴が素手でもコイツは白ひげ海賊団の隊長なんだぞ。

そんな奴に、まぐれにしろ一太刀浴びせたんだ。もつと胸を張つても良いと、俺は思うがな」

「でも……」

「まあいい。自分を過小評価する奴も俺は別に嫌いつて訳じや無いしな。それにビスターやマルコのお前の褒めたたえ様は見ていて面白い」

え?と反応するシオンに対しビスターとマルコは驚愕の表情をしていた。

その一人の表情を見てニヤリと笑うサッチ。

「聞いてくれよ。昨日この一人、あらう事がお前の

そこまで言って前のめりに崩れるサッチ。

そして地面に倒れる前にマル「がその身を支え、そのまま抱え込むとビスターが口を開く。

「悪いが今日はもう帰る。

打ち込みは出来なかつたが代わりにヒントをやるわ。

何故俺が坊主の攻撃を防げるのか、考えてみる」

「……何故防げるのか…………？」

「やっと口端を上げるビスター。

「次に来る時にはもっと成長してゐ事を期待してゐ

その身を翻し、また今度来るとビスターにマル「も頷き足を進めた。

じゅぢゅひひげ海賊団はこれからじまじくの間宝探しに出掛けるので空いてゐる時間を使つてわざわざおこに来てくれたらしい。

そして俺はそれからもう少し残りビスターがくれたヒントを考えながら、次に島に戻つて来る頃には絶対に一本取つてやると意氣込み素振りを続けた。

## 第十話 気配とは

白ひげ海賊団が宝探しに出てから一月が経つた。  
あれからビスターに言われた言葉の意味をひたすら考えた。

何故防げるか？

単純に俺の剣が遅いかビスターの反応速度が早いか。

だとしたら今の段階ではビーストも無い話だ。  
ただひたすら俺自身の身体能力を上げるかしないのであれば、まだ時間は必要だ。

でもビスターが可能性も無くあんな事を本当に言つだらうか？

、何故防げるのか考えてみろ

あの口ぶりは何か可能性があるから言つたんだと思つ。

なら他には行動パターンが決まつてるとか

他にあるとしたら…

「…視線、かな」

狙つてる場所を特定されてるから防がれる。

視線とか殺氣は人から感じられるモノだ

でも本当にそれだけだろうか

まだ他にも何かありそつた気をする…

考えが纏まらない中、考えられる範囲で思考しながらひたすら木刀を振り続けた。

そして早く帰つて来ないかな、と思うシオンがいた。  
自分の考えた事が正しいのか早く試したい。  
その思いで頭が一杯だった。

海を見渡せば向かつて来る船を田にして自分が嬉々としているのが分かつた。

白ひげ海賊団が帰つてきた

\* \* \*

港に行けば、最初に比べれば多少劣るが結構な人が群がつていた。

そしてぞろぞろ船から下りてくる白ひげ海賊団。その手には金銀財宝が抱えられていた。

ドシャツ！と地面に置かれた財宝を住人達が見てびよめきの声や感銘の声が広がる。

そのびよめきを断ち切るよひげが口を開いた。

「これで宴を一月分出来るだけの酒と食料を取り寄せてくれ。足りるか？」

財宝を田の当たりにして少し落ち着かない町長。

「え、ええ。これだけ頂ければ充分かと…」

「そうか。なら後は任せた」

釣りは取つておけと言つよひげに差し出す白ひげに住人達は戸惑つていたが有り難く頂きお礼の言葉を言つていた。

実際お釣りは充分過ぎる程だ。

白ひげの言う一月分の酒と食料など財宝の一割程で十分だ。それ程のお宝の山なのだ。

そして残った財宝は町の資金に回される為、少しずつだが発展していくつてる。

財宝を受けとった町長達は早速準備に取り掛かるため動き出し、白ひげ海賊団もこれから自由行動みたいでそれぞれで動き始めた。

俺は目的のビスターを見つけ、ビスターやその仲間達にバレン様に一人になるのを待ちながら後を付けた。

そして段々とビスターの周りから仲間が居なくなるのを確認してか

ら声を掛けようかと思つたが、それと同時に辺りから人気が無くなつていく事に気付いた。

何故かビスタは段々と人気が無い所に向かつてゐる氣がする…まあこちらとしてはその方が有り難いのでそのまま着いていく。

そして辺りから完全に人気が無くなり

「　　出て来い」

突然口を開いたビスタにビクリとして身を竦める

向こうからは氣付かれるはずがないと思つていた。  
何で氣付かれたんだろ、と思いつつ血肉の身をさらけ出す。

「やつぱり坊主か」

まるで分かつていていたとでも言つように話しあうビスタ。

「…いつからですか？」

「ん？」

「いつから氣付いていたんですか？」

俺の質問に思い出す様な仕草をするビスタ。

「そうだな。たぶん俺が一人になつてからだ。たぶん坊主だと、そ  
んな気がした」

「そんな気がしたつて…」

めちゃくちやだ。要するに感で分かつたつてことなのかな？ その異常な第六感に驚愕する。

「やつこいつお前こそ、どうしてこつそり後なんか着いて来たんだ？ 港で普通に話し掛け来れば良かつたじやないか

「…………」

白ひげ海賊団になるべく関わりたくなかったから、なんて言えなかつた。

「…まあいい。といひで俺に何の様だ？ 何か用事があつたから來たんだるへー」

「…はー。課題の答え合わせがしたくて…」

「やつこいつとか…どうせ夜にはいつもの場所に行へつもりだつたんだがな……今すぐが良いのか？」

「クりと頭を縦に傾くシオンに溜息をいぼすビスター。

「…分かつた。なら場所を変えよう。此処では狭いからな

そのままビスターと移動した。

\* \* \*

「ここまで来れば良いか」

辺りは人気がない町外れ。

そこで剣を交えることになった。

わざわざ人気が無い所まで移動してくれたのはコチラを気遣つたビスタなりの配慮だと思う。

「この後俺も用事があるからな、勝負は一度だけだぞ?」

その発言にコクリと頷き木刀を構えるシオン。

ビスタもつられて渡された木刀に手を取る。

今回は狙いを一力所一力所に捕らえることなく意識を全身へ向けることを忘れないで攻めるのが課題。

視線を捕らえさせない為だ。

まだ予想でしかないがビスタは俺の視線を捕らえて防ぐ程の化け物じみた洞察眼を持つていてるという結論に至った。

ビスタは手にコインを持ち、ピンッ！と親指で中空に弾き飛ばす。そしてシオンは腰を落とし、コインが地面に落ちると同時に踏み出した。

5メートル程の距離を一瞬で詰め木刀を胴回りに打ち込む。

しかしガニッ！ という音が広がりビスタが手に持つ木刀で防がれた事に気付く。

ジリジリと重なり合う木刀。

流石に腕力では勝てずに押し返されてしまった。  
一度離れてから息を整え、再び地を蹴った。

花剣の剣士に舞うのは剣撃の烈風。  
端から見れば双方の姿は霞んで見え、ただ カンッカンッ！ と  
辺りには木と木がぶつかり合う音が き渡る。

「……むう」

課題の効き目があるのかビスターの顔が微かに変わった。 行ける！

そのまま連撃を繰り出すも全て防ぎ続けるビスター。

そして一旦距離をとるためにビスターは後方に飛ぶ。  
しかしここで逃がしはしない。

腰を落としてより一層脚に力を入れる。  
ビスターに向かつて飛び掛かるとした瞬間

「 そこまでだ」

「 …え？」

ビスターから抑制の声を聞きピタリと身体を止める。

「…以前より少し工夫をしてるみたいだな」

そのまま話し出すビスター。

「剣速や動きが前より速くなつてゐる氣もある。そして何より狙いどころを捕らえづらくなつた」

今回の課題を意識したかいがあつたのか長所をすらすらと答えていく。

「だが、それだけではまだ俺から一本取ることは難しいな」

しかし結果は無惨にも散つてしまつた。

「…なにが…なにが、いけなかつたんですか？」

「いや…特に悪い所もなかつた。しかしこれを言つたら課題を出した意味が無いしな…」

少し考える素振りをするビスター。

「そうだな…ならまたヒントをやる。さつき坊主が俺の後を着いて来た時、坊主の様な気がしたと言つた。なら氣とは何だ？ 気配とはなんだ？」

その問い掛けに顔を竦めるシオン。

「それが分かつた時、お前は俺から一本取れる様になつてる

対してビスターは口端をニヤリと上げる。

「また次に持ち越しだな」

そしてそのままシオンに背を向け歩き出す。

「…そうだ」

しかしそのまま行けば良いものを立ち止まって口を開くビスター。

「せっかくだからお前も一緒に来い」

「きなりの発言に」、「え？」と返すシオン。

「何処に行くんですか？」

「なに。とても良い」とひるが

ビスターの表情からは満面の笑顔が伺える。<sup>うかが</sup>

しかし、その笑顔とは裏腹に何か厄介事の気がした。

僅かに思考してから、失礼の無いように丁寧に頭を下げる。

「…折角のお誘いですが、お断りをせざるを得ません」

「なに、変な所じやない。終わった後はスッキリする所だ」

「でも…何か嫌な予感が…」

そこまで言うものの、「先程の相手をしてやつたろ？」「ここが理由で渋々ながら着していく事になってしまったシオン。

\* \* \*

目的の場所に着けばそこは散髪屋であった。  
聞けばビースタは髪形にもこだわつてゐる様で島に着けば良べ行くそ  
うだ。

そして今回はタイミング悪く俺が係わつてしまつた為にいつして着  
いて来てしまつた訳だが……

「よおマスターといあえず俺はいつも通り。そしてこの坊主は適  
当に切つてやつてくれ

「愚昧  
「愚昧

深々と頭を下げるダンディーな店主。

「どうか勝手に話を進めてもらひつて困る。

「……あの……自分は髪を切る気はないんですけど……」

「なに、心配するな。この店主の腕は保証する

「光榮であります

「いや、やうこいつ駄では無べてですな。切りたくないんです

「なんだ？ 愛着でもあるのか？」

「そういう訳でもないんですが……」

肩元まで伸びた自分の後ろ髪に前髪は表情が見えない程伸びていた

「なら切つた方がいい。それに坊主くらい髪が伸びてたら何かと邪魔になるだろ？」

「むう。と、うねり声を上げるシオン。

「それにだ。そのくらい長い髪を切れば視野も広がり攻撃を防ぎやすくなると思うぞ」

そして最後にこの一言だ。

今は少しでも強くなりたかったシオン。

ビスターの言葉に背中を押され、わかりました。と答えれば フツ、と鼻で笑い、勝ち誇った顔をするビスター……少しイラッとした

「本人からの許可は得た。盛大にやってくれ」

「畏まりました。では、とりあえず長さは全体的にカットし前髪は顔が見えるくらいの長さでやってこきます」

\*\*\*

店主は俺の髪を切つていてる最中に「」れは…」だの「おお」だの一人声を荒げていた。

一方ビスターは新聞の記事に集中している様で「チラを振り向かな  
い。

そして主なカットが終わったのか頭を洗う作業に入った。

「終わりました」

満足顔の店主

「終わつたか。どうだ？ 坊主くらい髪が長かつたらだいぶスッキ  
リし……」

新聞を見ながら話し出し、田を「チラに向けたビスターは絶句して  
しまつた……そんなに変なのかな？」

「坊主？ お前女だったのか？」

何を今更と思い半分呆れ顔になるシオン。

「なに言つてるんですか？ 自分は歴<sup>れつき</sup>とした男です」

「だつてお前その顔……」

「……」

ビスターに鏡の前に移動させられ自身の姿を改めて眺める。  
しかしビスターが女と間違えても仕方が無い  
そこには女としか形容出来ない姿が写し出されていたからだ。  
何度見ても女の様な自分の顔を見せられ小さく溜息が出る。

「…だから切りたくないなったんですね」

あまり人に注目されるのが苦手な為若干氣落ちするシオン。

その一方テンションが上がって口を開く店主。

「素材が良かつたのでコチラも切つていて楽しかったです。つい夢中になつてしましました」

少し趣味に走つてしましましたが。と付け足す店主。

全くもつて余計な事をしてくれた。

店主の趣味のせいか余計に女の子っぽく見えてしまつ。

そして悪戯心が働いたのか、ビスターの発案でマルコに会わせて驚かせようと叫び出した。

シオンは嫌々ながらビスターと一緒に店から出てビスターはシオンの手を引きながらマルコを捜し始めた。

町を少し歩き回つてから見つからぬマルコに頭を悩ませたビスマス。

そんなビスマスに、少し待つて、と伝えビスマスから離れて精神を集中して『沁』とのバスを繋ぐ。

『沁』、聽こえる？

『なに用だ？』

マルコを捜してるんだけど何処に居るか知らない？

『ああ。それなら此処にある』

此処。といふことは、『沁』は基本稽古場から動かない為稽古場に居ると分かった。

『童を待つておる。早く行つてやれ』

『沁』に御礼を言つてからビスマスに「着いて来て」と伝え今度はシオンが先導して稽古場に向かつ。

\* \* \*

稽古場に着けばマルコが地面に座り込み海を眺めていた。

その後ろ姿を確認したビスターは、本当に困った事に驚いたのか目を見開いている。  
そのまま歩いてマルコの後ろまで行けば、

「やつと来たか。ビスター、と……誰だ?」

振り返り際に言い放つマルコ。

「くくく。驚いたか? そつこいっは

「そつちの趣味に走ったか……」

しかしビスターが思つていたリアクションとは別に歎くマルコ。

最初こそ意味が分からず、「は?」と返すビスターにマルコは…

「いや、悪い。お前がロリコンだったとは知らなかつた。でも気にすんなよ!。それでも俺達は…家族だよい」

そこまで行き、やつと言葉の意味を理解したのか否定し始めるビスター。

悪戯しようとしていたビスターに対してマルコはその優しさで応えてくれたのだ。

一見したらとても良い話に見えるが実際はそうでもなかつた。

そんな光景が面白く隅で静かに笑つていれば誤解を解いたビスター

から改めて呼ばれる。

「それで？ そのかわい子ちゃんは誰だよい」

マルコの反応を見る限り、ビスターがまだネタをばらしていない事に気付いたシオン。

「どうも、シオンですよ。マルコさん」

「……なん……だと……？」

その発言に信じられないと言ひ様な顔をするマルコ。

しかし髪の色等、何で髪を切らなかつたのか事情を話せば納得してくれた。

そしてまた夜に会つとこいつことでこの場は別れた。

しかし一部の船員が街中で、ビスターがシオンの手を引いていた瞬間を見ていた為。

この日、『ビスターが目覚めた』といつ噂が白ひげ海賊団の中で知れ渡つたのは余談である。

「ただいま」

「シオンちゃんお帰り~」

家に着けば出迎えてくれる母。

しかし、シオンの姿を田にした母は固まってしまった。

「…………」

「…………」

そのまま母と田が合つたまま僅かな時が流れ、

「…私に切らせてよー。」

と、こきなりの怒声にピクッとあるシオン。

「や、そんなに怒りなぐても…」

「だってシオンちゃん！ 今まで私が切らつとしても拒み続けてた  
じゃない！ そりゃ怒るわよー。」  
皿つ四である。

今まで人田を気にして伸ばし、自分で切っていた。なにせこの

母に任せると今以上に酷い事になってしまったのだ。

だがそんな理由も今は気にしてられない。

そこで今度から髪を切る時は母に頼む事でこの場での怒りを納めてくれた。

そして、何故かこの田はいつも以上に強く抱きしめられながら眠りに就く羽目になったシオンであった。

## 第十一話 白ひげ海賊団（前書き）

お久しぶりです！

始めましての方は始めまして m(・\_・)m

更新なかなか…

けつこう…

かなり…

遅れてしまいました。申し訳ありません m(ーー) m

しかし！

遅くなつても更新は頑張つて続けます！  
これからもよろしくお願ひ致します！！！

## 第十一話 白ひげ海賊団

自惚れかもしれないけど、俺はこの世界に来てから強くなつたと思つ。

生まれた時よりも俺の精神力は遙かに洗礼され、鍛えた肉体はそこの辺の大人より上だ。

「やーい！男女！ 男女！」

「男の癖に女みたいな顔しゃがつてーー！」

だからこゝな状況屁でもない。

あのビスター達との辛い修業に比べれば全然対したことないじゃないか。

あ…小石まで飛んできた。

飛んできた小石を避け、そのまま子供兄弟を無視して待ち合わせ場所で目的の人物を待つてること数10分。

「こらこら。お前達止めないか」

「「ビスターさん！！」

いきなり現れたビスターに驚く兄弟。

「だつて！　あこつだけ白ひげ海賊団の人達と話せるなんですね！  
じゃん！」

「もうだよ！　僕だつて白ひげ海賊団の人達と一緒に遊びたい！」

「やうは言つてもな…」

別に遊んでる訳でも無いんだが…と面葉に詰まるビスター。

「…遅いですみ」

少し不機嫌氣味のシオンが話に割つて入る。

「ああ　悪い悪い。これでも急いで来たんだ。それにしても坊主、お前イジメられてたのか？」

「誰のせいでこうなったんだか…」

怨みを込めて視線を送れば少しあざけるビスター。

そうだ。元はと言えばビスター達が絡んで来たのが悪い。

この兄弟だつて俺がビスター達と関わらなければ何もしてこなかつただろうし、髪さえ切らなければ周りの子供達だつて氣味悪がつて寄つて来なかつただろう。  
何より顔を曝あらわしたくないと思つていた自分がいたので余計な事をしてくれたとつくづく思つ…

シオンが一人でぶつぶつ愚痴つてゐ間にビスターは兄弟に別れを告げてから歩き始め、その場から移動する。

シオンもそれに続いて後を追う。

「…それで、話つて何ですか？」

「ああ実はな…」

\* \* \*

「船まで着いて来て欲しい！？」

「ああ」

いきなり白ひげ海賊団の船まで来てほしいと切り出したビスター。その発言に驚き、つい進める足を止める。

結構今更かもしれないが原作の登場人物には関わらない様にしているシオン。

当然の様に拒否体制に入る。

「…なんですか

そのまま疑う視線を送りながら、とりあえず訳だけでも尋ねてみれば、言い淀よどんでしまって何と言つていいか良く聞こえない。

しかしどうしても来てほしいと一向に譲る気がない事からするに余程の事と見る。

「どうしても行かなくちゃいけないんですか？」

「ああ。お前との噂うわさが皆の耳に入つてな。誤解を解いて欲しいんだ」

「噂うわさ？」

自分とビスターの噂うわさ…………考かんえられるとしたらビスター達に指導を受けていふといふことしか思い浮かばない。

でもそのくらいこの噂で何の誤解を受けているといふのか……

訳も分からず思考してると、有り無しを言わゞしてビスターがシオンの手を引っ張り連れていこうとする。

「まあとにかく行こう。考かんえていても仕方ないしな」

「ちよつーちよつと待つてくださいー もつ少し考かんえる時間をー」

「別に移動しながらでも考かんえられるだろ?」

シオンが抵抗するも気にせず引っ張るビスター。

そんな時に四人組の白ひげ海賊団の船員と遭遇してしまった。

「　　「　　」　　」

「　　「　　」　　」

見てはいけないものを見てしまった。  
と驚愕する四人組。

「　　ついにそっちの趣味に行つてしましましたか…」

そしてその間が耐えられなかつたのか一人の船員が口を開く。

「悲しいッス！　隊長が本当に少女趣味だつたなんて…！」

「バカ。お前本人前にしてそういうこと言うな…」

「前から口リコンつぽい顔だなあとは思つてましたけど、まさか本  
当に口リコンだとは思わなかつたです」

それに続くように次々と口を開く船員。  
しかしそれを全力で否定するビスター。

「だから違つと言つてるだろー。コイツは男だー！」

なんとか誤解を解きたい為に批判する。しかし…

「男……だと……？」

「もハジン引きッス！ 話し掛けないでトセコッス……」

「ショタだ。ショタに田覚めたんだ」

「真正の変態でしたか……救い様が無いですね」

「心がズタボロになるまで切り刻まれたビスター。なんとこうか、可哀相でならない。

だいたいの状況を察するにビスターは自分との関係を船員の皆に話してほしかった、ってことか？

どういう訳か白ひげ海賊団内では俺とビスターが付き合つてゐるという事になつてゐらし……

まあでも、このまま誤解された状態でも別に支障なんか……

「お前も少しば<sup>は</sup>否定しろー。誤解された間々だと何<sup>いす</sup>れは町中に広がるやー！」

「…………」

「やーーー。変態変態ー。」

「やーね。あんじのシオンちゃん、男の子なのに白ひげ海賊団のビ  
スタさんと付き合つてるらしくわよ」

「本つ当おにー アンノの家は教育がなつてないわねー。イの島の  
恥だわー。」

「おめえんど二に続る痴品ばねえー。ヒヒヒと帰つてくれー。」

思い浮かぶのは島全体からの罵声、イジメ……  
俺だけならまだ耐えられるかもしれない……けどそれが家族である  
母さんにまで迷惑が掛かつてしまひ……

散々イジメられた後は家族揃つて野垂れ死に……  
それだけは

「…………それだけは避けなければ……」

先に子供兄弟に石を投げら事もあつ、シオンは暗い思考しか出来  
なかつた。

考えられる最悪な現象を予測して、何としても防ぐことを決め

る。

いつの間にか船員四人組とビスターの会話は終わっており、その場には俺とビスターだけしか居なかつた。

「…ビスターさん」

言葉の斬撃によりネガティブな状態に陥つてゐるビスター。

「行きましょひ」

「そ、そつか！　来てくれるか！」

沈んでいたビスターの表情が一気に晴れる。

涙ぐみながら喜ぶからして相当嬉しかつたのか

意を決して白ひげ海賊団と顔を会わせる事にした。

出来ることなら、なるべく早めに誤解を解いておきたい。

\* \* \*

ビスターに着いていけば、目の前にはモバー＝ティック号。

内心関わりたくないとは思いついていたけど、自然と胸が高鳴ってしまう。

今まで見てるだけで満足していた世界。

本当に自分はワンピースの世界に来たんだなあと改めて認識する。

誰にも気付かれない様に彷彿とする中、甲板に足をかけ、その船内に足を踏み入れる。

途端、

田の前に広がる光景に圧倒された。

そこには白ひげ海賊団全隊長含め、世界最強の男。白ひげ、エドワード・ニコーゲートが居たからだ。

「

我を忘れた。

それは感動と実感、二つの感情が同時に身を襲つたことから起き

た。

たまらず田から涙がこぼれ落ちた。

その場に居る全員の田がシオンに集まる。

田の前にいる白ひげから発せられるその存在感。それは世界最強に恥じないモノだった。

遠田から見ていただけでも十分に伝わって来ていたモノが今は田の前で放たれている。

その差は比べ物にならない。

肌にヒリヒリと伝わるその霸気に圧倒され、今にでも倒れてしまいそうな程の目眩に襲われる。

流石は世界最強、と言われるだけの事はある。

「シ、シオン坊。別に怖がらなくとも此処に居る奴らはお前に危害を加えたりしないよー」

心配になつたのかマルコが話しあげて来てくれた。

「あつ……ち、違つんです……これは、そつじやないんです……」

「……」

そこで始めて自分が泣いているんだと気付き、慌てて涙を拭う。

今までシオンの四歳児ならぬ言動と態度で接してきたマルコ達は動搖を隠せなかつた。

「そりゃいきなりこんなむさい野郎共に囮めたら怖がるのも仕方ないかも知れないが、泣くほど嫌だつたかよい」

「あつ！ 隊長そりやないつスよ！」

「そうですよ！ 元はといえば連れて來たビスタ隊長に責任があります！」

「何を言う！ だいたいお前らが変な噂を広げるからこんな場所まで連れて來たんだ！」

「ほら嬢ちゃん。飴あるだ。食べるか？」

さつきまで沈んでいた空気が一変して、白ひげ海賊団の人達がシオンを慰める様に接してくれる。

（何て言うか、暖かい人達だな）

自然と顔が綻んでしまつシオン。

関わりたくなかつた

でも

着いてきてよかつた

よかつたと思う中、ビースタが自分との関係を説明する。しかし誰ひとりとして話を聞いていないよづな…

「ああ。そんなの冗談に決まってるじゃないですか」

「つなー。」

「だいたい隊長達、最近の宴の時はいつもその子の話で盛り上がってるじゃないですか。話し声がいつも聞こえるんですよ」

「最初こそ女の子だと思ってビックリしましたけど、まあ馴れちゃえばどうしたことないでしょ」

いつも酔った勢いで話していたらしい彼のビースタは口を盛大に開け放心している。

覚悟を決めて来たけど、とんだ無駄骨だったみたいだ…誤解も解けたみたいだし早くこの場を去りたい。

「でもや、ビースタ隊長達に教えを受けてるってことは結構強いのかな？」

(余計な事を……)

「ふん。馬鹿を叫ぶな。坊主はお前より数段強いぞ。何と言つてもこの俺が指導してるからな」

放心状態から素早く抜け出し、ソルジャーばかりに胸を張るビスター。

「おいおい。ビスター、一応俺も指導してる一人だぞい。」

話しに加わるマル。「

「おもしれえ！　おい！　お前行けよー！」

「馬鹿言つな！　俺が相手したらあの子がケガするだろ？」「！」

流石は白ひげ海賊団の船員。

腕に自身がある強者ばかりみたいだ。

「ゼハハハ。

隊長達。なら、こんなのはどうだ？　いつもあんたらがやつてることを俺達に見せてくれよ」

「ティーチ」

「つー」

「ぐんっ、と胸が高鳴った。

今この場では俺しか知らない未来が頭をかすめる。

マーシャル・D・ティーチ。

通称黒ひげ。

四番隊隊長サツチを殺し、悪魔の実（やみやみの実）を持ち去り逃亡。

その後に、今はまだ居ない一一番隊隊長、火拳のエースを捕らえる。

後に七武海の称号を得てインペルダウンに潜入。  
史上最悪の囚人達を仲間にした後、頂上戦争に介入。

白ひげを討ち取りその能力、『グラグラの実』の能力を取り込む。

そう、

コイツは白ひげ海賊団の、いや世界の元凶。

しかし、自分にはどうする事も出来ない。  
原作には関わらないと決めたんだ。

「ああ。それでどうだい？俺の提案は？」

「そうだな。坊主の実力を見せるにはそれが一番手っ取り早いが。  
おい、誰か木刀を取ってくれ」

仲間の船員から三つの木刀を受け取り、内一つを手渡されるシオ

ン。

「今日は少し本気で行くぞ。

部下の手前、負けるわけにもいかんからな」

そしてビスターは一本の木刀を手に取り戦闘体制に入る。

両者の準備が整った事をマルコに伝える。

「そんじゃま

二人とも準備出来たみたいだし、コインが落ちたら始まりだよい」

マルコの意図によりコインが空中に放たれる。

キーンッ！

とコインが地に落ちると同時にビスターが前に飛び出しシオンがいる場所に向かつて突きを放つ。

しかしシオンはその攻撃を読んでいたかの様にいなしてかわし、反撃の一撃をお見舞いする。

途端にぶつかり合う木刀と木刀。

そのまま互いに打ち合つ両者。

防いでは攻め防いでは攻めの繰り返し。

どちらも一向に勝利を譲る気が無く、当たれば致命傷は避けられない連撃が繰り出され続けた。

そんな一人の動きは戦闘の領域を越え、舞の域まで昇華した。

その動きはあらゆる人を魅了してあらゆる人を虜にした。

その動きに皆が見惚れ、時の流れを忘れた

　　スパーク！！と  
　　結果はシオンのスタミナと集中力切れでビスターに袈裟切りによる一  
　　撃を貰ってしまった。

　　しかし流石のビスターは僅かに息切れしている程度でかつまだ余裕  
　　がある表情だ。

　　そしてシオンが傷を負わない様に決めの一撃は加減してくれてい  
　　た。

　　しかしそこで可笑しなことに気が付いた。

　　辺りを見渡せば静寂が広がり誰ひとりとして口を開く者は居ない。

「お、終わりましたけど…」

意を決して口を開くシオン。

「ハハ

途端

「　　「　　「　　「　　「　　「　　「　　「　　「

一時の間を置いて歓声が湧き、辺りの空気を震撼させる。

「すげえ！ ビスター隊長と渡り合つてたぞ！..」

「信じらんねえ！ あの体の何処からあんな攻撃が出せんだよー。」

「ゼハハハ！ こりゃ参った。隊長が言つてた事は本当だったか！」

称賛の声が絶え間無く続いた。

負けてはしまったが、シオンは褒められた事によつ今まで自分が

積み重ねて来たことが無駄ではなかつたと、今度は嬉しさのあまり涙がこぼれた。

顔に熱を感じてる事から今の自分はさぞかし酷いことになつてゐるだろうと予想するが、出てくる涙は決して止まらなかつた。

彼が今まで続けてきた特訓は本当に辛かつたからだ。

自分はどのくらい強くなつたのだらう。と、

いつそ特訓など投げ出してしまつて母と一緒に楽しく暮らすのも悪くはない。

かわいい嫁さんを迎えて平和ボケしながら世継ぎを残せていたいから、さぞ幸せだらう。

そんな誘惑が幾度と無くシオンに襲い掛かった。

しかしそんな仮想の平和など決して長くは続かない。

ただ攻められるだけの暴力にビクビクしながら暮らしていく未来など、決して幸せは築けない。

だからこそ自分が強くなつて自分の平和を築こうと努力した。

その努力が今、僅かだが実つたのだ。  
嬉しくない訳がない。

しかしそれと同時に、とても自分勝手な自分が少し嫌になった。

そう、これは全て自分の為。

人は詰まるところ自分の事しか考えない  
何処まで行こうと自分自分。

自分の幸せの為に他人を巻き込む。  
自分の幸せは平和に生きること。

それが少しずつだが確かに近付いて行っている様で嬉しくもあつた。

\* \* \*

「よつマルコ。俺に見せたかったってのがあの鼻たれか？」

「ああ。実はこの島に来た時に出会ったんだが、親父……気に入つたかい？」

「ぐじぐじ。まあ面白くはあるな」

「…そつか。それは良かったよい」

ボロボロと涙を流すシオンを微笑ましく眺める白ひげとマルコだつ

た。

第十一話 別れ

現在

ビスターと打ち合つた後、さつさと帰りつとしたら宴に付き合えと声を掛けられた為に強制参加中。

日は沈みかけ夕方になるもそんなの関係なく宴に付き合わされる。

「ほらもつと食え！ 沢山食べないと大きく成れないぞ！」

「…はい」

「坊主！ こいつの飯も旨いぞ！ 食え！」

「…はい」

「こいつちおいで！ おーよしよし！」

「…はい」

所々でいじくり回されるシオン。

助けを求める様にマルコとビスターを探すが目的の人物は盛大に飲み明かし、なんか取つ組み合つていた。

「俺だ！」

「いー や俺だね！」

「これだよ。あいつら最近飲むとお前はどうちを好いてるかなんて  
言ひ合つてるんだ。

この前だつて俺がお前に言おうとしたら思いつ切りド突かれちま  
つたのに、自分達でバラしてちや意味ないと思わないか？」

気付けば隣に四番隊隊長のサッチがいた。

「はあ…ぐだらないですね」

「まあそつ言うな。ある意味ハーレムじゃないか。他の奴らにも氣  
に入られてるみたいだしな」

「なんか違う気がします」

「そうか？」

何処か悪戯臭い笑顔を浮かべるサッチ。

この人は本当、根っから人をからかう癖があるのかも。

サッチに散々いじくり回された後、船から身を乗り出し体を休め  
る。

港の方を眺めていれば、昼間の兄弟が羨ましそうにひたちの方を

見ていた。

手招きしてみると嬉しそうに寄つて来る兄弟。

「すいませ。あの子達もこの船に乗せてあげてくれませんか？」

「おおこら。おこ！ 橋を下ろしてやれ！」

近くにいる船員に頼んで兄弟を船に乗せる。

「す」「ー！ おれ白ひげ海賊団の船に乗つてるー！」

「町のみんなきつと羨ましがるだらうね！」

想像以上に喜ぶ兄弟。そんな一人がシオンに近付いて来た。

「お前… さつ キは悪かつたな。『めん。石なんか投げたりして…』  
「『めんなど…』」

ペコりと頭を下げる兄弟。

「なんにも素直に謝られると癪着する感じてしまへ。

「もういいから。気にしないで、ほら。  
二人をみんなが待つてるよ」

「やうか！ じゃあまたなー！」

「またね！　お兄ちゃん！」

うん。全然許すよ。俺の代わりに散々弄もてあわばれて貰えれば。

少し黒い事を考えるシオン。

楽しそうに白ひげ海賊団と戯れる兄弟達。

「俺は将来！　白ひげ海賊団に負けないくらいの海賊になつてやる  
……」

「僕だつて……！」

はは。何だかこの兄弟を見ているとHースとルフィを思い出すな。  
実に子供らしい夢だ。

微笑ましくこの兄弟を見つめるシオン。

……やつこえば、原作つていつ頃始まるんだろ？

原作では白ひげが点滴をしていた。

それに白ひげがこの島に来てからHースの姿は見てないのでまだ  
先だとは思つけど

「楽しいか？」

背後から突然声を掛けられ一瞬驚くも振り返りその姿を確認する。

「ええ。いい人達ばかりですから」

まさかの白ひげが声を掛けってきた。

「そうか…」

シオンの横に腰を下ろす白ひげ。

辺りは兄弟と遊ぶ人。酒に溺れ酔い潰れ始めている人。飲み比べを行う人達ばかりだった。

「ここまでじんちゃん騒ぎされると、つるさじを通り越して微笑ましい光景だ

「そういうえば、名前を聞いてなかつたな」

「…シオンです。シオン・オルテンシア。  
えと…白ひげさん？」

「……」ユーティーでいい…坊主。  
話を、聞かしてくれねえか？」

「…？」

「話して、どんなです？」

「なんでもこい。」Jの島の話しども、お前の親の話しども…」

「Jの島の人達はいい人達ですし、親は…父は自分が生まれてくる前に他界してるんですけど、母は元気ですね」

「…そつか。悪い事を聞いたな…」

「いえ、でも…」

(なんで母さんは白ひげ海賊団が嫌いなんだろ?)

「…でも…なんだ?」

「いや、貴方達はJの島では紛れも無く英雄ですけど、一部にとても避けられているんです…」

間違つてもうちの母親ですとは言わない。

「……」

僅かに思考する白ひげ。

「…そつか。」

なにか分かったのか話しを打ち切る白ひげ。

「もう夜も遅い時間だ。誰かに送らせよつ……」「

気付けばすっかり日が暮れ、所々で家に光が燈ともされる。

船内を見回す白ひげ。

しかし皆が酔い潰れて地面に寝転がっている。

「まったく……馬鹿な息子達だ。風邪引いちまつぞ……」

一人一人の顔を眺める白ひげ。

その瞳には愛情に似た光を感じた。

「ならしかたねえ」

重い腰を上げる様に立ち上がる白ひげ

「俺が送つてやる

「…え?」

僅かの間を置いてシオンから氣の抜けた声がこぼれ出た。

「俺が送つてやると言つた」

「い、いいですよー送つて頂かなくとも一人で帰れます!」

「そう遠慮すんな。ガキ一人無事に帰してやれなけりや俺の名折れだ」

「一人つて、あの兄弟は?」

「とつぐに帰つた」

何故その時に俺にも声を掛けてくれなかつたのか疑問に思ひ…

『 酷い事を考えていた癖によく言つ 』

『沁』の声が聴こえた氣がするけど、わひと氣のせいだ

だけど…

今更言えない！ 実は貴方達を避けてる一部の人には、うちの母なんです。とは…

なのでこのまま家まで送つて貰つと非常にまずここと…

\* \* \*

散々遠慮したがそのまま送つて貰つ事になり、白ひげが先導してくれている。

襲つて来る人はいないと思つが心強すぎて逆に恐いくらいだ。

「……」

その沈黙が気まずさぎてシオンが意を決して先に口を開いた。

「…あの、一つ聞きたかったんですけど」

「なんだ?」

「どうして、『ヨーゲートわんぱく』の虜を自分の物にしようと思つたんですか?」

僅かに思考する白ひげ

「……そんなもん決まつてんだろ……」

「…氣に入つたからだ」

「は？」

思わず答えに唖然とするシオン。

いや、ある意味海賊らしいと言えば海賊らしいのかもしれない。  
ただその規模が想像の遥か上を行つたまでのこと。

「たつたそれだけの理由で自分の島にしちゃつたんですか？」

「それだけじゃねえ、その（・・）理由があるからこそ、てめえのもんにしちまつ。  
それが…海賊つてもんだ」

「は、はは…」

笑うしかなかつた。

本当にこの人は、何もかもが規格外過ぎる…

「…大きい、ですね」

「ぐりりり。なに当たり前の事言つてやがる。俺あ白ひげだ。  
…ああ、此処までだな。後は一人で行けるな」

「え？…あ、はい。此処まで送つていただければ十分です」

森を抜け、気付けば家は数メートル先にあった。そのまま母に会われたら発狂しかねないので願つたり叶つたりだ。

白ひげに別れを告げ一人で家に向かつ。

家のドアを開け、中に入らうとしたら…

「シオンちゃん…！」

「…やなつづいたの…？」

家に入ればいきなり母が抱き着いてきた。

「…こんなに遅くまで帰つて来なかつたからママ心配したんだよ…」

「…そんなに心配する」とでもないでしょ？ いつもの事だし

(やつこえぱ…)

「そんなことないわよー 今は海賊もいるし『隕』をつけないとー」

(じつじて白ひげは俺の家の場所を知つてたんだろ？)

「母さん……落ち着いて」

まあ良いか…今はこの母親を落ち着かせる事が先決だ。

\*\*\*

「シオンちゃん！！」

「こきなつどうしたの…？」

その親子を遠目から見て、白ひげは何処か微笑んでいた。  
そしてそのまま自分の船に戻る為に来た道を戻る。

船に着けば、すぐに自身の部屋に入り椅子に座り込む。

最近は体調も良いとは言えない状態が続いている。

その状態にも何人かにばれ始めてるので息子達の間で広がるのも時間の問題か。

僅かに思考していると扉がノックされている事に気付く。

「親父。少し良いかい？」

入つて来たのは一番隊隊長マルコだった。

「ああ。こつてえどうした？」

「親父。いつもの親父なら息子にするつて思つてたのに、どうしたんだよい……あいつは親父が求める次世代の卵だ」

その言葉を聞いてヒクリと白ひげの臉まぶたが僅かに反応する。

「…何言つてやがる。あんな鼻たれになんざ海賊業は務つとまらねえ」

「そんなもん経験を重ねたら関係なくなるぞ」

「……あいつはダメだ…」

何処か遠くを見詰めながら囁つて白ひげ

「訳を…聞いても言いかい？」

「ぐりりりり。奴はまだまだいせえからな、この危険な海に連れ

出す訳にもいかんだろ」

「親父も見たはずだろ、シオン坊の強さを。それには他の中員達とも仲良くやれる。何の問題も無いじゃないかい。」

「それでも、ダメなもんはダメだ」

「でもよひ…親父…」

「マル」。

「これは船長命令だ。これ以上あいつの会話を止せ」

「…わかったよ。 親父」

\* \* \*

血ひげ海賊団の宴に付き合はされた翌日。

「今日出航するんですかー?」

「ああ。親父が急な用事が出来たりしてな。直ぐに出る

血ひげの用事により島を出る事になつたらしひビスタがその」

を知らせに稽古場まで来てくれた。

「答え合わせ……」

「ん？……ああ、気配の事かそれならまた今度会う時でも

「ビスターさんが言つた氣配つていうのは、予備動作、重心の移動、音、視線。人から発せられる全ての現象の事を言つんですね」

驚いているのか目を見開いてるビスター。

「…なんだ坊主。お前気付いてたのか。  
てつくり次に会う時までの楽しみに取つておこうと思つたんだが  
な」

「まだ仮定の段階だつたんですよ。  
確信するまでは…言いたくなかったんで」

「な…」

そう、今思えばビスターはヒントをくれていた。  
俺がビスターを追跡した時にあえて人気がない所に向かつたビスターの行動は、よくよく考えてみると不自然すぎた。

その中に自分が発してゐる氣配に気付かせるヒントが有つたのに俺

は気付けなかつた。

しかし予想していく内にもしかしたらと今の仮定の話しがしたら、見事に引っ掛けつてくれたみたいだ

「やられたよ」

呆れたのか鼻で笑うビスター。

「なあ坊主……なんならこのまま……いや、なんでもない。元気に暮らせよ」

「…？　はい。ビスターさん達もお元氣で」

今日まで指導してくれた事を感謝しながら深々と頭を下げるシオノ。

そして船が出る準備が出来たのか、マルコがビスターを呼びに飛んで来た。

「ようビスター。準備が出来たよい

炎々と燃え上がるその両腕。

悪魔の実、動物系幻獣種モデルフェニックス。

それがマルコの食べた実だ。

マルコが纏う炎をシオンが眺めていると気が付いたマルコが話しか

けてきた。

「ああ。そういうえばシオン坊に見せるのは始めてだったか。そう俺は能力者だ」

今度は完璧な不死鳥になるマルコに乗り込むビスター。

その炎は熱くはないらしい。

「またな坊主。次に会う時はもっと強くなってる事を期待している

「元氣で暮らせよ!。シオン坊。またな

そして飛び立つマルコとビスター。

そのまま港に行き町中の人達で見送る船出

遠くなっていく白ひげ海賊団の船をいつまでも見送るシオンだった。

\* \* \*

島から出航したあとビスターは島の方角を見詰めていた。

自分で気付けたあいつならきっと強くなれる。また…次に会える時が楽しみだな…

「なに黄昏たそがれでんだけ」

小さくなる島を今だに見続けるビスターにマルコが話し掛けってきた。

「…俺達が居なくなつた後、島の状況が心配だつたんが…」

「まあ、親父の旗もあるからな。大丈夫だろ」

「だな…そしてなにより、坊主がいる」

「ああ四歳のシオン坊に頼るのも釈しゃくだが、あいつの強さは本物だからな」

島の方を眺めながら微笑むビスターとマルコだった。

第十一話　一年後（前書き）

いやせや、まさかこんなにも更新できなくなるとは思ってませんでした。

今はリアルが忙しそうです（吉川駿）

## 第十二話　一年後

白ひげ海賊団が島から離れて一年の月日が経つた。  
島は一年間、平和な日々が続き、定期的にだが白ひげのところの船員が島の様子を見に来ている事がわかつた。

そんな俺は現在5歳。

この一年間ただひたすら”御守り”をしていた。  
自身の事で変わったことと言えば身長と髪が少し伸びたくらい。  
後は…

「シオン！　なにボーッとしてるんだ、つよー！」

「ぶんっ！」とこう風切音と共に少年の木刀が虚空を斬る。

（一年前に仲良くなつた兄弟達が、今では頻繁につるむ様になつてしまつたことが…）

田の前にいる少年は勝ち気な性格で町では番長的な位置にあり、俺より一つ年上。それが兄のヨウだ。

白ひげ海賊団が旅立つてからと言つもの、兄弟の片割れ、兄の方はひたすら強くなろうと特訓を始めた。

最初の頃はまだ良かつた。

朝のランニングで俺が走つてゐると、いきなり横に現れ競走をしようと提案してきたり、町での力仕事に積極的に取り組んだりと、なかなかに好青年たらしめる行動をとつていた。

しかし、最初の一月くらいで、あきた。と言ひはじめてからは酷かつた。

島には町の反対側に、森がある。

俺の”稽古場”とは別な森で、危険な肉食動物こそ居ないが、そこで猿等の動物と戯れたり、その姿はさながらターザンを思わせる。

一度夜遅くまで帰つてこなかつたヨウを心配した親御さんは町の人達に協力してもらい、島中を捜した末に件の森で発見された。

その捜査に協力していた俺と我が家の中の母だが、「家のシオンちゃんはもうと遅くに…」と、嘆いていた気がするがそこは聞かなかつたことにした。

親に散々叱られたヨウは懲りたのか泣きながら親に詫びていた。

しかし、「どうしても強くなりたいんだ」と言う少年の言葉を聞き入れ、どうしたものかと考えた大人達はシオンに任せると言つことで歸は一任した。

当のシオンは最初こそ「はあ！？」と驚愕し、断ろうとしたが大人達の期待の視線を一身に浴びてしまい、断るに断れなくなってしまった。

そんなシオンの元、多少まともな特訓に切り替わった。

朝のランニングから基本的な筋力トレーニング。

しかし先の捜査以降、シオンは夜中に入り禁止を受けてしまった。

なんでもサキ叔母さんやら近所の奥さん方に、夜中に子供が一人で出掛けるのは”非常識”ということを教えられた母は、心を鬼にして講義してきた。

“シオンちゃん！　お母さん心を鬼にして言ひね……　当分は夜の外出を禁止します！……”

“……なんで？”

“……ふえ？”

反論されることを予想してなかつたのか呆然とする母。

“だ、だつてだつて、私はシオンちゃんのお母さんなんだよ？  
心配するのは当然じゃない！”

“心配するのは確かに親の仕事だよね。けどその子供を信頼するのも親の仕事だと思うんだ”

見た目に対して正論と思わしき言動で何とか言こぐるみよひするシオン。

そんなシオンにたじろぐ母。

「で、でも！ 夜はお母さん一人で寝るの寂しいし…」

一般常識など関係無しに、自分の思つたことを口にする母。それが本音か…

「そんな我が儘言つて、嫌いになつちやうよ？」

〔冗談のつもりで言つた言葉。しかし効果は絶大だったみたいで…〕

「やだやだ！ む願いだからお母さんの事嫌いにならないで！」

「…それなりにすれば良いか、分かるよね？」

途端、瞳から光を失う母。

「…うん。私はシオンちゃんの行動に一切口出ししない、関わらない」

いつの日だつたか図書館で催眠術について勉強していたシオンは面白半分で試してみたが効果の程は思つていた以上だ。

これで今まで通り夜の訓練が出来る。

そう思つが、しかし母が心配しているのも事実。

そして結局母の言つ事も尊重して、今では夜の外出は”なるべ

く”控えている。

まあ、三ヶ月少年にやる氣が有るのは構わないが、その特訓に俺まで付き合つてゐるのだ。  
たまたまではない…

しかし、放置しておくと度の過ぎた特訓方法に勝手に切り替えてしまつ為に、見守るついでに特訓に付き合つてゐる。

小さい子供に催眠術をかけるのも気が引ける。  
「はあ…」と溜息を漏らすシオン。

思考を現実に戻し、目前で木刀を振るう少年に視線を戻す。

「ん？ ちよつと考え方事」

尚も視線の一寸先を通り過ぎる木刀。

「それにしてもお前、すばしっこい、つなあ！」

「そんなことないよ。少し体の軌道をずらしてるのでだから、實際はそんなに動いてない」

体の軸を横に動かし、目前を木刀が通り過ぎる

「お前も少しば攻めて、つ来いよー。」

「いや。俺は攻めるのは向かないから。  
怪我もしたくないしね」

一向に当たる気配がない木刀はただただ虚空を斬るばかり。

数分してから息を切らした少年ヨウ。

「くつそ！ ダメだつ！ 全然当たらねえ！」

「もう休む？」

「ああ 一呼吸したら再開な」

「本当負けず嫌いだよね。まあ良いけども」

快晴の空を眺めながら休憩する一人。

町の方を見れば遊具で遊ぶ子供達がうまうらしてあり時は平和に過ぎていく。

実際に良いことだ。

「 なあ シオン…」

唐突に口を開いたヨウ。  
その瞳が「チラ」を捕らえる。

「お前から見て、オレって強くなつてるか?」

彼と付き合い始めて早一年。

その成長の早さは他と比べても郡を抜いていふと言えた。

「…まあ、同年代の中じゃ飛び抜けてる、かな  
思った事をそのまま口にするシオン。

「 やうか…！」

ヨウは沈んでいた表情が途端にパッと晴れ、笑顔を浮かべる。

実際彼くらいの歳で此処まで動ければ良い方なのだろう。  
しかし大人と本気で試合をしたとして、勝てはしないと思つが…

考えに耽つてると遠くの方から弟さんが兄を迎えていた。

「 ヨーワー、お母さんがご飯だつて！」

「の弟さんは兄よりも大人しめで海賊になると見栄を張つていた  
割には兄ほど特訓を行わない。

ミリア

それが弟の名前。

俺よりも一つ年下でよく懐いてくれてる面倒見の良い弟だ。

「シオン兄ちゃんも食べに来る?」

ヨウに對して兄と付け加えわないくせにシオンに對しては兄と呼ぶミリア。

(まあしいて言えば…)

上田遣いで言いつつ、抱き着いてくるミリア。

(”若干”兄より大人しい分、スキンシップが激しいのが問題か)

「そつかそつか！　じゃあシオン、オレもう行くわ！」

氣に入らなかつたのか俺とミリアを引きはがす様に間に割つて入るヨウ。

その勢いに押され若干後ずかるシオン。

「うふ。氣を付けて帰りなよ」

体制を立て直し、手を振りながら去る兄弟を見送り、その姿が見えなくなるまで見送つてから、今度は一人での特訓に切り替える。

『沁』を呼び出し、辺りに人がいないか気配探知を行う。

今ではだいぶ慣れ始めた『沁』との同調。

契約こそまだしていながら、一月くらい前に、やつと『沁』を見る事が出来たのだ。

今だに触らせては貰えないが、それでも此処まで口説くのには時間が掛かった。

何故触させてくれないのか聞けば、まだ危険だから。とのこと。

しかしそんな『沁』の許可を得てだが、力の一端を使わせて貰つてる。

『沁』の能力を使えば精神力を消費し、その力が大き過ぎると精神崩壊を起こす危険性も有ること。

なんだかんだ言って俺の心配をしてくれている。

それから一時間。

一人での特訓を終え、仰向けになりながら再び平和な時間を満喫する。

この様にして時は続いていた。

田は沈み、町に明かりがぽつぽつと燈される。

酒場の方は得に盛り上がり、海賊達の姿がちらほらうかが伺える。

流石に白ひげのマークなだけあって他の海賊は暴れ出さない。

やがて民家の光が消え始め、皆が就寝し始めた事を告げる。

町の明かりは酒場と見張り番を残し他は眠りはじめた。

じつして今日も平和な時間は過ぎていく

\* \* \*

シオンが夜の稽古を終えてから家に着き、眠ろうかとした時に、唐突に爆音が響き飛び起きた。

何事かと外に出てみれば、田の前では惨劇と言える様な光景が広がっていた。

暗闇の中、燃え上がる町を見て何が起きてるのか理解出来なかつた。

火事！？

そう思つたが違つよつだ。

町から悲鳴と逃げ惑つ住民達の姿が見えた。

そして、それを襲つ海賊達の姿が…

全てを悟つた時、すぐさま母を起こして寝室へと向かう。

「母さん起きてー。一大事ー。」

さつきの爆音でも起きず、「ん」と開いた母を揺すり起し。

「ふえー？ なになー？ じつしたのシオンつかん？」

普段落ち着いてるシオンの態度が一辺じてる事に驚き飛び起きた。  
母。

「町が燃えてるー。早く逃げてー。」

「え？ え？ なんで？ ジリして町が燃えてるの？。」

「そんなのわかんないよー。良いから早くー。」

シオンは母の手を取り、木刀を左手に家を飛び出していた

\* \* \*

元々一隻の海賊船が湾内に入った時だつた。

グランドラインでログを取る海賊。  
全然警戒などしていない見張り番の人達。

それが普通の出来事で日々行われる出来事だつたからだ。  
彼等の住む島にとつては当たり前の様な光景だつた。

しかし

その海賊船は、あらうこととかいきなり砲撃してきたのだ。

見張り台と白ひげのマークが吹き飛び、悲鳴が飛びかこう。

何が起きたのか状況を理解出来ない街人達は混乱する。

その海賊船は港に橋を掛け、いっきに街になだれ込んで來た。

情況を察してから町人達も迎え撃とつと行動するが、気付いた時にはもう遅い。

海賊は辺りの民家に火を撒き散らし、その火は徐々に街を侵食する炎となつた。

避難を始める住人達。

なりふり構わず暴れる海賊や、その混乱に便乗して他の海賊まで金品を持っていき始めた。

逃げずに戦う人達もいた。

しかし流石にこのグランドラインまで来る海賊達なだけあって実力者揃いの様だ。

今まで平和に暮らしてきたこの島の住人達とは、その力の差は歴然だつた。

\* \* \*

「あやははははー、こまは思つてたより金品が多いなあ

「ああ、流石は白ひげ海賊団の所有地なだけはある」

海賊達の手には金銀財宝。

元々白ひげから貰つた町の資金にまで手を着けはじめた海賊は我が物の様に運び出した。

「まさかあの砲撃で此処まで騒ぎになるなんて……」

「当たり前だ。船長の入念な計画をしての事だ。誤算ではあつたが、混乱に上じて他の奴らまで暴れだした。早めに財宝を積んで俺達も……殺るぞ」

ぱつりと冷酷に放たれた発言に、部下の男は冷汗をかいだ。

副船長。

キヤプテンの右腕にして常に冷静な判断を下す。船員達からは常に逆らえない相手として恐れられていた。

しかしそんな人物らでも部下がここまで着いてきたのは確実な収入が得られるからだ。

「お前らやめるーーー！」

唐突に響く声に海賊達は一瞬驚き振り返る。コウだ。

なんだ子供か。とコウの姿を確認して海賊達は嘲笑っている。

コウは恐怖からか体は震える。

しかしそんな自分に喝を入れ、両手で握る木刀に力を入れ海賊達に撲り掛かる。

「うおおおおおおーー！」

その所突猛進の攻撃を嘲笑うかの様にひらりと避け、ヨウに蹴りをくらわす海賊の一人。

倒れたヨウは、顔をぐりぐりと地面に踏み付けられる。

「うーー！　うーー！」

歯を食いしばり痛みに耐えよつとするが容赦なく踏みつける副船長。

「はははーー！　命を請えば助けてやらん事もなーぞーー！」

その姿を見て青ざめる船員達

「ふ、副船長…

船長からば鄙殺しの命令を受けたんだ。せめて楽にしてやれば…」

「まあそつ堅<sup>タケル</sup>事<sup>トコロ</sup>いつなよ」

尚も足に力を加える。

「 まえ んかに 」

「ん？ なんだこのガキ、なんか言いたげだな」

足を退かし句を言つてゐるのか耳を近付ける剣船長。

「あ、おまえらなんかに…ぜつたい、負けるもんか…」

掠れた声で、怨嗟を弦へ弾む。

虚ひな瞳になりながらも続けるその子供を見て、すりつと腰こしきれる剣を抜く剣船長。

「はははっ！ 何を言つてゐるかと思えば負け惜しみかよ！」

「あ、おまえら…なんか…」

「口の減らねえガキだ！」

高々と振り上げられる剣。

「あばー… ガキ！」

その剣が振り落とされる。

やられる

恐怖からか、諦めから、目を開じじる口。

途端、メシャツ！－と音が耳に届く。  
まるで果物が砕けた様な音。

体を襲う斬撃は来ない。

疑問に思い、閉じていた瞳をゆっくりと開けば、目の前には見慣  
れた白い髪が風に靡いていた。

「し、シオン…？」

確認する様に言われたその名の人物は「チラを振り向かずに口を開いた。

「何してんの？ 海賊達に勝てる訳無いでしょ？ 早く逃げなよ」

「で、でも。おまえ…」

そこにいた海賊達は？

そう聞こうとしたら、先程まで口の顔を踏み付けていた海賊達

が20m程先に土煙を上げて倒れていた。

\* \* \*

船員は少し戸惑っていた。

襲い掛かつてきた子供を翻り倒す副船長。そしてそれを見て笑っている仲間達。

「…え？」

しかしいきなりあらん方向へと飛んでいった副船長と仲間の船員達に驚き声が漏れる。

「な、なんだ… いつたい何が…」

元いた場所を確認してみれば年端もいかない白髪の子供が立っていた。

「やつすぞ…」

その子供からは異様な雰囲気が感じられる。

今までの人生で培ってきた男の第六感が最大限の警報を鳴らしていた。

「コイツはヤバい…

そんな存在に脅え、腹に抱えてた銃で迎え撃とう構える。

しかし目前の子供はいつの間に近付いたのか、目の前にいた。

子供が持っていた木刀で銃を弾かれ無抵抗の状態になる。

「ちつ！　ちくしょつ！－！」

自身の攻撃が通用しないと判断し身を引いた船員。

そのまま地面に何かを投げたと思つたら、ぼふんっ！　と煙が巻き起こつた。

「…煙幕」

視界に頼つても何も見えないので辺りの気配を探れば先程の男の気配が遠退いてる事に気付き一息つく。

そして自分の背後にいるヨウを見れば口をあんぐりと開け、放心していた。

「…何してんの？」

当然のように何故一人で海賊に立ち向かったのか、むしろ何故逃げなかつたのか聞くシオンに対してもうは意志を取り戻したのかやつと口を開いた。

「な、なんだよ。おまえその強さー!？」

質問に質問で反され小さな溜息をつくが気が動転してるのでヨウの質問は止まらない。

「そもそもー。俺よりも弱いおまえが、なんでもー。」

「そんなことは、まあ後で説明するからー。早く逃げなよ。」

出来るだけ優しく叫げるシオン。

そしてシオンは再び駆け出し、ヨウの目前から消えていた。

\*\*\*

シオンは母を避難させてから駆け出した。

町に着けば燃える民家。

いつもの見慣れた場所は変わり果て、燃える町並みは肌をヒリヒリと刺激する。

移動する最中、戦う大人達が目に入る。

遠目ではあるが、海賊が町人を襲っているのが見て取れた。

その海賊の攻撃に対し防戦一方の町人達。

シオンは勢いを乗せた木刀に力を込め、海賊に向かつてその手を振るう。

有りつたけの体重を乗せた一撃は見事に海賊の胴回りに当たり、その体ごと吹き飛ばし、近くにいた海賊達ごと一掃出来た。

「うわあ！？」

「な、なんだ！？」

突然の事で町人達は一瞬固まり、何が起きたのか確認するが分からず仕舞い。

モクモクと土煙が舞つて、煙が晴れたらそこには気絶している海賊達が纏まつて倒れていた。

シオンはその様な事を擦れ違い様に数回行い、徐々に町を沈静化していった。

だいぶ海賊達をのしてから田にはいったのは自分の良く知る少年、ヨウだ。

剣が振り下ろされる瞬間。

間髪入れずに海賊の男に木刀を奮った。

\* \* \*

「はあっ！　はあっ！」

シオンから逃げてきた船員は自身の船に向かい走っていた。

息が切れる中、その船室に飛び込む様に入る。

「ヤバいのが出ましたっ！　想定外です！」

「…何がヤバいって？　監視は定期的に行つてきた筈だろ。いつた  
いどんなトラブルが起きた？」

田の前の男に圧倒されながら、何が起きたのか説明する船員。

「餓鬼です！　とんでもなくヤバい餓鬼がこの島には居ます！」

「餓鬼だあ？　まさかおめえ…その餓鬼に負けて、おめおめと帰つ  
てきたんじやねえだろうな？」

「それは…」

船長の言い分に言い返す事が出来ない船員。

「仲間を見捨てて逃げてくる様な奴は、俺の船にはいりねえ

ひゅんっ！と音がしたと思つたら船員の胸に穴が空いた。

そして息を絶つ船員。

口角を上げて笑う船長。

「さて……やんそろ俺も出ぬか。コイツが言つてた餓鬼つてのも気になるしな」

倒れる船員を足蹴り船を出る船長だった。

## 第十四話 敗北（前書き）

仕事も今は落ち着きまして更新出来ました。  
このペースで更新し続けたらいいのに……これかも頑張ります！  
(切実)

## 第十四話 敗北

町の人達は全員が避難した様で、もう町には居ない。

炎に呑まれる前に、シオン自身も避難を始めようかといつ時、やけに纏まつてゐる海賊の一団を見付けた。

遠目からその海賊の一団の様子を見て、いれば屈強な男が一人前に出て声を上げた。

「俺の名はジョンー、この町を襲つた海賊の船長だ！…」

高々と宣言するキャプテン・ジョン

「俺の仲間を随分と可愛がつてくれてるみてえじゃねえか！　出でこい！　今度は俺様が直々に相手をしてや　！…？」

言い切る前に相手の胴体に渾身の一撃をお見舞いする。町を襲つた一味の頭だ。容赦なんて必要ない。

その船長と名乗つた男が後ろに吹つ飛び仲間事倒れ伏せる。慣れはじめた攻撃を繰り出し海賊達を一掃出来たかと思った。

しかし、ただ一人だけがその場に留まつていた。

今まで一人の標的に渾身の剣撃を当て、その勢いで近くにいた奴らも纏めて倒せていた。

しかしその時は違つた。

飛んできた海賊達をサッと避けた男。

その人物が今まで倒してきた奴らよりも格上であることが明らかだつた。

隙のない立ち方。

口チラを見据える視線。

纏つてる空氣。

全ての気配が今までの相手より格上だと知らしめた。

「…その攻撃は、予測していた。此処に来るまでに総倒れで氣絶してるバカ共をいくつか見てきたが、まさか本当にこんなガキがやつていたとは思わなかつたぜ」

口を開いたソイツは淡々と告げる。

「…初めまして、俺がこの町を襲つた本物の一昧の頭。カプリコだ」

丁寧にも手配書を見せびらかす男。

懸賞金4300万ベリー

暴風雨のカプリコ

「せつかく招待不明の海賊が町を襲撃したって事実を作ったのに、わざわざ大声で自分がやつたと叫ぶバカを演じさせれば、ノコノコ

と釣られて来るバカがいると思つたぜ」

「…………」

警戒を怠りずに相手を見据えるシオン。

「……無視、か。

でもまあ、この後俺達は氣絶してゐる仲間も回収して、お宝」とこの島からとんすらする計画だ。うかつて白ひげの一昧がいつ来るとも知れん」

「…………やけに饒舌じょうぜつですね」

警戒心を解かず」カプリの言葉に耳を貸せば、

「なに。……これから死ぬ奴に何を喋つても、何の支障もない」

まさかの死刑宣告を受けてしまつたシオン。

「…………」

「生かしてやるとでも思つたか？　いや。証拠は何一つ残さん。この島にいる奴らは皆殺しだ」

構えるシオン。

「さつきのお前の攻撃はだいたい予想出来た。もつ諦めろ。今だつたら楽に一撃で殺してやる」

流石に熟練の海賊だ。

同じ攻撃はもう通用しないか。

しかし、分かつていたとしても避けれない攻撃を仕掛けねば！

途端、相手の視界から消える様に横に外れ、カプリコの胴回りに向かつて木刀を振り回す。

ボギン！ と音を発して折れた 木刀。

「つー？」

「つ！ 痛てえな。鋼鉄製の防具越しでもこの威力か。たいしたもんだ」

ドスン！ とシオンの胸に何かが当たる。

ミシッ！ と当たった所から嫌な音が聞こえると同時に後ろに吹き飛ぶシオン。

シオンのこれまでの攻撃は奇襲。

敵の隙を突き、勢いを乗せた一撃で相手を駆逐する。

つまりはそれだけなのだ。

奇襲が成功しなければ、子供にしてはただの早く重い攻撃にしかならない。

此處に来て実戦不足だと悟るが、明らかに遅すぎた。

不用意にカプリコの一撃をくらってしまったシオンは口の中が切れ鉄の味でいっぱいになり、更には胸に損傷を負ってしまった。

その痛みだけでもまともに動く」とは困難だった。

「「」のガキ、当たる瞬間後ろに跳んで威力を減少させやがった…。本来なら胸に風穴が空く筈だつたんだが…」

残念。と口にして構えるカプリコ。その手には根棒が握られていた。

何処に隠していたのか、直径2メートル程も有るその根棒を持ち直し、シオンにトドメを刺そうと振りかぶる。

しかし、声がその攻撃を制した。

「待つてください！」

唐突に響く高い声。

横たわるシオンの前に、バツ！ と影が出来、姿こそは見えないがその声には聞き覚えがあつた。

母さんだ。

「私はどうなつても構いません！ ですから…ですから私のシオンちゃんに手を出すのはやめてください…」

「ほあ…」

値踏みするかの様に母を見回すカプリコ。

「…良いだらう。お前がうちの船に来るなら、このガキや町人を見逃してやる。どうだ？」

「……分かりました」

「な、なに言つてんのさ。そんな事勝手に決めないで  
「てめえは黙つてろ。俺は今この女と話してんだ」

倒れてるシオンに近付き蹴りを食らわすカプリコ。

「や、やめて下さい！ 大人しく着いて行きますから！ これ以上  
危害を加えないで下さい……」

シオンを護る様に被さつた母のお陰で攻撃は中断されるが、カブ  
リコの蹴りをまともに受けたシオンの腕や足は痺れて動かなくなり、  
意識もハツキリとしない。

「分かった分かった。財宝もあらかた詰んだ様だし、早速行くぞ」

「は、はい…」

「最後に…」と、カプリコに言つてから母はシオンの方に振り返り、  
口を開く。

「シオンちゃん…。

シオンちゃんには内緒にしてたけど、シオンちゃんが今でもたまに  
夜居なくなるの、お母さん知つてたよ。

え？

「ナビ、優しいシオンちゃんはお母さんが安心して寝付いてから、いつも出掛けたよね」

気付いてたんだ。

「でも、シオンちゃんが将来、何をしたくていつも頑張ってるのか……お母さんにはまだ解らない」

そんなの決まってる。

家族を、母さんを護る為に強くなんひとつ頑張ってきたんだ。

「シオンちゃんが成長していく姿を見てけば、こいつかきっと解つてあげれる日が来ると思つてた」

。

「でも、もうお母さんこの先が見る」とは出来やつ無い、かな……でも

おどけながら笑顔を作りつとする母。

「シオンちゃんはお母さんの誇りです……」  
……さよなら。シオンちゃん！

最後に、シオンことじきつの笑顔を向ける母。

「……」

前に自分で、海賊なんて皆ケダモノだ！ なんて言つて、白ひげが来た時だつて町でただ一人びびつてたクセに、こうこう時は動くんだから、たまんないよな…。

シオンに背を向け立ち去る母とカプリコ。その姿を見届ける事しか出来ないシオン。

込み上げて来るモノを抑え切れない。

悔しい。

今ならば悪魔に契約しても助け出したい。

契約

その言葉で思い出した。

(『沁』！ 力を貸して！ 僕と契約してくれ！)

『何を慌てる。その様ではまともな判断力が欠けてると見  
た。出直せ』

『沁』が断りを入れる。しかしシオンは引く訳にはいかない。

(もし、此処で力を貸してくれないと言つなら…俺はこのまま乗り込む!)

『死ぬのか?』

(…無事じや済まないだろうね……けど、俺は死んでも家族は護る!)

何処か諦めた様に『沁』が溜息をこぼす。

『その場に呼び出せ』

『すうっと、左手を前に出す』

『創造しろ』

『思い浮かべるのは最愛の刀にして最高の刀。そこに有るのは極みの一端』

ちりちりと頭の中を震める電流

『主が従え、制御しろ』

その電流が徐々に体中に流れ始め、傷を刺激するも構わず続ける。

「つー？」

全身を廻る電流は、やがて左手に凝縮されていくかの様に集まり、徐々に形を成していった。

カツ！ と一瞬の光を放つたその手には、鞘に収まつた刀が握られていた

『　流石に未完成か。しかし、初めて”創つた”にしては良し。精々呑まれない様に気を付ける　』

刀を抜かせない為か鞘と柄を縛る紐に触れた瞬間

情報の奔流に襲われる。

お世辞にも絶好調とは言えない状態のシオンは簡単に呑み込まれ、その情報量に耐えきれず、抗う事も出来ずに意識を失つ。

\* \* \*

カプリコは普通とは変わつた性癖を持っていた。

それは相手を痛め付け、痛みで歪んだ表情と悲鳴を聞きながら嬲り殺すというものだ。

相手の精神を屈服させた表情。それが格別なのだと本人は語る。

そんなカプリコが約束を守るはずもなく、船に向かつ道中、冷淡に口を開く。

「ああ……そろそろあのガキは死んだかなあ」

その言葉に、せつ一も反応する由。

「あれだけ痛め付けたんだ。まともに動ける様になる前には、炎に呑まれるだろうな」

「あ、あなた… 初めから約束なんか守るつもりじゃなかつたのね！」

僅かに暴れる母を、手下の海賊が取り押さえる。

一証拠は一切残さん。さつきのがや、町の住人。……お前も含めてな」

憂愁の表情が一気に绝望の色に染まる。

「つべくべく。いい表情だ。最高だよ。せめてあのガキの為にも良い声で鳴いてくれよ」

くつくつと笑うカリコ。

その根棒が母に向かって振り落とされる。

ドグシャツ！！！

という音と共に地面にめり込む根棒。

顔面に返り血を浴びたカプリコの表情が嬉々として歪む。

陥没する地面は死体など残らない必殺の一撃だと知らしめる

しかし

「ん？」

ひつ、ひざやああああ！」

予想とは異なり、カプリコの根棒を持っていた腕がへし折れていた

「なつ！？ なんだ！？ いつたいつ！！  
てめえつ！ 何をした！！」

怒鳴り散らすカプリコ。

その先には、母を抱き抱えた”シオン”がいた。

くつくつ笑いながら、ゆらりと鬼幽の様に立つ”シオン”。

なかなかに良いものだ

気絶している母親をソッと地べたに置き、護る様に前に立ち塞がる。

何かを確かめる様に自身の体を調べる”シオン”。  
その光景に疑問を持ちつつも、冷静さよりも怒氣が勝つたカプリ  
「は動き出す。

遊んでいた玩具を取り上げられた子供の様に怒り心頭のカプリ。

「どうやつてあの火の手から脱出した！？　てめえはまともに動ける状態じゃなかつた！！」

『あんな攻撃、なんて事はない』

「…てめえ。やつきと違つて随分余裕じやねえか」

『…な』。これから死ぬ奴に何を喋つても、何の支障もないでのな』

つい先程カプリコ自身が言つた台詞をそのまま口にする”シオン”  
しかし、その台詞を聞き、カプリコは遂にキレた。

「舐めるんじやねえぞ！　餓鬼！－！」

折れた方とは逆の手で根棒を持ち、辺り構わず振り回す。

冷静さなど微塵も無くなり、今はただ感情のままに氣に入らない

餓鬼を消し去りたい。

それは小規模な竜巻の様で、対象を飲み込めば跡形もなく消え去る事を連想させた。

「ははははー、触れば跡形も残らんぞーーー。」

地面を僅かにえぐり小石が弾丸の速さで飛び散り、自身を守りながら突き進む。

暴風雨

奴に相応しいであるが此處から来ているのだと納得してしまつた。

攻めは最大の防御。

誰だったかそんな言葉を残しているが、今のカプリコがピッタリそれに当て嵌まる。

部下の海賊達は知っていたのか船長の攻撃を受けまいと物影に隠れていた。

しかし

『それがどうした?』

”シオン”が納刀された刀を片手で持ち、カプリコに向かつて付き出す。

周りの海賊は鼻で笑つた。

何がしたいんだ。

死んだな。

と、そう思い少年の最後を確信し、グシャツ！… といつ音を耳にして自分達の船長を見据える。

目に映つたのは、ひゅんひゅんと放物線を描きながら空中に飛び回り、地面に突き刺さった根棒。

そして先の腕と同じ様にあらん方向へと折り曲がつたカプリコの腕。

「つがあああああー！」

”シオン”がとつた行動。

それは一瞬の内にカプリコに近付き、擦れ違ひ様に相手の腕に一撃をたたき込んだだけだった。

カウンター気味に入つた攻撃が、カプリコ自身の力と相成つて腕を折つたのだ。

折れた腕を認識し、再び悶絶するカプリコにソッと歩み寄る”シオン”。

「ひつ！？ く、来るな！ 化け物！」

痛みにより冷静さを取り戻したカプリコは明らかに自分が不利と見た。

何とか逃げ出そつとするが、ソレを”シオン”が赦さない。

『……化け物?』

その発言を聞いた”シオン”がカプリコを嘲笑う。

『その言葉も聞き飽きた』

何処か冷たさを含めた言葉は空気に溶け込むかの様に消え、ぱちんっ! と音を鳴らし鞘と柄を縛る紐を解く。

居合抜きの構えをとり、カプリコに向かつて駆け寄り

紫電一閃。

袈裟切りで放たれた剣閃は、自慢の鋼鉄製防具すら切り裂いた。

鮮血が飛び散り、カプリコの開いた瞳孔がぶれ、ドサリと倒れ伏せた。

キンッ! と刀を鞘に戻しカプリコを一斃し、小さく溜息をつく

”シオン”たつだ。

\*\*\*

「せつ、船長が負けた!」

「冗談じゃねえ！ 逃げろ！」

「バツカ！ 船長を助けるんだよ！ おい！ おまえら逃げるな！」

カプリコ海賊団の船員達は、自分達の船長がやられた事に酷く混乱していた。

逃げる者と船長を助けだそうとする者に分かれるカプリコ海賊団。

船長を倒した白髪の少年。

逃げ戸惑つ船員達を田にした少年は、体を前のめりに傾けた。

倒れる！

やつ思つた船員は船長を助け出すべつと動いひつとある。

が…

田前にあつた白髪の少年の体が地面に倒れ込む前に、消えた。

海賊達の横を一陣の風が通り過ぎたと思つたら、後ろの方から悲鳴が聞こえてきた。

「あああああー!?

「ひつー? た、助けつ

船長を見捨て逃げ出していた船員達。

飛び散る鮮血。

その地獄絵図の様な光景に息を飲む海賊達。

「なつ…」

何が起きてるんだ

もう口惜しみとした時には逃げ出していた船員達の悲鳴は止み、地面に倒れ込んでいた。

再び風が通り過ぎた。

異様に寒気がする風。

沈黙が支配する。

しかし次の瞬間には、地面が段々と自分の前に起き上がりてきてた

妖術の類か自分がおかしく成ったのか分からぬ。

地面が顔面にぶつかる。

体からは血がどくどくと溢れ出し、体から熱が引いて行くのと同時に自身が斬られ、地面に倒れ込んでる事に気付いた。

どうなつてんだ…

こつ？ 誰に斬られた？ 思考する前にその海賊の命は幕を閉じる。

\* \* \*

”シオン”がカブリ『海賊団』を一掃してから直ぐに島全体を『探る』。

もう暴れてる海賊がいない事を確認した”シオン”は目を閉じ、刀を消した。

\* \* \*

次にシオンが田を開けた時、まだ燃える町並みを確認した。

自身の手や衣服は紅く染まっている。

しかしその全ての紅は自分のモノではないと悟っていた。

喉元に酸っぱい液体が込み上げて来る。

胃液が逆流する。

「うほつ！ げほつ！！」

むせ返りながらも汚物を吐き出すシオン。

夢なんかじゃない。

始めて人を殺してしまった。

中には家族を養っている人も居たかも知れない。

込み上げて来る罪悪感と吐き気を抑え切れず、今は成すがままに吐き出す。

出す物を出し笏くしてから一息付き、尚燃える町をぼおつと眺めるが、もはやどうしようもない。

火の手は止まらない。

きつとこのまま全てが焼き尽くされてしまうのだろう。

そう思ったが最後の力を振り絞り、なんとか目の前で横たわっている母だけでも助けようと試みる。

「……なんだこれは」

突然背後から現れた男の声に驚き、後ろを振り返れば全身をマントに包んだ男が一人。影で表情は見えづらいが、一人は顔に入れ墨が描かれているのが僅かに見えた。

もう一人は頭に丸い耳が付いた巨漢の男。

何処かで見たアングル。

その何処かで見たこと有るシリエットを思いだそうとするが、それと同時にプツンと糸が切れた人形の様に今度こそ本当に倒れるシオン。

そこでシオンの意識は途絶えた。

## 第十四話 敗北（後書き）

作者は中一病予備軍に成りかかっています。本当にありがとうございます。また。

感想お待ちしております！！

第十五話 命の恩人（前書き）

超不定期更新

—『D』越える者—  
はつじまるよ—

## 第十五話 命の恩人

俺達は世界を見て回っていた。

後を絶ちそうだった食糧を補充しようと島に向かつたが、近付いた島の町は燃え、悲鳴と銃声が木霊した。

遠目でもわかる程の惨劇。

「ヒッハー！ なんだか分かんないけど町が燃えてるじゃなーい！」

黒いロープを羽織った顔面は、その光景を見ると絶叫し状況を述べた。

とりあえず町から少し離れた場所に船を着け、町の方角に向かつた。

しかし島に近付くにつれ銃声と悲鳴が治まつていき、やがて静かになつた。

町を焼き尽くす炎だけが機能していた。

どうしたものかと考え、僅かな気配を見つけそこまで駆ける。しかし思つてはいる以上に火の手が早過ぎる。

「クマー」

部下の名を呼ぶと同時に気配の場所までパッと瞬間移動する。

その場には何が起きたのか理解しがたい光景が広がっていた。

燃え盛る家並み。

血塗られた地面。

綺麗に切られた死体。

そんな中で、立ち渴べす白髪の子供。

「……なんだ……これは」

自身の目を疑つた。

子供の体に付着してゐる鮮血を見て、一瞬瀕死の傷でも負つてゐるのかと思つた。

あまりの出来事に思考が追いつかない。

「まあいわ！ 火の手がそこまで来てるつチャブルー！」

「早く逃げないと巻き添えをくらひますよー。」

現状が理解できないまま情況を整理していると後から来た部下達も追いかけて息を荒げていた。

次に子供を見た時には倒れ伏せており、その横には女性も横たわっていた。

そこでポツリ、ポツリと零が落ちてきた。

男が零を確認すると、手を翳す。かざす

瞬間、ドウツ！ と突風が吹き荒れ、辺りを震撼させる。

「ちよっとヴァナタ！ そんな事したら余計に町が燃えるつティブル！」

「ああ……ただの風ならな」

「何を言つて……！」

そして入れ墨の男が何をするのか悟った黒いロープの集団は沈黙した。

雨だ。

降つてくる雨は僅かなものだが、男が起こした突風に上じて小規模な嵐を起こす。

それにより広がる火の手を確實に消し去つていく。

やがて炎は完全に消え、再び町に静けさが戻つた。

「ふう…一時はどうなるかと冷汗ものもだつたけど、流石にやるじゃない…」

「俺の能力を見誤つてる訳じゃないだろイワン」「」

「こんな辺境の地であまり名を出すもんじゃないわよ…」「」

モンキー・D・ダラゴン

革命軍の総司令官にして世界最悪の犯罪者。

そして、モンキー・D・ルフィの父親。

エンポリオ・イワンコフ

カマバツカ王国。

第一の女ヶ島と呼ばれる場所の女王にして革命軍の幹部。ホルホル

の実を食べたホルモン人間。

倒れていた白髪の子供を抱えるドリゴン。

生きてることを確認し、ホッと胸を撫で下す。

「クマ……」

「……」

そのまま立つと、白髪の少年から飛び出たのは所詮ダメージという“モノ”。

手袋を外し少年の体に触れ、“あるモノ”を弾き出す。

そんな芸当が出来るのはまだ一人しかいない。

バーソロミュー・クマ

王下七武海の一人にして革命軍の幹部。

かつては海賊として暴虐の限りをつくした男と言われており、その元懸賞金は2億9800万ベリー。

一キュー一キューの実を食べた肉球人間である。

「いりの女性はどうだ?」

「…気絶してるだけだ。特にダメージは受けていない。いずれ目を覚ますだろう

「さうか…」

ホツと一息付いたドライゴン。

「他に生存者はいないか……。」

ドライゴンの声が静かに木霊する。

しばらべ反応が無かつたが、ひょつゝりと一人姿を現す子供。  
その子供はドライゴンが抱えてくる少年を確認すると、わなわなと震え始め声を上げた。

「おまえ！ シオンに向をした！…」

ドライゴンが抱える少年をシオンと確認したコウは襲い掛かってきた。

暴れるコウを取り押さえのクマ。

「はなせ！ おい、おまえら！

シオンに向かしたらただじゃおかないとからなー。」

「そつか…この子はシオンと言つのか。  
すぐこ手当てをしてやる。君も含めてな

「え…？」

田の前にいる人物が何を言つてゐるのか理解できず、僅かに思考す

るコウだった。

\* \* \*

シオンは夢を見ていた。

目の前に広がる光景には知つてゐる人物が映つていた。  
先程まで自身をボコボコにしていた海賊。

その腕が碎かれ悶絶し、自慢していた鎧（）と斬られた。

繰り出されるその剣閃の美しさに一瞬見惚れてしまい我を忘れる。

その場で広がる血の噴水。

それすらも美しいと感じる。

そして周りに居た海賊までもが斬られ、鮮血を撒き散らしながら  
命を絶つていく光景を目にすると抱く感想は

人が死んでる。

と、かなり他人事の様に感じた。

それは人を殺した実感が全くなく、映画を見てる様な感覚。

夢から覚めれば自身の腕に付着した血を確認し、今まで見ていたモノが夢などではなかつた事を認識させられる。

命を絶つとこゝにとせ、その命を背負つとこゝにと。

その重みが一気にシオンにのし掛かる。

朦朧もうろうとする意識の中、声が聴こえた気がした。

『 悪いな主。少しだけ体を借りた 』

謝罪の声が頭の中に響くと同時に意識を手放した。

\* \* \*

シオンが倒れ伏せてから数刻、意識が覚醒する。

体がダルい。

目をつぶすと開ければ木造の天井が目に入る。

体に違和感を覚え全身が包帯で巻かれている事に気付いた。

そして横には誰かがいる。

ソックと視線を向ければ少年ヨウがあり、椅子に座りながらうつづつと眠っていた。

「…兀…」

声に気付いたのか、バツと田を覚ます兀。

「シオン！ よかつた、気が付いたのか！」

体を起き上げようとするシオン

「咄は、町はどうなつた？」

「つー…町の人達は、たくさん的人が、死んじやつたつて…」

「…そり」

「ひのね母をヒヤリコアは無事だつたけど、お父さんは海賊に立ち向かつて…」

そのまま泣き崩れる兀。

よつほど恐かったのだろう。今も体を震わせながら泣いている。

後で聞いた話しだが、町の被害は甚大で、怪我人の治療や建物の修復、更には物資の不足で資金が飛んでいった。

しかし、元々島での資金も返つて来たのとカプリコ海賊団の所有していた財宝、更にはカプリコ自身に賭けられていた懸賞金がある。他の海賊団に持つて行かれた金銭も有るがソレよりもカプリコ自身の懸賞金だけでも事足りる。

「つ…く…」

「シオン……」

途端に体を襲う激痛。

しかしそんなヨウの声を聞いて顔に入れ墨を入れた人物が部屋に入ってきた。

その後を追つように部下へひしき人達もそろそろと入室していく。

その面々を見て思考が停止するシオン

…………ちょっと待て。

「君がシオン君か。始めてまして、俺達は旅の者だ  
自称旅の者を語るドリフ<sup>1</sup>」

「ヴァターシは通りすがりの顔面よ」

自称通りすがりの顔面を名乗るイワン<sup>2</sup>。 つか通りすがりの  
顔面ってなんだ。

「…………」

無言でコチラを伺うクマ。

「たまたま通り掛かった時、その子から話を聞いた。正直信じられないが、ね

値踏みする様にこちらを見る自称旅の者。

「…ヨウ。いつたいこの人に何を話したの？」

「なにして、シオンが海賊達をいっぱい倒したって」

「……」

見ず知らずの人に全て話してしまったのであらうヨウは眞にした様子もなく答えた。

まだ子供のヨウは、あまりにも純粹過ぎたのだ。

（でも今回の事が町の人達に広まつたら、避けられる、よ、な？  
こんな子供が大人の海賊を大量殺人したなんて知つたら、少なくとも化け物なんて呼ばれるんだろうなあ）

「お願いします！ シオンを助けてください！」

「大丈夫だ。この子は助かる」

今後の事を考えるシオンを置き去り会話を進め、自称旅の者が医師を呼び付けシオンの今の状態を見させる。

「こまま安静にしていればすぐに動ける様になるでしょう。  
しかしこの子には驚かされます。ついさっきまで瀕死の怪我を負つていたというのに、もう傷が治りかかっている。

クマ氏の能力による影響も有りますが、それだけではありません  
普通じゃない…」

田の前の子供を信じられないと見る医師。

（それはそうだ。なんせ女神様の保証付きなんだ）

「そつか！ ありがと、医者のじじちゃんに入れ墨のおつかちゃん！」

自称旅の者にかなりフランクな御礼を言ひ口づ。

そんな口づに肝を冷やすシオン。

「…口づ。その人達がどんな人か知つてゐるの？」

「ん？ どんなって、命の恩人だろ？」

「いや、それはそうだけども。

この人達は世界に喧嘩売る様な人達だぞ。あんまり失礼な態度をと  
ると あ…。」

「 「 「 …… 「 「

言つてからシオンは、しまつたと思つ。

彼等はこの島に来てから誰にもそんな事は話していなかつたのだ  
らう。各々が

「何処からその情報を…」

とか

「正体がバレてる…」

とか

「いつその事、今ここで…」

などと割と冗談では済まない言葉を口にし始め、代表してドラン  
ンが口を開いた。

「少年、君はいったい

「

「シオンちゃん……」

「バン……と勢い良く開いた扉に田をやると母が部屋に駆け込みシオンに抱き着いてきた。

殺伐とした雰囲気が闖入者により一変する。

「よかつた。生きて……シオンちゃんの意識が戻らないって聞いて、お母さん本当に心配したんだから……」

「母さん……」

真剣な表情で見つめ合つ二人。

「……痛いんだけど」

「つー、『めんなさいね！ 私つたらつい嬉しくて…』」

開口一番辛辣な言葉を浴びせ距離をとらせる。

そんな母は特に気にした素振りも無くシオンから離れドーラゴン達の方に向き直る。

「貴方達が家の子を助けてくださったんですね。改めて御礼を言わせていただきます」

深々と頭を下げる母。その母を見て数人の男が頬を染める。

「いえ！ 怪我をしてる子供を助けるのは当然ですか？…」

「そうですよ！ 見捨てる事なんて出来ません！」

「こんな世の中間違つてゐる！ 理不尽な世を変える為に、私は日々行動してゐるのです！」

我先にと鼻の下を伸ばしながら母に話しかけてくる革命軍一同。そんな光景を見てドラゴンは溜息をつく。

「ヴァナーダーといチチしてんじやなーい。ヴァターシのコックドヒーヒー言わせてや（「ソ」）

一部をボボコにした革命軍一同。

「失礼、御婦人。見苦しいものをお見せしてしまいました」代表してドラゴンが謝罪。

部下の失態をカバーするあたり彼も色々と苦労している様だ。

ふと、マチラを見据えるドラゴン。

「改めて聞かせてもらひ。少年、君は一体何物だ？」

「……」

「……で変に答へても疑われるだけだ。ならば…

「予知能力者… つてどこのですかね？」

「…予知能力者」

その発言に周りはざわつく。

シオンの言葉に興味が沸いたドラゴンは鼻で笑う。

「面白い事を言つ少年だ。

ならば、何故今回起きた事を未然に防げなかつた?」

「……予知にも限界もありまして……僅かに情報も必要です」

「……ほう。ならば我々がこれから進もうとする未来には何がある?」

「チラを試しているのか、なかなかしつこいドラゴン。

「……なら正直に答えて下下さい。貴方達は、これから何処へ?」

「俺達はこれから、東の海に行く予定だ」

東の海

つまりは故郷にでも向かうのだろうか?

仲間達もドラゴンの出身地はまだを知らないはず…  
しかしこの話しがすれば最悪ドラゴンに命を狙われかねない。

賭けをするにはリスクが大きすぎる。  
なら。

「フーシャ村、ガープ…」

ぱつりと口にした。

周りの人達は何の事だと口にする。

…一部を除いて。

一瞬だが田を見開くドラン。

「 IJの言葉の意味。貴方なら分かりますね？」

「…何処で知った？」

口チラを思い切り警戒して聞いてくるドラン。

「ですから、これは予知つてことにしてくれませんか？ お互いの為に…」

「……」

「貴方が信じてくれれば、自分はこれ以上の事は誰にも言ひ気はありません」

僅かな沈黙の後、ドランが口を開く。

「…こいだらう。その話、信じてやる」

警戒を解き、微笑むドラン。どうやら儲けには勝った様だ。

「さて、我々も準備がある。出航するまでは、 IJのベットを貸してやる。もつ少し安静にしていろ」

ナウサゲ部屋を後にするドラン率いる革命軍。

「シオンちゃん…」

革命軍が居なくなつた事で気が楽になつたのか口を開く母。

「シオンちゃんって予知能力者だつたの？」

「おばさん…ヨチノウリョクシャつてなに?」

「えつとね。予知能力者っていうのは未来が分かる人の事。わかるかな?」

「すっげー! シオンって強いだけじゃなくつてヨチノウリョクシヤだつたんだな!!」

たぶん分かつていないのであるひ山やは無駄に驚く。

「まあいいけど…」

小さな溜息をつき、何とかやり過げしたと『』が抜けた。しかし安堵するもつかの間。

「それじゃシオンちゃん。その包帯を取り替えよっか」(じゅるり)

母に揉みくちゃにされたながら包帯の交換をされるシオンだった。

\* \* \*

手慣れた手つきで包帯を交換する母。

最後の一閉めを終え立ち上がる。

なんだかんだでやる仕事は完璧である。

「それじゃ私も行くわね。町の方が大変だから畠で何とかしないと」

「ならオレもいくーー！」

「だつたら俺も…」

「シオンちゃんは」」「でもうくつしてなさい。その体じゃ無理でし  
よ」

わざわざ戻をつかつてくれる母にこんな時でも頭が上がらない。

「…なら今は出来ることあるよ」

「宜しい」

「ゆつくり休めよシオンー！」

微笑みながら部屋を出る母と四つ。

さて人も居なくなり部屋には沈黙が広がる。特にやることも無いので…

「…寝るか」

少しでも傷が治る様に今は休息する。

\*\*\*

誰も居なくなつた部屋で寝息を起てるシオン。  
その部屋にスッとした音もなく侵入する固体の持ち主、バーソロミュー  
ー・クマ。

今は熟睡中のシオンの元にソックリ手を伸ばす。

その手がシオンに触れようとした瞬間  
にきゅ…

静寂の部屋に静かに溶け込む音

「…………」

「きゅ きゅ…

シオンがクマの肉球を掴んでいた。

「…田を覚ましたのなら手を離せ」

「…えー、といつか、どうしたんですか？」

眠たそつて田を擦りながら体を起こすシオン。その手には今だこ  
クマの肉球が握られている。

「やるやう出る。お前を起きて行けと言われたのでな

「うひですか。わざわざいた苦勞様です」

堪能している至高の時を少しでもぬめよつと会話を伸ばす。

「…いい加減離してくれないか?」

「…えー」

「旅行するなら何処へ行き（）？」

「すいませんでした！」

「（）で飛ばされたら笑い話にもならない。

「この世界に来たらやつてみたかった事の一つをやつ遂げ、満足になつたシオンは名残惜しいがクマの手を離した。

\* \* \*

「では、俺達はもう行くとする。町の被害を聞いて海軍か白ひげが駆け付けて来るだろ？」「しな

僅かだが物資を積み出発準備が整つた革命軍一同。

「しかし、この町では随分な名で呼ばれているらしいじゃないか

「……」

町での噂を聞いたのであるアーティア・ゴンはシオノに向かって、すう、と手を差し出す。

「どうだ少年？ ょつたら俺達と一緒に世界をひっくり返さないか？」

その発言が聞こえたのか周囲はざわつく。

「……」

たかが子供に何を言つてゐるのか。  
この手を取れば少なくとも原作に干渉する可能性を生み出すだろう、なあ…

「……悪いですけど、自分は貴方達に着いていく程、覚悟も勇氣も無いので…今回の事で、世界が怖くなってしまったし」

正直な話して、いくつ命があつても足りなさそうな話してある。  
世界中に嘘偽を売るなんて最悪原作以上に死ぬ可能性が高いじゃ  
ないか。

「…そつか。それは残念だ」

断る事が分かりきっていたのか、ちつとも残念そつな顔をしない  
アーティア・ゴン。

「少年、機会が有つたらまた会おう。出航…」

そして船は旅立つた。

町人達は御礼を告げながら見送る。

ある程度見送り、港の人達も散り始め、シオンもその場を去りつとした時、横にいた町の住人が口を開いた。

「でもさ、いくらなんでもあそこまでやるかね？」

「ああ。あの死体だろ？ 人ってあんな斬れ方するんだな。血の湖まで出来てたぞ」

(……)

シオンが切り捨てた海賊達の事を言つているのであらう町人は尚も会話を続ける。

「よっぽどの武芸者がいるんだろうな。あの船には……」

「助けてもらつてなんだが、末恐ろしいな。正直もう関わりたくない気分だよ」

「でも彼等は命の恩人なんだ。あの入達のおかげで俺達は生きてんだ。そう言ってやるな」

(ーーー?)

バッ！ と旅立つた船の方角見据える。

どうやら大きな借りを作つてしまつた様だ。

今はもう見えなくなつた船。その方角に向かつて頭を下げる。精一杯の感謝を込めて。

強くなりつ。いつか、この借りを返せる様に。

\*\*\*

「ダラゴン…ヴァナタあれで良かつたの？」

「…ああ、あの少年はまだ、世間の批判に当たられるには早過ぎるだろつ」

「まつ、ヴァナタが言つなら良いんだけど。でも、あのボーイが言つ」とまで信じるつもり?」

「さあな…だが興味が湧いた。これから俺達が歩む道。本当にあの少年が言つ通りになるのか、な

「…嘘かも知れないわよ?」

「嘘だつたら嘘だつたでそれ相応の報いを受けて貰うぞ。それに、噂に聞く魚人島の予知能力者の前例もある。本物だったら本物で取り込めばいい…」

へつへつと笑うダラゴン。

「もし…」

ポツリと話しきり出すアリナ。

「もし仮に、あの子供の言つ事が本当だつたとしたら、この島はこれから世界に名を伝めるだらう」

「どういふ意味かしら？」

「なによ、ちょっとした俺の、予言や……」

その微笑んだ姿を見た仲間達はドラゴンが悪魔の様に見えたとか。

\* \* \*

革命軍一同を見送り今後どうしたものかとシオンが考え事に耽つているところが横切る。

咄嗟にその手をつかみ引き止める。

「ヨウ、あの人達になんて説明したの？」

「ま、またそれかよ。さつきも叫つたじやん。海賊をたくさん倒してたつて」

「それじゃ俺が海賊を倒したって、何処まで？」

「んー……シオンが木刀で海賊をぶつ飛ばしたところまで……」

「……」

つまりは俺が海賊を斬る所までは見ていなかつたと……

「」の田何度めかの安堵の息をつく。

「な、なんだよ。なんかあつたのか？」

「いや、なんでもない」

「ふーん。おかしなシオン。……ヒーリングも、シオン……」

口を開く。「

「お前がどうしてそんなに強いのか教えてくれるついで、書いたよな」

「……」

先程の会話で思い出したのか、かなり今更な事を聞いて来る。「」。  
しかし「」まかしたものか。と更に思考するシオン。

「…その、ほら、あれだよ、あれ。好き嫌いしないで、飯を食べた  
て、適度に動いて、よく寝る」

「……」

「……」

苦し紛れの説明に内心冷や汗なのだ。こんな嘘を信じる輩などい  
るのだろうか？

「…うちのお母さんも同じ」と囁いてたけど、あれって本当だった  
んだ……

「ここにいた。

「なら今度からまたやうやくね。 七面鳥の呪つ本当に信じた様だ。 まつた  
く以つて純粹なことだ。」

今ばかりはこの純粹さに救われる。

「あと、その、さ。まだ言つてなかつたけど……助けてくれて、  
ありがとな」

はにかみながら言葉にして、僅かに頬を染める口づけ。

子供ながらか、とても可愛く見えてしまひ。

「シオン……実はオレわ  
「シオン兄ちやーん！」

「お前の事が……」と続け様とした言葉を町から走つて来る//コア  
が遮る。

そして//コアはそのままシオンの胸に勢いよく飛び込んで来る。

「よかつたー、本当に無事だった。僕、いつも心配したんだ…」

「//コア…」

その純情さが愛りしへ思つ//コアの頭を撫でてやると気持ち良さ  
そうに瞳を細める。

しかし前みたくコウガ//コアとシオンを引きはがす。

そんなに自分の弟と友人が仲良くするのが嫌か。嫌われたものだな。

はあ、と小さな溜息が自然とこぼれる。

「シ、シオンは…」

僅かにフルフル震えながら口を開くコウ。

「シオンはオレんだ………」

途端抱き着いて来るコウ。

ふよん。と、僅かに腕に当たるコウの胸。気のせいか男子にしては違和感が…

「…ちよっと失礼」

確認のつもりでその胸に手を沿え感触を確かめる。

まだ育ち盛りなのだろう成長途中のその胸は何とも言えぬ柔らかさに加え男を魅了して止まない弾力。それは正に

「…女?…だと…?」

途端わなわな震え始めるコウ。

「ば……」

「ば?」

「ばか――――――――――――――――――――――――

ぱちーんっ！ と、シオンの頬に衝撃が走る。その衝撃に耐え切れず体が浮く。

三回転程宙を舞いそのまま地面に衝突する。

「がふつ！」

口から吐血。

更なる致命傷。

もはや死の域まで達してしまったのか、ぴくりとも動かないシオン。

否、動けない。

うわああああああああ―― と少女ヨウは叫びながらその場を離れた。

その日、泣き声が町中に響き渡った。

一難去つてまた一難。

これからも受難がシオンに降り懸かるのだろうか。

「シオン兄ちゃんひどい。ヨウはシオン兄ちゃんの事好きだったのに泣かせたー。でも僕達姉妹はいつも同じものを取り合ひするから良いと言えば良いけど」

早速一難。

今更ながらヨウ達兄弟を姉妹だと認識したシオンだった。

それから数刻。

白ひげの旗を掲げて向かつて来る船。

白ひげはこの時は乗つていなかつたが、隊長一名が同席してきた。

流石にグランドラインの海賊だ。

そんじょそこらの海賊なんかに負けるような人員は皆無と言つて

いい。

ちなみに隊長二名とはマルコとビスターであり島に着くなりシオンの元に駆け付け、ベットで寝込むシオンの姿を見てかなり心配したとか。

特に頬の傷が酷い事からかなりの死闘を遂げたのだろうと予想し涙したのは余談だ。

そんなこんなで彼等が到着してから町の被害の大きさを認識し、怪我人の治療、建物の修復、物資の復旧に取り組み何とか町としての機能を回復した。

それから三年の月日が過ぎ、この島ではある噂が世界中に広まつた。

あの島には行つてはいけない

暴れる海賊を容赦なく滅ぼすぞ

あの島には

鬼が住む。

『鬼ヶ島』

その名が付けられた島は、僅か数年でグランドラインでも有数の危険地帯に登録されてしまったのであった。

## 第十五話 命の恩人（後書き）

はい、と言つことで影の正体はドラゴンさんとクマ吉さんでした。ワンピースを嗜む者として、あの肉球は魅力的だと思います。

あとは幼なじみのヨウ兄弟が実は姉妹という事でしたが、ヒントとしてミリアという名前や、シオンを兄と呼ぶのに対してもヨウを兄と呼ばなかつたりとそんな感じ。

島の名前。適当に鬼ヶ島なんてつけてしまいましたが、原作で出ないか心配です。

犬、雉、猿といるのでいつか登場しないか内心ヒエヒエですが、出てきたら出てきたで島名変えるんで（・・・・）

ではでは次回も頑張つて更新して行きますんで、今後ともよろしくお願いいたします！ m ( . ) m

気が向いた人は感想くれたら嬉しいです。

第十六話　鬼ヶ島（前書き）

遅くなりました～！  
大変申し訳ありません！

## 第十六話　鬼ヶ島

「はあつ　はあつ　はあつ」

ヤバいヤバいヤバいヤバいヤバいヤバいヤバいヤバい  
いヤバいヤバいヤバいヤバいヤバい

何なんだこの島は！？

噂では聞いていた。

しかし、まさか『鬼』がこんなにも手強い存在だったなんて！

逸れた手下達はもう追跡者達にやられちまたか、上手く逃げた  
か…

畜生！　なんで俺がこんな田に会わなけりやなんねえんだ…！  
こんな、こんな島に寄つてしまつたばかりに…！

ログを取るために寄つたまでは良かつた。しかしログが溜まるまでの暇潰しが余計だつたと後悔するアルマ。

どうして彼がこんなに取り乱しているのか。それには話を少し遡る事になる。

この島でログを取りに来る海賊は少ない。

『鬼ヶ島』

一般世間では鬼が住まう島、等と呼ばれているが、最近は質の悪い海賊がログを取りに寄つたりしているのが現状だ。

「ハフトトト」………

そんな中、一人の海賊が商売をしていた女性の店で騒ぎを起こした。

「それ…」

「お、おー！　お前達やめーー。」**ヒ**を何処だと思つてるー。」

ドガシャーン!! と盛大な音を起して商品が地面に散らばる。

「ああん?  
えけどな」  
白ひげ海賊団の私有地だっけか? そんなもん関係ね

「おうともや！白ひげなんぞ今じゃただの老いぼれだら、来たら来たで呪き潰してやる！」

「ちがえねえ！ それやはねー！」

もう三つ手配書をピリピラと見せびらかす海賊。

懸賞金5300万ベリー

『狂言のアルマ』

白ひげに対する恐怖すら無いほど強者ののか、はたまた真正のバカか。そんな一団が店で騒ぎながら語りだした。

「いへんなお宝が眠つてゐる島、見逃すほど俺達は馬鹿じやないぜ」

「まつたぐだ。何ぞ周りの奴ら氣付かないんだ?」

「アレッてんだろ? 尊の怪物に」

辺りにいる住人や海賊を見て嘲笑うアルマ海賊団。

「噂に聞く”鬼”。必ず捕獲するぞ!」

船長アルマの掛け声により、つまおおおおおーーと声を上げる一団。

『鬼ヶ島』と名付けられた島。

その名を付けられた由来を知る者は少ない。

曰く

白ひげがお気に入りの為、常に鬼のよつな強者が島を警備している。

曰く

島の何処かに鬼が住んでおり、島を守っている。  
等々…

彼等は島に『鬼』というものが存在していると当たりを付け、捕獲して売り飛ばそうと考えていた。

謎の生物、『鬼ヶ島の鬼』等と張り出せば嫌でも人が集まるだろう。

ログを取るついでに、そつ計画立てていた。

辺り構わず目茶苦茶にするその海賊を、住人達は内心怒りを覚えるが黙つて見過ごす事しか出来なかつた。

三年前の惨劇が頭を過ぎるのだろう。

誰ひとりとして動く事が出来なかつた。

「やめひーーー！」

と、その間に割つて入つた一人の少女が店の女性を庇う形で前に出る。

「なんだガキ？　この俺様のやることに文句でもあんのか？」

船長のアルマが口を開き、少女を威圧する。

しかし少女も引かずに喋り出す。

「ああむわー。お前ら、こんなに散らかして帰るつもつか！」

「おつと、くく。お嬢ちゃん、これは迷惑料みたいなもんだ。本當だったら店側の命を貰いかねないところを、この方はこの程度で済ましてやううと考えていたんだよ？」

アルマと少女の間に子分の男が割って入り、嘲笑いながら説明を足す。

しかし田の前の少女はブルブルと震えていた。

「見りー。お前にビビッて何も言えなくなっちまたじやねえか！」

「馬鹿言わんでくださいー。俺の何処が怖いつてんですか！」

『わやはははー！』と下品に笑う声が辺りに響くと同時にプチんと何かが切れた気がした。

「最つつづ低ーー！」

田の前にいた海賊の股間に掛け蹴り上げる少女。

グシリヤツ！ と音をたてると同時に固まる子分の海賊。  
周りにいた海賊達が「何しやがんだこのガキ！」と騒ぎ立てる。  
が、

「ガキじゃない！ オレの名前はコウだー！」

一向に引けうとしない田。

くらつた当人に目を向ければ立つたまま氣絶してゐる様だ。白目を向いている。

それに氣付いた三ウは、あ、いけね。と小さく言葉にし、海賊達に背を向け逃げようとしたが一人の人物にその手を捕まってしまった。

三ウが後ろを振り返ると船長のアルマが目の前にいた。

三ウのその顔をまじまじと確認するとアルマは口を開いた。

「ほう。将来が楽しみだな。あと十年程歳を重ねていたら、俺の女にしてやっても良かつたんだが」

「つーだ、誰がお前なんかにつー！」

再び股間田掛けて蹴り上げるが今度は阻まれる三ウの蹴り。

「つー？」

蹴りを防いで見せたアルマに対し、「流石船長!」等と声が飛び回る。

「本当に残念だ。ここで、死んじまうんだから」

アルマが脇に抱えていた銃を手に取り、三ウ田掛けて構える。

「キューんー」と銃声が響くと同時に辺りからは悲鳴が飛び回る。

反射的に後方に吹き飛ぶヨウの体。

瞬間その場に飛び付く形で一人の少女がヨウの顔に抱き着いてきた。

「ヨウ！ 僕を残して行くなんて！ うわーーん！」

倒れてるヨウを中心に赤い水溜まりが広がる。

泣き続ける子供を残した僅かな静寂の後、何処からか「や、殺つちまつたか？」と声が聞こえたかと思つと

「流石だぜ船長！ 相手が女、子供でも容赦なく殺せるなんて！ よつ！ 」の極悪非道！』

「ああ…。気分が良くなえ。飲みに行くぞ野郎共！」

その場を去るひつじするアルマ海賊団。

夜の鬼捕獲に意氣込む海賊達は酒場で一杯やひつと移動しようとした時だった。

「……」

「なんだ小僧？ 僕のやることに文句でもあるのか？」

「わわわわわ！ 坊主、やめとけ！ 前も殺されちゃうわ！」

白髪の少年が木刀を片手に、その場でアルマ海賊団を見ていた。

「……」

「いつまで見てんだガキ？」

「……お姉さん大丈夫？ はい、これ」

「あ、ありがとうシオン君。で、でも……」

騒ぐ海賊を無視して辺りに散らばった商品を拾うその子供が気に食わなかつたのか、海賊の一人が盛大な舌打ちをした。

「なんだこのガキ！ 船長を無視するたあい一度胸してるじやねえか！」

「……もういい。ほつとこに行くぞ」

「でも船長！」

「酒が飲みてえんだよ。いいからほつとけ」

「ちーー」と舌打ちをした子分の男は「命拾いしたな」と捨て台詞を言つてその場を後にする。

ガヤガヤと移動するアルマ海賊団。

その背後で白髪の少年はポツリと口にした。

「…あまつ、この島で騒ぎを起さない方がいいです」

その言葉は、果たして海賊達に聞こえたのか。酒場まで移動する  
アルマ海賊団。

\* \* \*

そして夕方まで飲みつけた海賊達は深夜、鬼が出ると噂の森へ  
と足を進める。

酒の力か夜行性の影響か、気分も高まり店から森に直行し、目的  
の森を目の前にしてその口元を吊り上げる三十人程のアルマ海賊団

「ああ。鬼！」この始まりだ

船長アルマの言葉をスイッチに、うおおおおおおおお…！…  
響く声。

気分も最高潮に達した海賊達は武器と松明を持ち続々と森に入り  
込んでいく。

\* \* \*

森の中を移動して20分程。  
ふと違和感を感じるアルマ。

辺りを見回し、仲間達も特に気にしていない様子なので自分の気のせいかと思い再び足を動かす。

流石にこれだけ探して何の痕跡も見付からない事に不信に感じたアルマ。

そう思い、それから更に10分程移動していたら、前方の茂みからがさりと音し、警戒体勢をとる海賊達。

辺りに緊張と恐怖が支配する。しかし予想に反して出て来たのは少女だった。

その姿に毒の氣を抜かれた様に警戒心を解く海賊達。

しかし一人の海賊が震えながら少女を指差し口を開いた。

「お、おい、あれ……昼間に……船長が撃ち殺したガキじゃねえか……？」

その言葉が聞こえたのか。皆が警戒心を高め銃を少女に向け構える。

興味をそそられたアルマは耳を傾け様としないで少女を見詰めていた。

「…此処へ、何しに来たの？」

唐突に口を開いた少女。

普通に喋った事が以外だったのか。皆の気が僅かに緩む。

「あ？ なんだ、その…鬼」「だよ鬼」「」

自らの恐怖を紛らわす為か、一人の男が嘲笑しながら質問に答えた。

「…」んな、大人数で？」

「そうさあ。 それで、俺達全員で鬼を追い掛けてるって事だ」

「… そりなんだ。 でも 「

不意に、くつくつと笑う少女。

「 鬼ごっこ、って普通鬼が追い掛ける側、なんだけどね」

その言葉を最後に少女はその場から消えた。

突然の事にざわめくアルマ海賊団。

その瞬間を見ていた仲間が

「消えた？」

「や、やつぱり本物…？」

等と口々にし仲間達が取り乱している中、先程の違和感に気付いたアルマ。

「 人数が、減っている…？」

始めは三十人程いた仲間が今では二十人程に減っている事に気付いた。

「つぐ！ 皆一力所に集まれ！」

一度散らばっている仲間を一力所に集め、身の確保を計りうと声を掛ける。

そして言われた通りに集まろうとするアルマ海賊団。

一力所に集まつてしまえば、とつあえずは安全だろ。そう思つた時だった。

ガツン！ と鈍い音が響き、それに合わせる様に仲間の一人が倒れた。

「つぐ！ 出やがつたな！ 殺しても構わねえ！ 撃て！ 撃てえ！」

アルマの掛け声を引き金に銃声が絶え間無く響き、辺り一帯を銃弾の嵐が襲つ。

### 一時の静寂

しかし林の奥からはガサガサと何かが近付いてくる音が聞こえてきた。

そして再び鈍い音が響くに連れ仲間が叫びながら倒れていった。

情況は少しづつ悪くなつていけばかりでありそんな光景を目の当

たりにした生存者達は次第に恐怖に蝕まれていった。

「船長！ 幽靈が相手なんて勝てっこねえよ…」

「バカ！ 相手は鬼だ！ 幽靈に実体なんてねえだろ…」

しかし仲間の言ひことも重々承知している。流石にコチラが不利と悟ったアルマは舌打ちをし「いったん撤退する！ 各自引け！」と命令を下すと我先にと来た道を引き返した。

仲間達の叫びを、一身に浴びながら…

そして、気付けばただ一人になっていた、という訳だ。

「あ…ああ…」

逃げる足を止めるアルマ。

そんなアルマの目前には天然の岩壁がそびえ立っていた。

森をさ迷い、ただ逃げる事に必死だったアルマは暗闇のせいで気付けなかつたのだ。

来た道を戻つた筈だったが、道を間違えてしまつたか！？ と自身の愚かしさに内心舌打つ。

もう逃げ道は無いと悟つたアルマは背後から 来る追跡者を迎撃とうと銃を構える。

ガタガタと自身の手が震えており照準が定まらない、が

（茂みから姿を見せたら、その額に風穴を空けてやる！）

しかしその追跡者達はそれを分かつていたのか周りの林からは出て来ず、ガサガサと動き回りながらアルマを追い詰めていた。

「つち、畜生！」

ドキュン！

出て来ない追跡者に痺れを切らしたアルマが茂しげみに向かって発砲する。

すると茂みの方からドサリと何かが倒れる音がした。

手応え有りだ！

そう思つた時だった。

突如、上空から盛大な殺氣を感じ、ハツと見上げれば既に遅く、目前には影が迫っていた。

「つぎやああああああああ！」

その白髪と鬼の形相が目に入った時、アルマは力無く崩れ落ちた。

アルマの意識が暗く染まる中、彼は確かに聞いた。

『鬼』達の、雄叫びを。

\*\*\*

「「お／＼」」

淡泊に響く声。

そして白髪の鬼と賞金首の男を中心に集まる鬼の子供達。

白髪の鬼が自身の顔に手を掛け、その顔をスッと取り外した。

一般世間が騒ぎ立てている鬼の正体。

それは鬼のお面を付けた子供の三人組だった。

「やつたな！ シオン！！ これで何人目だ！？」  
「今回も何とか倒せたね！」

シオンが『狂言のアルマ』を仕留め、安全だと分かないと、茂みの奥からコウとミニアが現れた。

毎間に打たれた箸のコウはぴんぴんしていた…

「コウ！ 僕を残して行くなんて！ つわ～～ん！」

毎間。

コウはアルマに撃たれ、反射的に後方に倒れるがミニアが抱き着いたコウの口に手を当て暴れ出さない様にした。

(おとなしくしてーー)

そして倒れてるコウを中心赤い水溜まりが広がる。が、それは水とケチャップ等を混ぜ合わせた物だった。

(ちゅー！ ちゅー！ リアかけすぎーーー)

(うひゅ しゃこひ)

田頃の怨みだと叫ぶばかりにコウに特製ケチャップをかけるリア。

そして立ち去った海賊達を確認したコウ達は起き上がる。

「うえ～。口の中に入っちゃったよ。つていつか！ どんだけかけてんだよ!!コーアー！」

「いや～。あれくらいの方がリアリティーあるじゃん？だから」

怒るコウをあせす様に宥めるコロア。

「コウ。怪我はなかつた？」

近くにいたシオンがソッココウに近付きタオルを手渡す。

「お。ありがとシオン。それと、さつきは助かつた」

お礼を言いつつコウのタオルを受け取るコウ。

コウの言つやつやとは、彼女に当たる筈だった銃弾。

シオンはソレを木刀を用いて居合の型から飛ぶ斬撃を放ち、ピンポイントで当てる起動を僅かに逸らしたのだ。

斬撃はまだ小規模なものだったが、一発の銃弾を反らすには充分な威力だった。

この二年でビスターとマルコから色々な技術を教わったシオン。しかし、その話はいはずれた機会に。

「本当に無茶するよね。いくらあの人達が許せなかつたからってコ

ウが死んじゃつたら意味ないんだから。もつと自分の命は大切になよ？」

「つるさいなあ。しょうがないじやん。気付いたら体が動いてたんだから」

説教氣味に言つシオンが氣に入らなかつたのか、むくれながらそつぽを向き、反論するヨウ。

しかしシオンはそんなヨウの顔に手を添え、自身の方に向き直させる。

「ヨウに死なれたら、俺も悲しいだから……本当に無茶だけはしないで。約束」

「う、うん。わかつた。約束」

小指と小指を交わし、指切りをする二人。  
そしてヨウは顔を赤く染め上げ素直に俯いた。

「つりや」

そんな空氣が面白くなかったのかヨウの顔に再びケチャップをかけるミリア。

ケチャップぱりに顔を赤くして怒り出すヨウに対し笑いながら逃げるミリア。

そんな光景を見て微笑むシオンだった。

「そんな事より！ どっか今撃たれなかつた！？」

「ん？ ちょっと僕の足に掠つただけで対したことないよ。こんなのはしばらくしたら勝手に治るから」

そう言いつつ撃たれたであらう右足をひた歩くミコア。

しかしそんなミリアをシオンが引き止め、ズボンを切り裂き撃たれた場所を応急処置で傷を塞ぐ。

「帰つたらちやんとした治療を施さないと、後々大変なことになつちやうよ」

心配性は母親の影響からか、余計に気をつかつてしまつシオン。

「…あらがとう。シオン兄ちやん」

ミリアは僅かに頬を染め、俯きながら答える。そんなミリアを少し嫉妬を含んだ視線で見詰める三ツ。

「まあ。向こうが思う通りに混乱してくれたから、今回も倒せたけど…あんまり調子に乗るとそのうちもつと痛い目に会つから、一人とも気を緩めない様にね」

真剣な眼差しで一人に告げるシオン。

「で、でもさでもさ！ シオン兄ちやんすゞじよー！ 大人の海賊を相手に何回も倒してるんだからー！」

「…それは人間急所を突けば倒れるさ。それに相手は普通じゃなかつた。もしさつきの奴と正面からやる」とになつたら、勝てるかどうか…」

そんなシオンを見兼ねたヨウは呆れた様に口を開く。

「よく言つよな。だつて今回の相手、懸賞金5千万以上の海賊だぞ？ ただ隙をついて倒せる様な相手じやないつて」

その一つ名が示す『狂言』を発する前に片が付いたので今回も倒すことが出来たのだが。

「まあ…いいけどさ」

今回はじめてと云つように話を区切るシオン。鬼のお面を再び被り、賞金首の男を縛り上げる。

この鬼のお面だが、実は最近マルコ達からワノ国と言つ場所の土産で貰つたものだつたりする。

なんでも、俺達にピッタリだとか言つてたが、まあ貰えるものは有り難く頂いた。

それからは暴れる海賊を相手にする時は襲つた海賊に顔がバレな

い様にいつも身につけていた。

\* \* \*

シオンが賞金首の男を引きずりながら出た先は港だった。

「そんじゃシオン！ いつも通り海軍への引き渡しよろしく！」

「ん。じゃあ島は任せたよ、一人とも。それと危ないと感じたらすぐ海賊から逃げなよ」

縄で縛られたアルマを木箱に詰め込むシオン。

賞金首は暴れ出さない様に催眠術を掛けてから縄で手足を縛り、口には布を巻き付け、その頭にズタ袋を被せ木箱に入れている。

相手は高額の賞金首なのでやり過ぎって事は無いだろ？ し海軍基地に着くまでに暴れ出されたら堪つたものではない。そう考えた上で厳重な程の拘束を施している。

中に入ってる人はなかなかに苦しい思いをしていると思うが、どうせ島には一日程で着くので我慢して貢つてる。

催眠術の腕だが、三年前より僅かながら効き目が増してゐる。

そして例の木箱を引きずりながら待ち合っていた商業船のクルーの元に向かつたシオン。

「任せろー。何が何でも島は守るー。」

「こつてらつしゃーいー！」

手をブンブンと振る一人。

見た目と中身は無邪気な子供達だが、実力は白ひげ海賊団の折り紙付きだ。

なんだかんだで頼りになる仲間を残し島を離れる。

「それじゃま、行きますか…」

誰に言うでもなくポツリと口にし、今ではすっかり顔なじみになつた商業船に乗せてもらい別の島に向かう。

とてもじゃないが、まだ一人での航海など出来ないので、今後航海術を覚えられる様に少しづつ勉強していくことを考えている。

\* \* \*

シオンが島から離れて数刻。

日が昇り始めた港町が僅かにざわついていた。

「おい、なんか向こうの森の方で海賊の一昧がボロボロに倒れていったみたいだぞ」

「またが、ここ最近町で騒ぎが起るといつもだな」

白ひげ海賊団が離れてからも度々町で問題を起こす海賊団を滅ぼしてきたシオン達は密かに活動して島を守っていた。

そんな行動を見兼ねた白ひげ一味は、ある（・・）意味からその島に名を付けた。

### 『鬼ヶ島』

そう名付けられた島の由来は

三年前から急激に減った島を守る男の大人に代わり、餓鬼が守護する島。

そんな理由から来たりしていた。

その話しに尾鱗が付き、一般世間では妙な噂話が飛び回っている事に、シオンが気付くのはわりと近い内だつたりする。

## 第十六話　鬼ヶ島（後書き）

はい。一ヶ月を大幅にオーバーしてしまいました(・\_・;)なるべく早く更新したいんですが、なかなか上手くいかないもんです。o\_o;

次の更新は訳あっていつもと遅くなるかもです。スミマセンー。m(\_)

しかし感想はいつでもお待ちしております！

では「これからもーD越える者ーを宜しくお願ひ致します！」m(・\_・)

第十七話　出念ニモ（前書き）

休日に

朝に夢書く

既に朝

心境

え、もう朝ーーー？

## 第十七話 出会に武

無事島に着いたシオンは船のお偉いさんに送つて貰つた事に御礼を言い、木箱を片手で引っ張りながら船を降り、そのまま目的地へとその足を進める。

ズルズルと引きずる中、周囲からはチラチラと視線が集まる。建前としては離れた島から物を渡しに来た少年。という事になつてゐる。

そして目的地の一軒家を目前に、その扉を開ける。すると家中からはアルコールの匂いが鼻を衝いた。

「……」んにちわ…。これ、いつもの…

「……ん…ん…よう。お前か」

今まで寝ていた男は大きな欠伸あくびをして「チラを見ると近付いてきた。

「今日はいったいどんな奴が…ってコイツ『狂言』じゃないか！？」

ズタ袋を取り外し、手配書と木箱の中の人物を男に確認させると、さつきまで眠そうにしていた目を大きく見広げ驚愕する。

中の人物が目を覚まし、ガタガタと動き出す。何やら喋りたそうにしてるので口に加えてる布を取つて上げた。

「ぶはつ！ た、助けて下さい！ 怖かつた！ ほんとに怖かつ

たー！ お願ひです！ 何でもしますからどうか命だけはーー！」

「落ち着け！ とりあえずお前は海軍に直行だ！」

- 1 -

目の前の男に死刑宣告とも取れる様な言葉を聞かされ固まる海賊。

憐れな海賊の叫び声が木靈した。

六

シオンが賞金首を渡した男は一応賞金稼ぎで、初めてこの島に来た時から世話になつてゐる。

す。

捕まつてゐるとはいへ危険なことには変わりないし、口止め料も含めて色をつけてゐる。

こんな子供が賞金首を引き連れて海軍に乗り込んだら、まず間違  
いなくマークされる。

俺は世間に注目されて生きたい訳ではない。

なので誰かに代役を頼む事にした。

そんな時に出会つたのが先程の男であつた。  
男は名前も欲しいし金も欲しいと、常日頃から思つていた様だつた。

そして今回の様な話を持ち掛けたら、即了承してくれた。

金額も受け取りお土産でも買って帰ろうとかと町に足を向ける。  
しかしその時、妙な話を小耳に挟んだ。

「おい、聞いたか？　またあの島で被害者が出来たつてよ」

「またかよ。まったく、連中も憲りないとこつか、馬鹿とこつか…」

「物好きだよな。人間行くなつて言われたら行きたくなる時とかあるし」

「俺は『めんだね。危険つて分かつて行くなんて、馬鹿のする』  
と/or」

何やら興味深い話しをする海賊連中。  
気にせず買い物を続けるが自然と話し声は聞こえてくる。

「まゝた例の島で暴れた奴らが消えたとや。どんなトリックだ？」

「そんなの決まつてんだろ。噂の化け物に、やられちまつたのさ」

流石に大海賊時代と言つた所か。いやこの場合は大怪物時代か？

どつちにしても物騒な世の中だ。

自分とは関係ないと判断し、その場を離れ様としたが次の一句で足を引き止めてしまつた。

「しかもな、噂に聞くと白髪の鬼が一番ヤバいらしい。何人やられたか分からんが、捕らえた相手を丸焼きにして、喰つちまうんださ。

運良く生き残つた奴らが氣絶する間際に見たのが、その特徴的な白髪なんだとよ」

「げげ！ マジかよ！？ とにかく俺達は別の島でログをとひつ。  
『鬼ヶ島』なんかにいつてられるか！」

「……」

その場を離れるシオン。

俺そんな事してないし！ 人だつて食べた事ないし！ それに問題起こすのは何時もそつちからじやん！

なんだこの尾鱗が着きに着いた噂話は！？ と一人内心で愚痴るシオン。

(俺の味方はお前だけだよ『沁』)

そのまま『沁』と話しながら町を歩き、ある程度お土産を買ってから再び商業船に乗せてもらい、島を出る。

島まで一日も掛かるんだ。  
気長に過ごそつ。

\* \* \*

あれから一刻程海を進んだ。

そのまま甲板で心を安らがせる様な晴天に輝く空の下、海を眺めていれば遠くの方で大きな水しぶきが……なに……あれ……？

大きな水しぶきが上がったかと思えばその場所から何かが近付いて来てる事に気付いた。

海の中に居る巨大なソレは、ついに船下を通過した。途端

ズズン！！ と船が大きく揺れた。

何事かと船内へ入り階段を降りれば大きな穴が空いていた。

「う……そ……」

そこからは海水がドバドバと進入してきて船内を浸蝕しよう押し寄せてくる。

しばらくすると船員の人達が来て、透かさず穴を塞いでと作業に取り掛かる。

…こんな事仕出かすのつて…やつぱり…

「か、か…海王類だ————！」

甲板の方から声が聞こえた。

慌てて外に駆け出れば、そこには全長50メートル程の海王類が船の周りを徘徊していた。

この船はそこそここの商人船でもあり、今の御時世だ。当然護衛の人達が乗っているし大砲も積まれてる。

さつそく海王類に向かつて大砲を撃ちまくる護衛人達。だがいくら当たつても海王類に致命傷を与える程のダメージは与えられない。

しかも反撃を受けてしまい再び船に衝撃が走った。

音がした場所へ向かえば、今度は船の正面側が大破しており大きな風穴を開けていた。

しかし幸いなことに海面のギリギリ上に穴が空いていたので海水

は入つてこない。

他の場所で手一杯のせいか人も寄つて来ない。

足元にあつた剣を拝借する。

表では護衛の人達が銃や大砲を撃つて応戦している。

調度良いと思い、その場で居合の形から飛ぶ斬撃を放つ。が、海王類の皮膚が僅かに斬れた程度で致命傷を与える程の威力は与えられなかつた。

元々こんな子供の体ではやれる事は限られているのだ。  
僅かでも致命傷を与える、追い払うしかない。

考えを纏め、やることを決める。すると海王類は一度船から離れたかと思えば、船の正面から向かつて来る。

このままでは正面衝突だ。

狙いをすまして斬撃を放ち、海王類の目玉にピンポイントで命中させる。

すると今度のは効いた様で雄叫びを上げながら遠退いて行つた。

なんとか思い通りに事が進んでよかつた。

ホツと一息着き、海王類が去つた方角を眺めれば、海上を走るモノが……げつ……

途端絶句する。

先程の攻撃でブチ切れたのであるづ。

船から一度離れた海王類が再び近付いて来たのだ。

今度は一発で船を沈める氣か、勢いをつけて向かつて来る。

流石にあれを喰らつたヤバい…

そのことと船員達も氣付いたのだろう。休まずに大砲を撃ちまくる。

しかし依然と速度を落とさずに向かつて来る海王類。

はあ…と諦めからか、自然と溜め息が零れ出た。

左手を中心突き出す。

『使うのか？ 主？』

(うん…流石に今アレを止めるには、ね)

そして、意識を左手に集中させ イメージする。

最近は慣れ始めた刺激。

チリチリと脳隨を痺らせる刺激は痛みとは違う。

自分の中にあるその最愛の刀をイメージして、『創り』上げる！

一瞬の光が迸った。そして先程まで空だったシオンの左手には、

最愛の刀が握られている。

そしてその刀を先程と同様居合の形から抜き放ち  
り出す。

斬撃を繰

瞬間、斬撃は海王類の頭から尻尾にかけて、真つ二つに引き裂き、  
血の雨を降らせる。

上方では再び歓声が上がった。

『沁』を振った後の右腕は、ダラリと力無くぶら下がる。

『もう少し力の加減が必要だな  
筋肉断裂。』

今回はこの程度で済んだが、初めて『沁』を振った時はもっと  
酷かった。

数年ぶりに見た刀身の美しさと、『沁』に使用の許可を貰つた事

で、嬉しさのあまり加減が出来ずに振り回してしまったのだ。

正直、後悔した。

この健康ボディを駆使しても次の日は一日動けない程のダメージ  
が蓄積したのだ。

体を動かそうとすると、そこらがしこに激痛が走った。

これからは、無闇に『沁』を振るわないと決めていたが今回の様  
な時は仕方がないと言えよう。

正面にある海王類の死体の傍を、直ぐさま離れようとする船。  
なんでも死んだ海王類の血の臭いでまた別の海王類が近付いて来るらしい。上方からそんな話しが聞こえた。

そして海王類の死体をそのまま通り過ぎようとしたら以前に何か浮いてる…？

人…？

人の、しかも子供の上半身らしきものが海面に浮かんでた  
なんとか手の届く場所でその子供を引き寄せ船内に引っ張り上げる。

びちゃり！ と引き上げたモノは

上半身は子供のもので、下半身は…魚？

「これって…人魚？」

「…う…う…」

気を失つてた人魚の子供は引き上げた衝撃で目を覚まさうとしてた。

すう と開かれる瞳。

その瞳が「チラ」を見据え、固まる人魚の子供。

「…！」んこちわ

とりあえず挨拶を交わし怪我はないかと聞こうとしたら

「ににに！？ 人間――――――？」

叫ばれた。

人魚は慌てて起き上がり、退路は無いかとキヨロキヨロ周りを見渡す。

そしてピョンピョンと飛びはね穴から海へ飛び出そうとしていた。

「今出てつたら危険だつて」

飛び出そうとしていた人魚の手を取り、引き止める。

「は、離して…」

「別に離しても良いけど、よく海見た方が…」

辺り一面の海は海王類の血で、真っ赤に染まっていた。

「つひー…？」

そのことに気付いた人魚の子供はその場にへたりこんだ、と思つたら泣き出してしまつた。

\* \* \*

「…落ち着いた？」

「ぐすり…うん。ありがとう。でもあなた、私がこわくないの？」

「…別に怖がる理由が無いしね」

それにそっちの方が怖がってた気がするんだけど…  
と口にしたかつたが止めといた。

「…あなた…お名前は？」

「…シオン」

「そつか。なら、シオンちんだね」

えへへ、と笑いながら涙を拭う人魚。

「私はケイミー。よろしくね」

ケイ、ミー……？

シャンボディ 諸島でルフィ達に関わる重要な人魚で、その純粹な性格せいかよく海賊に捕まつたり海獣に食べられてしまう人魚。よく友人には、「～ちゃん」と名前の語尾に付ける事から確定的だ。

「でも、なんで君はこんな場所に？」

「…海を散歩してたら海王類に食べられちゃって…」

つまりさつさまであの海王類の腹の中に居たと。……斬れてなくてよかつた。

斬撃の軌道上に居ればまず間違いなく真っ一つになつていただろう。

物語がこのまま進むとして、ルフィ達にひとつこの子は超重要な存在と言つて良い。

「シオンちん… リリハ、ビリハ。」

「よくわかんないけど、グランドラインのビ真ん中つてどいかな?」

「そ、そんな…じゃあ私、もう魚人島には…帰れないの…?」

再び泣き出しあがくなるケイミー。

「ど、とつあえず付いて来たら? 一人でいるよりは安全だと思つし…」

「この子を野放しにしたら、また海王類に食べられそうだし…

「で、でも…わたし人間が、怖い…」

「大丈夫。なるべく人にはバレない様にするから  
怖がらせない様に優しく微笑んで告げる。と顔を赤らめるケイミー。

「わ、わかった。シオンちゃんが言つなら……」

純粹なその仕草がとても可愛いらしく見えてしまい、その頭を優しく撫でると、くすぐったそうだった。

そのままケイミーと戯れてると奥の方から人が近付いて来る気配を感じた。

一旦遊ぶの中止して近場にあつた大きめの樽の蓋を開け中身に海水を汲む。

そしてケイミーの背中と膝周りに手を回し横抱き、俗に言ひお姫様抱っこの体制で持ち上げる。

「わわわっ！？」

突然の事に驚いたのかケイミーの頭から煙が吹き出す。しかし今は気してらず海水の入った樽にソッと入れる。

「じばらぐじ」として

「チラの心境を理解したのかコクリと俯くケイミー。

その樽に先程の蓋を乗せ持ち上げる。  
少し重いが問題なく運べる。

そしてケイミーの入った樽を抱えながら別の部屋に移動した。

\* \* \*

ケイミーを別室に移してから蓋を開ければ、ひょっこりと頭を出すケイミー。

俺はその場に座り込み、先程の怪我を忘れて少し無茶し過ぎたせいか少し息が上がっていた。

「ケガしてるの？」

「うん。ちょっとね」

心配そうに「チラリと伺つケイミー。

「大丈夫。少し休めば治るから」

あまり心配かけさせない様にケイミーに微笑み、そのまま休息をとる。

しばらくしてケイミーが俺の頭をジッと見て居るのに気付いた。

何か付いている？ と聞けば、びつやう違つらしい。

どうしたのか聞けば口もるケイミー。

なんだと言うのか…

しかし意を決した様に口を開いた。

「…シオンちゃん、キレイな髪ね。……その、触つてみてもいい？」

父親譲りだといつ白い髪を褒められ僅かに照れる。了承の意を伝えると、喜びながら髪を触つてきた。

「わあ……近くで見るとほんとにキレイ……」

そして島に着くまでに談笑しながら休息を共にした。

\* \* \*

朝方、故郷の島に到着したシオン。

樽を抱えながら船をおり、ケイミーすぐ戻る事を伝え、町長の家の前に懸賞金と手紙を置き、直ぐさま自宅へと向かう。

今日で家を離れて三日目。

そろそろ母が…ヤバい。

賞金首を討ち取り家を空ける事が多くなった。なのでヨウの家に泊まるといつ理由で度々家を離れていたが、油断出来ない母だった。最初などはヨウの家に居たら、いきなり家に入つて来て簡単な挨拶を済ませたと思えば、そのまま長居して夕食を共にした。

そして、年頃の男女が同じ部屋で寝るなんて破廉恥な事許しません!と講義してきた。

いや、そもそもこんな子供に言つ事でもないだろう。

最終的には「私も一緒に泊りするわー!」等と黙々をこね始める始末。

正直、手におえない。

そのまま母を放置しておべとマウのお母さんが来て、なんとか説得してくれた。

それからも少しずつ家を空け、俺が居ないという事を認識せしめ、慣れさせた。

これで俺が居ない=マウの家にこるという方程式を作り上げ、母とマウのお母さんに催眠術を掛ける。

それからは簡単だった。

母がマウの家に来なくなつた。

来るとしてもちよつとした用事を済ませたら直ぐに帰る程度の常識を植え付けた。

そしてマウのお母さんは、母が訪ねて来た時の対応を任せてくれる。

俺がマウ宅に居ない時は、今は遊びに行つてるから居ないや、今田は外で泊まる等と何かしらの理由をつけて弁護してくれる様に。

しかし、モノには限度といつのがついて、母の限度がその二日なのだ。

三日を過ぎると見つけ出して強制的に連れて行こうとする。

そして捕まれば圧死するかもという程の力で抱き着かれるのだ。

もう既に何回もやられているが、慣れない…

僅かに緊張する中、家の扉をソッと開ける。

「ただい むぎゅう…」

瞬間何かに抱き着かれ軽く窒息しかけた。

「おかえりーライオンちゃん。～～～。」

抱きしめる力を更に強める母。

流石に苦しくなりジタバタと暴れれば解放してくれた。

「シオンちゃんHキス充電完了～～

訳の解らない事を叫んで母である。

しかし氣のせいか肌がいつも以上に潤つていふやうな…まあ今はいい。

お泊りから帰ってきた事を告げ、そのまま家を離れ港の方に向かひ。

\* \* \*

ざわつく港。

まさかケイニーの存在がバレたかと内心焦ったが、どうやら違つらしい。

港には、一隻の船が停泊していた。

しかし、その船が掲げる旗は、普段見慣れている觸體じくたいマークではなく、鷗かもめのマークを、風に靡なびかさせていた

港に着けられた海軍の船を遠目で確認するシオン。  
何事かと様子を見に行けば海軍将校やらその部下が町の人達に話  
し掛けていた。

白ひげの縄張りに、よくもまあ堂々と入つて来れたもんだなあ。  
と感心していると、一人の町人がコチラに気付き指を向け何か言つ  
ている。

そしてその場にいた海軍将校はコチラに向かつて足を進めて來た。

近付いて來るとその海軍将校の姿がはつきりした。  
その男は、海軍本部中将の

「やあ。私は海軍本部中将のモモンガだ。君がシオン君で間違いないかな？」

自ら召乗るモモンガ。

特徴的なモヒカン頭。

原作では度々出て来る海軍で、その実力はグランドラインの海王類を単身で倒す程だ。

「場所を移そう。」二では目立つ

「こんな子供にどんな用事があると言つのか。警戒しつつモモンガの後をついて行くシオン。」

そのまま海岸沿いまで移動すればモモンガが話しを切り出した。

「上からの命令でな。話題の、鬼の捜査に当たれと言われた。君はこの島では博識で通っているのだろ？ 話しが早いと思つてな」

「…そう、ですか。でも鬼なんて本当に居るんですかね？」二の島に来る海賊が勝手に居なくなつただけじゃないですか」

「まあ聞いてくれ。この島は、いろんな商人や旅人達が行き交うグランドラインの交差点でな、活発に利用したいらしい」

「それは、良いことですね……」

今よりも更に町は豊かになるだろう。

「ああ。しかし商人達からは近寄り難い島だと話を聞く…鬼のせい  
でな」

な…?

「皆がこの島をなんと言つてるか、知つてるか? 化け物が住む島、  
罪人を攫う島、等と呼ばれてるんだ」

「…それは…聞いたこと、あります」

つい先日の話しだが。

「そうか……罪人があまり近付かない事は良いんだ。だが商人や一  
般人は化け物が住んでいるという事で恐怖している。だから、我々  
はここ数日、鬼の正体を探つた」

「…暇、ですね」  
「やかましい」

モモンガは持つていたバックから「さじ」と書類を引き出し、コ  
チラに見せ付ける。

「この島で消え、基地に送られて来る賞金首の海賊達を取り調べ、  
その発言の元、皆が口にするのは氣絶する間際の白い髪のみだと言  
う」

そのリストには、今までシオンが男に引き渡した数十人の賞金首  
の資料が記載されていた。

「…しかしながら、この資料に乗っているのは、今話題の賞金稼ぎが捕まえたとされる海賊達のものだ。その賞金稼ぎも別に白髪という訳でもない

気になつて部下にこの男をマークさせたのだが、調べれば調べる程、不可思議な事ばかりなのだよ。

夜は酒場で飲み続け、朝は家で寝て過ごしているそうだ。こんな奴が本当に話題の賞金稼ぎなのか、疑つてしまつたよ。

しかしそんな事はどうでもいいんだ。一番の謎は、何故この島で消えた海賊をこの男が引き連れて来るのか、と言うことだ。

海軍でも手詰まりになり、捜査を諦めかていたんだ… しかしそんな中、ある子供が男の家へ寄つた時だけ、賞金首を引き連れて来るというとても可笑しな法則があつたと分かつた。しかもその子供は証言にもあつた白髪だった、との報告も受けている

一枚の写真を見せ付けるモモンガ。

そこには自分が賞金稼ぎの家へと入つていく写真が収められていた。

「ぐぐぐ。と自分が生睡を飲み込むのがわかつた。

「…別に、白い髪というのは自分以外にも居ますよ…たまに島に来るおじいさんとか」

冷静に、相手に悟られない様に答える。しかし、内心焦つていた。何故こんな資料をたかが子供の俺に見せ付け説明するのか。

「別に『』まかさなくともいい。褒めているのだよ。我々は…君達を」

意味深な笑みを浮かべコチラを一瞥するモモンガ。

…バレている。完全に。

しかも、達といつことはコウヤミニアの事も調べ済みかもしけない…どちらにしろ下手に動けない…

「『鬼』の正体にも驚かされたが、その団結力でこの島を守り、数々の海賊達を倒してきた実力にも驚かされた…」

しかし、まさかたった一人の『鬼』に滅ぼされていたとは思わなかつたぞ」

途端、モモンガの雰囲気がガラリと変わり、身構えるシオン。

「そう身構えるな。コチラとしてもやり合う気はない…ただ『鬼』の実力がどれ程のものか、確かめたかったのでな」

からかわれた…？

しかし戦闘にならなくてよかつた。もしいきなり来られたら成す統べなくやられるところだつた。

海王類を仕留めた時の傷だつてまだ治つてないし、まともな武器だつて持ち合わせていないのだ。

小さく息を漏らしホツとするシオン。

「…そんな君に着いた呼び名。我々は当初『白髪鬼』と呼んでいた」

…何処の安西先生ですかそれ…

「『鬼ヶ島の白髪鬼』なんて、巷がせきではちょっとした有名人だぞ。そこでだ、一つ……提案がある」

「ここまで来ていつたいどんな提案をされると云いうのか？」

僅かに緊張するシンオンは、諦めた様にモモンガを見据えた。

「その力、海軍で発揮させないか？」

しかし予想に反して来たのは思つてもみない一言だった。

「…すいません。云いっている意味がよく分からんのですが」

「ストレートに云いつとだな。そんな君を我々海軍はスカウトしに來たと、云いつて訳を」

「…………」

「海軍は今人材不足なのだよ。来るべき戦いに備えて、少しでも優秀な人材確保に取り組んでいる。

君達が何を思つて行動しているのかは分からん。しかし、君達の行動を調べさせれば面白い事が分かつたのだよ。

島で問題を起こした海賊達が消えた後日、その懸賞金の殆どが必ず島に寄付されている事実に

そんな事まで調べ上げたのか海軍……

本当に暇なんじゃないか？ こんな事に時間を費やすのならもつ

と治安を良くする様に取り組んでほしいんだが…

「もし君が海軍に来ると云つの通り、軍は全面的に島を援護する腹だそうだ。そうすれば厄介な噂は直ぐに解消されるだらう」

何を言つてるんだこの人は。そんな事したら

「そんな事したら、どうなるか分かつてゐるんですか？ 此処は白ひげの縄張りですよ？ 海軍が下手に関われば…」

「そんな事は分かつてゐる。我々はこの島をどうとかしておらぬといふ等とは考えていない。だから世間的に援護するのさ」

つまり、この島にどうて悪影響な噂を解消してくれると…

そうすれば訪れる人は増え、町の利益も上がる。俺達が戦つ意味も無くなる。

「まあ、今すぐ答えを出せとは言わん。

…今日の所はここに引き上げるが、先の話し、考へといってくれよ？」

「

その場を立ち去り、背を向けるモモンガ。

「あの… 一つお願いがあるんですけど…」

「あの… 一つお願いがあるんですけど…」

\* \* \*

海軍はモモンガが戻るとそのまま島から離れて行った。

「シオンン！」

海軍が島から離れ、それを見送つていたらコウが駆け寄つて来た。

「コウ…ただいま」

「おかえり…って、そんな事より！ 今の海軍と何話してたんだよ！」

やれやれと思いながら先の会話を簡単説明した。

\* \* \*

「スカウトそれただ〜！？」

話しを終えたら驚愕するコウ。

「じゃ、じゃあお前…海軍に着いて行つひやうのか？」

子犬の様な田でコチラを見詰めるコウ。

その愛らしさから頭を撫でたい衝動にかられそうになるがなんとかグッと耐える。

「どう、かな？　でもまあ、今はそんなこと考えていないよ。この鳥を離れたくないしね」

「そ、そっか」

どこか安心したヨウガホツと息をつく。

「どうしたの？」

「なつーなんでもねえよーーほら、いつもの特訓始めるぞー。」

そのまま戸口に引きずり稽古場まで向かうシオンだった。

\* \* \*

沢山の人間に囲まれてるせいか、ケイミーは戸惑っていた。

ケイミーが入っていた樽を、シオンが海軍の船へ持ち運んだからだ。

「に、人魚だ！」

「俺、初めて見た……」

「…良い…」

そんな見世物の様な常態で放置されていれば怖くなるのも当たり前かもしない。

まるで小動物の様にフルフルと震えるケイミー。

「か

「 「 「 可愛いなあ～ 」 」 」

しかし、そんな小動物的な行動が良かつたのか海兵一同はのほほんとしていた。

そして心配そうに「チラを見つめるケイミー。

「大丈夫だよ。この人達ならきっとケイミーを送り届けてくれる」

ケイミーの頭を優しく撫でながら告げ、モモンガに引き渡す。

「会つて間もない私が、そんなに信用出来るか？」

「あなたなら、大丈夫だと思つたんです」

原作時、モモンガ中将はハンコックの姿にキュンときたり何気に初な一面も持ち合わせている。

俺は海軍の中でも割と好きなキャラだつたりした。

「不思議な子だ。…… 一つ貸しだぞ……」

「はい…… こつかお返しますんで」

そのままケイミーをモモンガに託し、別れを告げる。

\* \* \*

少年と別れ、遠くなる島に向かつて少女は口を開いた。

「じゃーねー！ シオンちーん！ またねーーーー！」

少女の声は海に木霊した。

## 第十七話　出会い式（後書き）

とこう訳でケイミー出て来たよケイミー。

wiki先生で調べた所、ケイミーとこう子はとても純粋みたいですねw

なんでもその性格から海賊のマクロ一味に30回以上も捕まり海獣には20回程食べられているそうですw

そろそろ原作キャラ絡めていきたい時期でしたのでバンバン取り入  
れて行くよバンバン。

感想等していただけましたら作者のやる気が上がりますので是非お  
願いします^ ^

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4218o/>

ONE PIECE 『D』越える者

2011年9月27日05時47分発行